

1



0057665000

0057665-000

397.1-Ku99ウ

海軍夜話

久住幸作・著

海国社

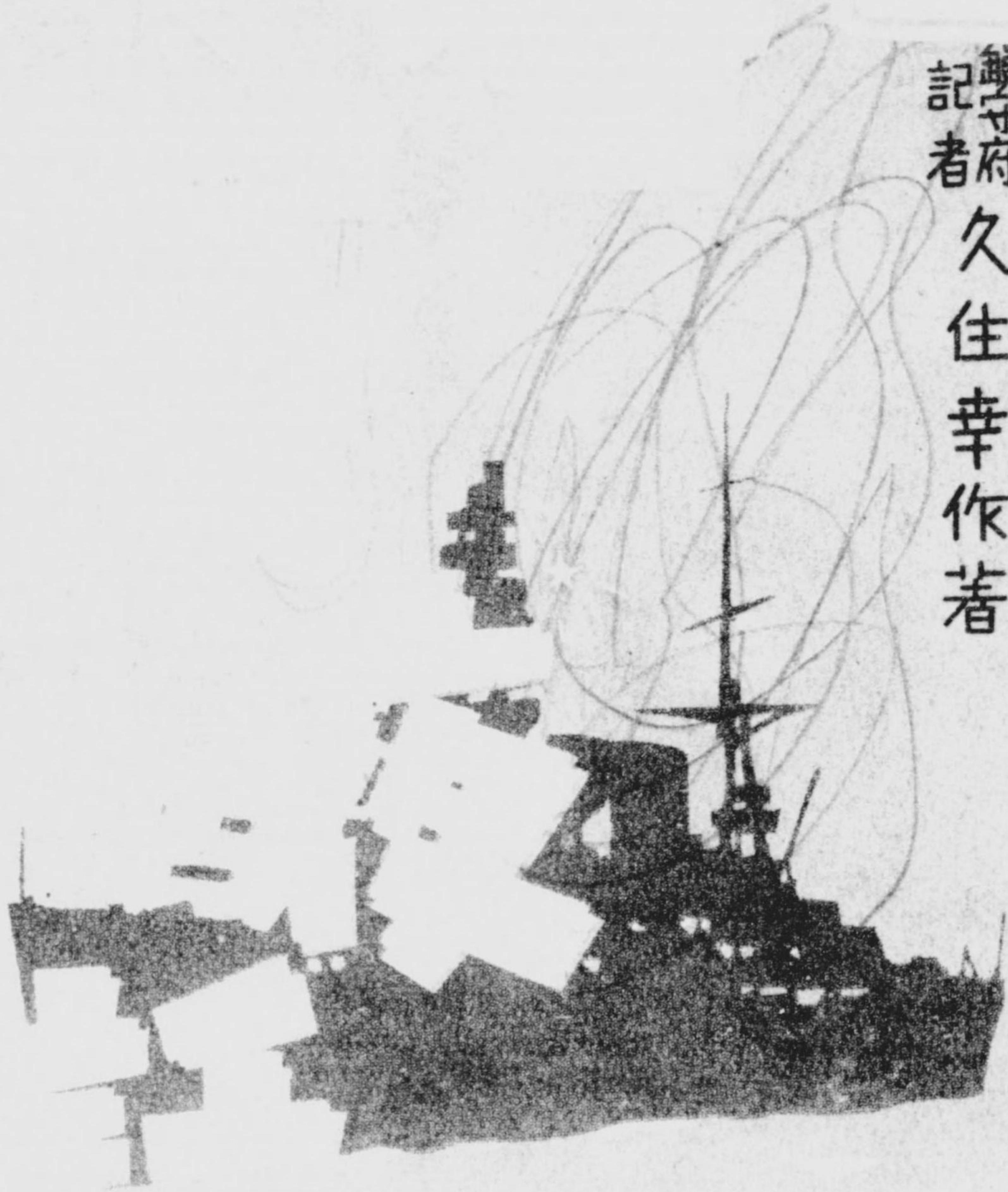
昭和18

AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月21日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

397.1
ku 99

鎮守府
記者
久住幸
著作



行發社國海

474

397.1
KU99

久住幸作著

海軍夜話

海國社刊



人信義重き人
 人義重き人
 人信義重き人
 人義重き人



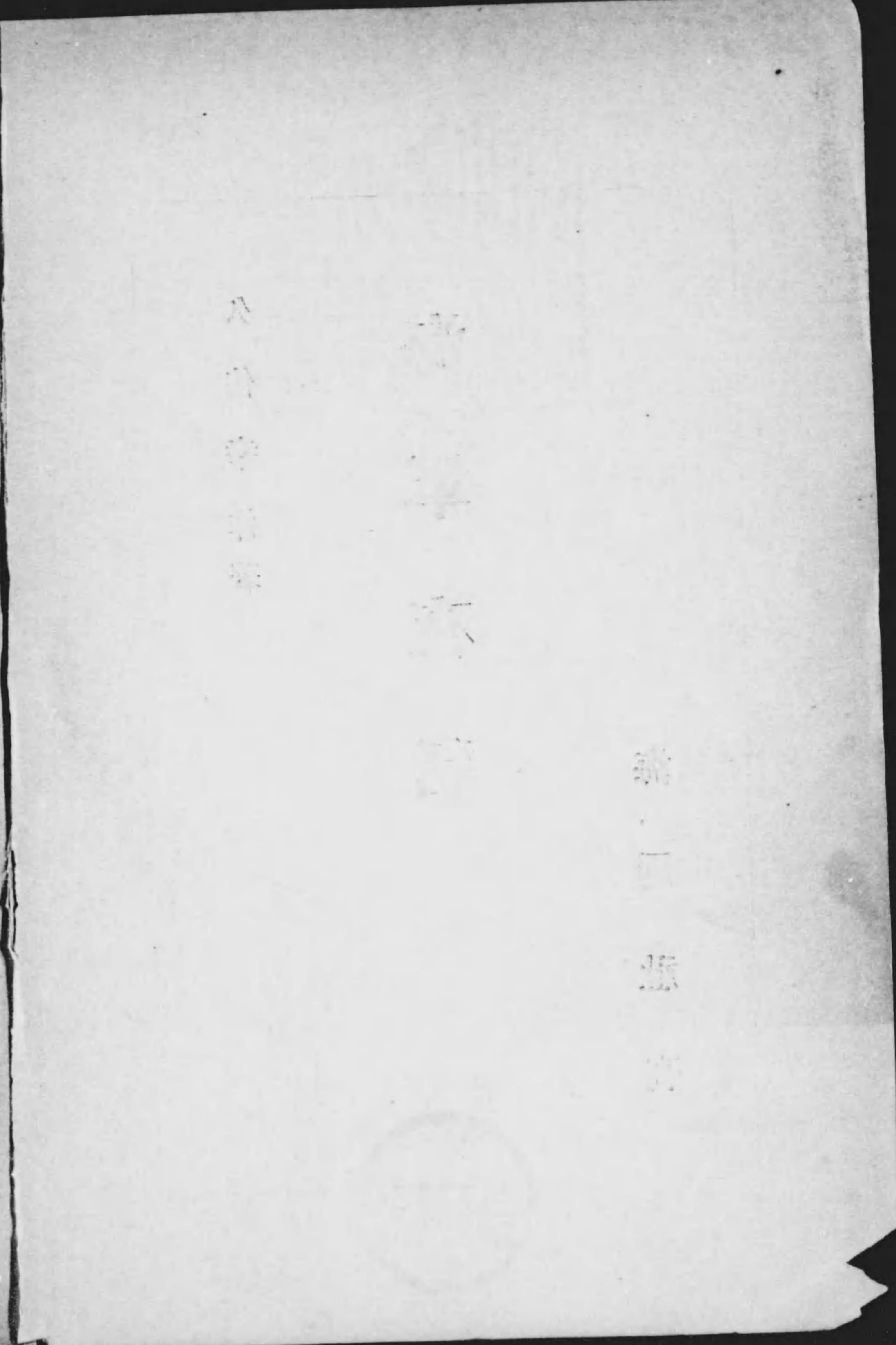
東郷元帥



加藤寛治



右上 東郷元帥
 左上 その筆蹟
 左下 海軍大將 加藤寛治
 右下 海軍大將 末次信正



932
229

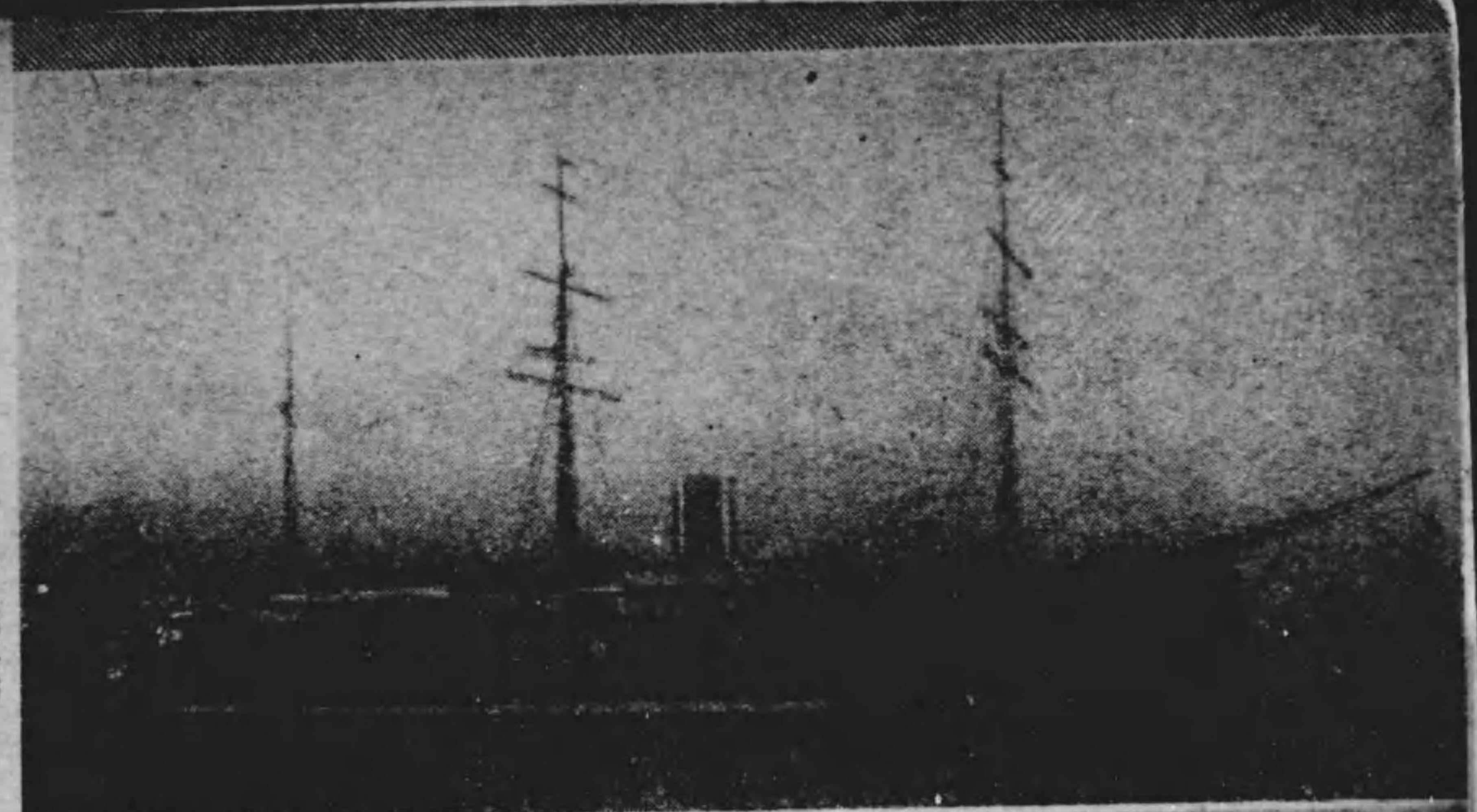
はしがき

『聯合艦隊司令長官は山本五十六大將なり』曩にこの大本營發表があつたとき、『おゝ、やはりさうであつたか、第二の東郷さんの出現だ——。』私はさう思つて、非常に心強さを感じた。大東亞戦争の緒戦、ハワイ眞珠灣奇襲戦の快勝に相次ぐ快勝の續報に『おゝ、帝國海軍はやはり強いぞ。』と、長い間海軍記者生活をつゞけて來た私には、人一倍嬉しく強く感じるものがあつた。

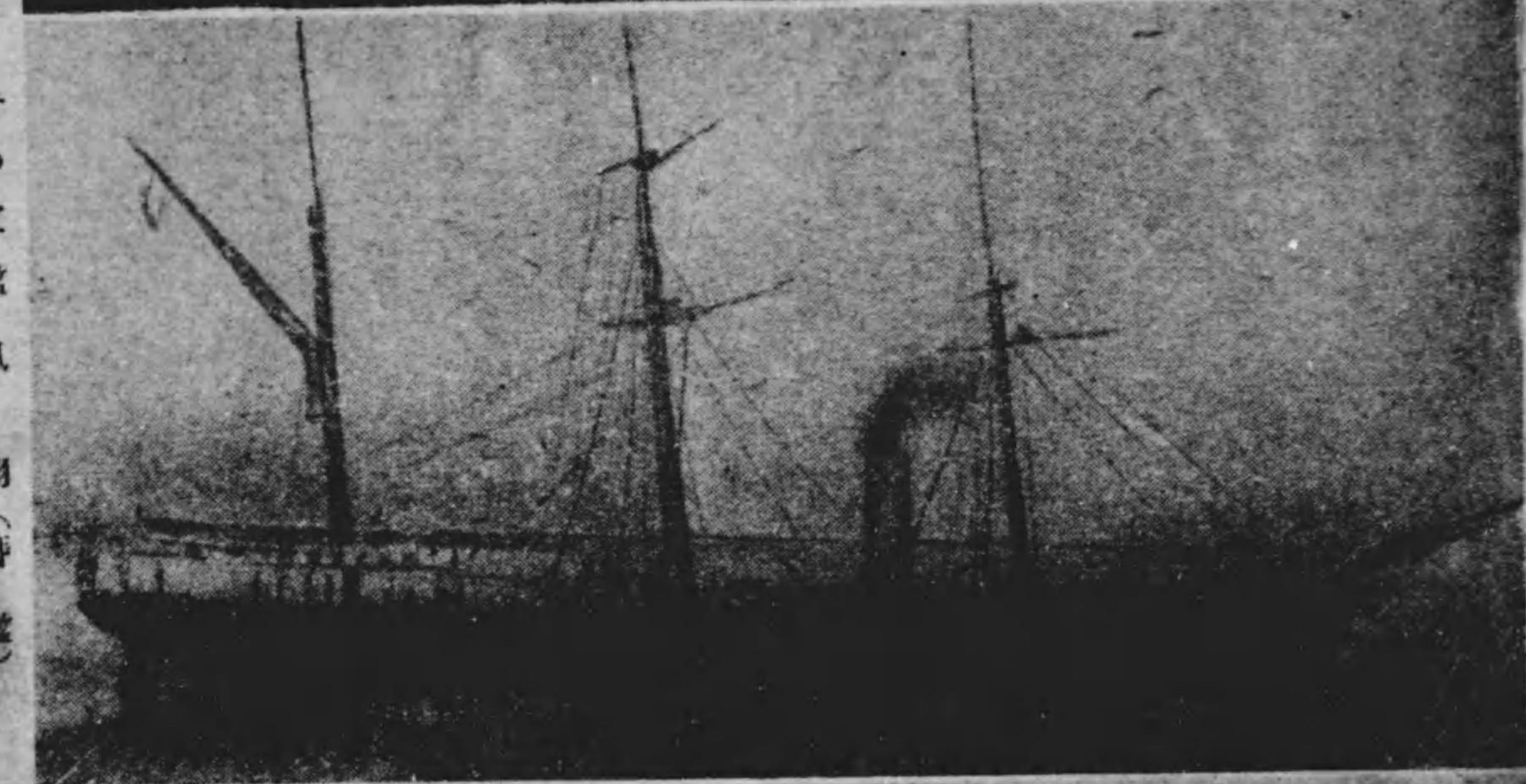


山本五十六大將は、その人となり、また海軍の將として以前から私淑してゐる人物であり、同郷といふ關係などもあり、その傳記を書いて見やうと心がけてゐた。しかし今や『世界の提督』といはれてゐるほどの偉人の傳記など、なか／＼以て際物的に書けるものではない。しかし、この大東亞戦争下にあつて、なにか書いて見たいとふ欲求が自分自身を攻めるのであつた。山本大將の方は他日に譲つて、取り敢ず發表して見たいと思つてペンを執つたのが本書で

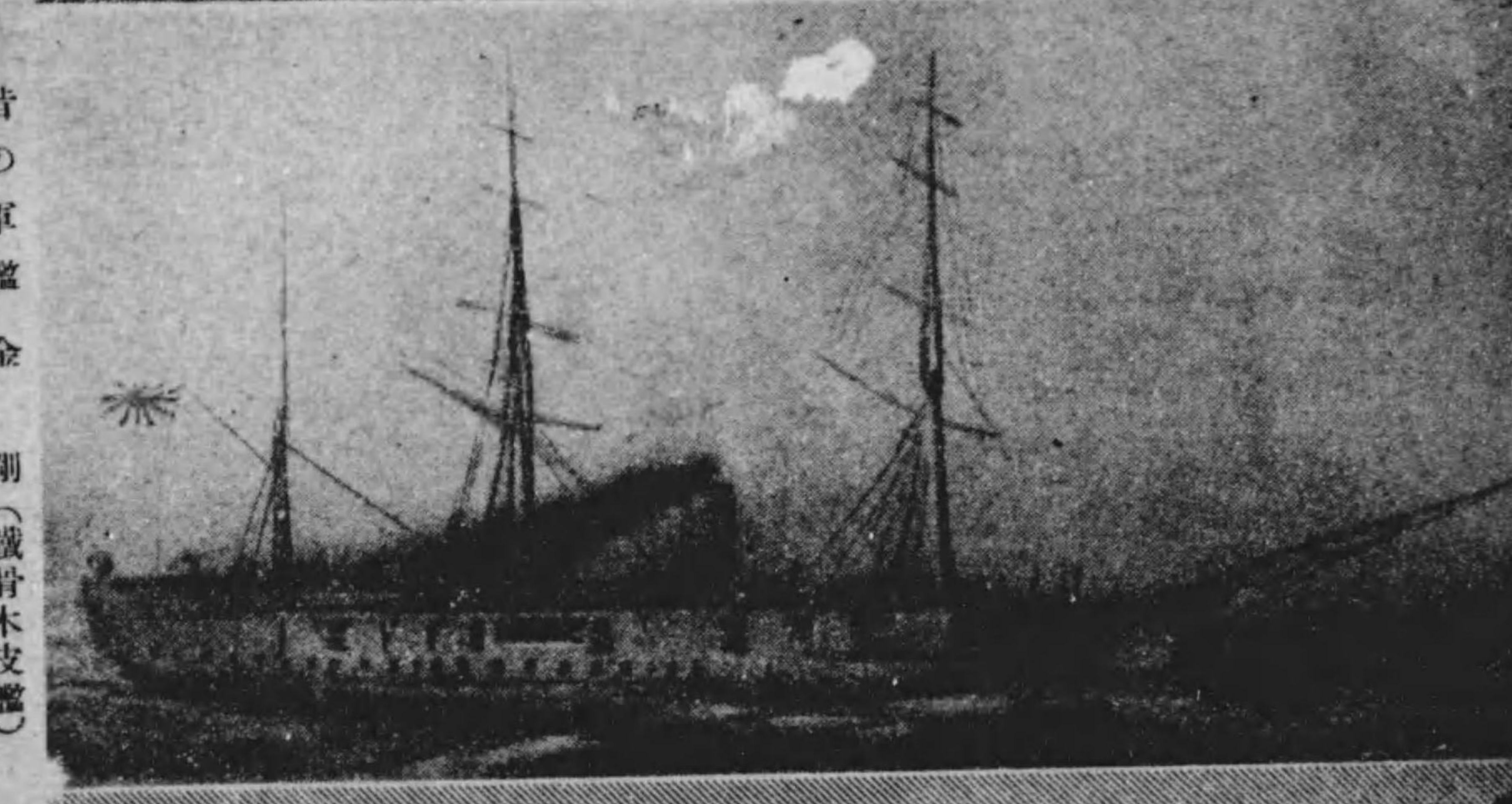
昔の軍艦 扶 桑(甲鐵艦)



昔の軍艦 鳳 翔(特種艦)



昔の軍艦 金 剛(鐵骨木皮艦)



ある。

◇ 自序にも述べてあるやうに、本書は軍港横須賀の海軍記者生活中の所産であるが、筆者は海軍記者として海軍の眞正面を直視すると共に、海軍おばあさんといはれてゐる山本小松刀自を通じて、海軍の横顔を見ることが出来た。わが海軍の蔭に咲いた女傑の華小松刀自——彼女は黒潮煙る南海紀州の郷土の熱い血を受け、打てば鳴る俠骨の江戸に素封家の娘として嘉永四年に生れ、十歳のとき軍艦旗にあこがれ、十六歳の春幕末の物情騒然たる黒船の浦賀に渡り、二十六歳のとき當時一漁村だつたわが帝國海軍發祥の地横須賀に獨立して割烹『小松』を開業し今日に至つてゐる。

◇ 彼女は創建期のわが海軍の英傑を相手に女丈夫振りを發揮し、常に『海軍報國』を念願として、女性ながらも海軍のため、御國のためにと熱誠を捧げ、幾多の隠れた貢献なしつゝ九十四歳の老軀なほ意氣旺んである。聖將東郷元帥や海軍の父といはれてゐる山本權兵衛伯の青年士官時代——いやもつと先きの昔の慶應から明治、大正、昭和の四代を通じて『海軍狂のあねご』

から『海軍おばあさん』といはれて、永年幾多の將士に最負され、また愛慕されて來て、今日なほ高齢の身で赤誠を海軍に捧げてゐる存在は、たしかに一つの驚異である。

◇ 黒船の浦賀時代から殆んど一世紀にわたつて、時世の變遷をその眼で見、その耳で聴き、今や世界に冠絶した帝國海軍の成長した姿を仰いでゐる彼女の生涯について訊いて見ると、『わたしのこれまでの百年近い生涯は、海軍のお蔭で張り合ひのあの生活で御座いました。』と言つてゐる。なんと率直な、味ひのある言葉ではあるまいか。そしてその永い生涯中に起つた幾多の戦争に、事變に、皇國のため身命を捧げた海軍將士の英靈の冥福を祈り、皇軍の武運長久を祈りつゝ心靜かにも強く一日一日を感謝の生活を續けてゐるのである。

◇ 小松刀自の生涯は、恰もわが海軍の一篇の側面史である。しかし本書は、小松刀自の語る海軍の側面史ではない。また彼女の傳記でもない。帝國海軍創建以來七十餘年の間に起つた事どもや、海軍の先覺者、建設途上の將士の姿の一面を記述したものである。しかし現役將官に就ての事は、當局の御注意により全部割愛した。これは時機を見て發表することにした。

◇
多彩な既往七十餘年の日本海軍の一断面が、本書に展開されてゐる。その綜合したものが、何物であるかは、讀者の胸に映じることゝ信じる。また、その記述に現はれて來る『海軍おばあさん』の小松刀自の語る言葉は、もとより文責は筆者にあることはいふまでもない。海軍史とか専門的の著述でないから、まあ新聞記者の『海軍漫談』のつもりで読んでいただきたい。

自序

世界に冠絶する無敵帝國海軍の今日あるは、もとより一朝一夕に成つたものではない。二百餘年の鎖國の夢醒めて、歐米人が東亞に侵入して、太平洋をわがもの顔の大勢に驚き慌てたわが國民は、はじめて海防の急務を悟り海軍創設に着手したのであるが、帝國海軍の眞の建設は王政復古の偉業成り、國軍の統一が實現されてからであつた。

海軍の創建に着手してより七十餘年、帝國海軍のその間の歴史を回顧するとき、われらは先づ 明治天皇の宏大無邊なる御恩澤を偲び奉らねばならない。帝國海軍は 明治天皇親しく御創建あそばされ、明治天皇をはじめ奉り、歴代天皇の大御稜威の下に強力完璧の發育を遂げ、今日の地位を確保するに至つたものであることを永遠に忘れてはならないのである。

また、愛國の赤誠に燃ゆる幾多の先覺者が艱難試鍊を克服し荆棘の道を開拓し、幾多の戦役や事變に捧げた尊き犠牲によつて、世界に無比の帝國海軍の基礎は固められて來たのであつた。そしてわが日本海軍が今日世界に無敵を誇るの所以は、實に『裝備の優秀と士氣の旺

盛』である。装備と士氣とは、いはゆる物心兩方面の整備が絶対の要素であるが、わが海軍の士氣こそは装備以上に壯烈無比である。その旺盛なる闘志が、わが海軍の無敵の強さの要素をなしてゐるのである。

帝國海軍の當時の日課は『月（訓練）月（訓練）火（訓練）水（訓練）木（訓練）金（訓練）金（猛訓練）』であつた。それが、ものをいふときが來たのだ。大東亞戦争下、世界を驚嘆させてゐる相次ぐ輝く戦果こそ、帝國海軍の不滅の傳統によつて寄與されたものにほかならなう。

その帝國海軍の傳統は如何にして基礎づけられ、如何にして固められて來たか——われらは先づその過去を顧みるとき、其處には種々の苦艱の道があり、あらゆる毀譽褒貶があつたことを知る。眞の建設の道程は決して坦々たるものではなかつた。過去の事實には或は不本意なこと、或は不満足のこともないではない。しかし歴史は事實であつて、徒らに自由に動かすことは出來ない。たゞ海軍創建の史上を貫くものは、帝國の將來を憂慮する眞の勇者が鐵石の覺悟をもつて國家のめに死することを無上の光榮として直進して來た、その愛國精神である。

筆者は、軍港横須賀に、二十年の新聞記者生活を續けて來たものである。その間、海軍記者として海軍の正面を直視する一方には、そのプロフィールも見ることが出來た。しかし、『帝國海軍』は、眞正面から見ても、横から眺めても、その眼に映る様相は變つてゐても、その底に流れてゐるものは、海軍創建の昔から不動不變の傳統の『海軍魂』であるのだ。それでは、傳統の海軍魂といふものは、どんなものか——といつても、直截的に『こんなものだ。』と言ふことは、至難のことと思ふ。本書は、記者生活中の海軍に關する各方面のものを取り纏めて刊行したのである。あまり四角張らずに讀んで行くうちに、筆者の意の存するところを汲み取つていたゞければ幸甚である。

記述は、思ひつくまゝに書いたもので、敢て年代にこだはらず順序不整頓のやうだが、讀了すれば一貫の流れがある筈である。また誤謬の點があつたならば、訂正するに吝かでない。

昭和十八年四月五日

目次

海軍の第一戦	三
函館開戦に壯烈な海軍魂	三
榎本武揚の遠大な氣宇	三
東郷大將の思出話	三
榎本中將と黒田清隆伯	三
帝國海軍發祥の地	九
幕末の英傑小栗上野介	九
國防の重大性と製鐵所	九
創建期の日本海軍	三
諸藩の軍艦を收納	三
内憂外患の明治維新	三
最初の軍艦「觀光丸」	三
海軍おばあさん	三
十六の春・黒船の浦賀へ	三
あこがれの「軍艦旗」	三
チヨン艦の海軍士官	三
海軍さん相手の女丈夫	三
東海水兵本營	三
海軍の反撃に英艦隊散々	三〇
わが海軍先覺者の活躍	三〇
常備艦隊編成と軍港	三〇
月俸拾四圓・東郷見習	三〇

士官……「いまに偉い人になる」……權兵衛少尉檣登り競争……日・英・佛
語ちやんぼん……未來の提督の巢立……士官さんの姉御……その頃の兵學
校

明治天皇軍港行幸……………四七

帝國第一艦の進水式臨御……傳統の「海軍工廠魂」……佛國技師ウエルニ
……日本建艦の恩人……「小泉又さん」登場

建設期の海軍……………五

畏し明治天皇の御英斷……製艦費を御下賜……一念「海軍報告」……軍艦旗
の制定……榮え行く軍港……海國男子の入團

日土親善軍艦の沈没……………六八

五十年前・救護の思出……海軍の厚遇に感激……三國一の花聲殿……天下
の三珍……几帳面な結婚記録

日清談判破裂して……………八一

樺山大將の大度量……往年の海軍の勇士……黄海大海戰大勝利……豪膽海

の肉彈戰……上村少佐の豪勇……一發必中の魚雷……水雷艇隊の先覺者鈴
木大將……大鵬に挑む隼の激闘……敵旗艦定遠に命中……初めて知る日本
魚雷の威力……全將士一心一體……新造戰艦富士の回航……一萬噸艦スエ
ズ運河初航

沸き立つ軍艦行進曲……………一〇六

屈辱の三國干涉……軍樂隊と山田耕筈少年

お龍さん(坂本龍馬の妻)の晩年の流轉生活……………一〇九

日露戦争と新聞通信……………一一三

無電のない時代の苦心……御前會議、緒戰の快勝……海戰を陸上から見て
打電……頼被りのロイテル通信……旅順攻撃の戰況公表……人氣沸騰の號
外……滿都熱狂、海軍大勝利……張り切つた軍港……その頃の頼母しい銃
後……東郷さんの大きな目玉

廣瀬中佐と清水次郎長……………一三三

壯烈、一片の肉塊……おゝ銅像と無言の對面

秋山參謀の名文……………一三八

「天祐と神助」

上村艦隊非難の真相……………一四九

海軍航空の發祥……………一四九

創始期の尊い犠牲……空軍充實に拍車

山本大將組閣の大命……………一五四

硬骨漢八代大將

艦齡を頭に國防計畫……………一五九

田中陸相と加藤海相……高橋是清翁の偉大さ

前世界大戰と日本海軍……………一六四

南遣支隊の南洋群島占領……建國以來初めての遠征……一躍世界の一等國

鐵血提督加藤寛治……………一六九

屈辱軍縮に悲憤慷慨

月月火水木金金……………一七〇

今に判るぞ！ 血涙の猛訓練

海の荒鷲航空戦隊……………一七三

中村、末次、高橋の三羽鳥

鐵鯨戦隊の猛訓練……………一七七

英米脅威の末次戦術……世界に誇るわが潜水艦

「軍艦平賀」が帝大總長……………一八一

母校を思へば童心……昔の「おいらん船」……世界に誇る巨艦「陸奥」

四萬噸の巨艦海底へ……………一八八

苦難に彩るわが造艦史……太平洋に巡戦艦の雄姿……列強驚嘆の精銳艦……

…軍縮條約の廢棄艦……海軍建設史上の尊い犠牲……軍縮と加藤トリオ……

…五・五・三比率で敗北
海軍無條約時代……………一九九

遂に來るべき日が來た……自主的軍縮々々備

米國東洋進攻作戰……………二〇一

日本潛艦を恐れての「輪型陣」……當時の各國の海軍勢力

山本、大角、飯田の三傑……………二〇八

大正から昭和の名將軍……海軍おばあさん重態……多難を克服米壽の賀誌
……海軍の長老瓜生大將……終生「目覺めよ米國」を高唱

武勳輝く長谷川大將……………二二二

同期も傑物揃ひ……寺島提督……造船報國の山本中將……準備ある者は最
後の勝利……戦傷の痕奇蹟的に消滅

痛惜、大角大將の殉職、死地を戦場に得たる本懐……………二二二

萬人敬慕の海の名將……敵前で正宗ラツパ呑み……世界外交檜舞臺で活躍
……實戦舞臺でも軍略の雄

元帥と大將を語る……………二四二

海軍創立以來の大將……同期生から揃つて大將……海軍大將と出身地

海軍とニュース……………二五一

從軍記者のはじまり……新聞界の先覺者岸田吟香……志士横川省三の海軍
從軍……文豪獨歩の戦況報道……新聞記者と軍艦便乗

南郷少佐の思ひ出……………二六〇

「その後、この眼で見た」

ペルリ……野村大使……………二六六

海軍回顧談と一脈の宿縁……………二七〇

魚釣はスパイ……江川太郎左衛門……黒船の久里濱……勝安房と西郷從道
……南洲の令甥……薩摩海軍の面々……伊東元帥の書……有地猛將軍と第
二世……山口縣出身の名提督……山本(權)大將の趣味……小閑に芝居見物
……横須賀軍港で觀艦式……山本首相の光榮……東郷さんからお土産……
三元帥と乃木大將……總理や閣僚の來港……後藤伯や芥川龍之助……地震
内閣……山本英輔大將の襟度……野村大將の活躍

女傑と長壽……………二八〇

張合のある生活

海軍夜話

海軍の第一戦

函館海戦に壮烈な海軍魂

明治維新以後、海軍の第一戦ともいふべきものは、明治二年岩手縣宮古灣頭における海戦であつた。これは官軍艦隊と榎本武揚艦隊の戦ひであつて、王政復古の過渡期における骨肉相はむ悲しむべき闘争の海戦だつた。

この宮古の海戦を前哨戦とし、官軍艦隊は榎本武揚の艦隊を追撃し、遂に函館沖においてこれを撃滅した。史上に有名な「函館海戦」であつて、聖將東郷元帥は、當時官軍艦隊の春日（初代）に三等士官として乗組み、その初陣に大いに奮戦したのであつた。

宮古、函館の兩海戦において、わが海軍初期の有爲な人材を多數失つたことは、建設途上の日本海軍のため、實に惜しむべきことであつた。しかしその一面には、壯烈無比なる海戦によつて、わが海軍傳統の烈々たる戰鬥精神の輝きを見せたことは、血沸き肉躍るの感慨に堪へぬものがある。

幕艦「回天」の甲賀艦長は、宮古灣頭で優勢な敵艦隊と砲火を交へ、激烈な接舷戦に、小艦ながら最後まで死力を盡して官軍艦隊を惱まし、遂に悲壯な戦死をとげ驍名を轟かしたのであつた。

また、函館に遁れた榎本武揚の艦隊を追撃した官軍艦隊の朝陽は、函館沖において最後の海戦となり、朝陽は敵弾のため右舷を貫かれ、轟然たる大音響と共に火薬庫が爆發し、艦は忽ち海底に沈没した。そのとき中牟田倉之助艦長（中佐）は顔面に重傷を受けたにも拘らず、海上に漂ふて残存してゐる部下に向つて、

「おい、軍艦は沈み、大砲も射てぬから、これからみんな敵艦に乗り込んで、敵の罌丸に噛りつけ——」

と怒鳴つて激勵した。——甲賀艦長や中牟田艦長の、その往年の壯烈なる魂魄こそ、いまな

は帝國海軍に生々脈々として傳はつてゐる傳統の「海軍魂」だ。

榎本武揚の遠大な氣宇

官軍艦隊と榎本武揚の艦隊との宮古沖、函館沖の兩海戦は何故に起つたのであつたか。

徳川幕府の海軍總裁勝安房の下に、榎本武揚（當時釜次郎と稱す）は副總裁として海軍建設に盡力してゐた。彼は幕府の新進氣鋭の士だつたので江戸開城となるや大いに憤慨し、ひそかに幕府の軍艦八隻を率ゐて品川沖から房州館山沖に行つてしまつた。勝安房は頗る憂慮して、自分から館山に出かけて行つて榎本を説き、軍艦四隻を朝廷に献上させ、あとの四隻を徳川家のものとした。そこで榎本は残つた軍艦を率ゐて、品川に再び戻つて來た。そして彼は朝廷に書を奉つて、次ぎの如き請願をしたのである。

『徳川家達（後の公爵）に蝦夷諸島（北海道本島と千島列島）を賜はり江戸の旗下三十萬人

の男女を移住し、開拓に従事させたい。』

大體右のやうな趣旨であつたが、これは幕府の政權奉還のため扶持をはなれた、いはゆる失職武士と家族をみんな現在の北海道——その頃は開けてゐなかつたのである——に移住させて未開地を開墾すると共に、この廣大な邊土を狙つてゐたロシアの侵入を防ぎ、北防の護りを固くしようといふ、國家政策の一つを遂行せんとするものであつた。しかし、この遠大な希望を述べた請願の上書は朝廷に容れられず、更にその附屬の運送船二隻を徵發されてしまつた。

遂に榎本武揚は部下の艦隊を率ゐ、同志と共に品川沖を出發し、北海道さして遁れたのである。そして官軍は彼を征討するため艦隊を編成し、そのあとを追ひ宮古沖の海戦となり、續いて函館沖の海戦となつた。

榎本武揚は、海戦に敗れて、函館郊外の五稜廓に據つて官軍に抵抗したが、孤獨無援であつた。しかも官軍は益々優勢となつて來るので、さすがに頑強に抗戦してゐた榎本軍も遂に敗れて、明治二年五月十八日、彈盡き劍折れて降伏するに至つた。

東郷大將の思出話

宮古、函館兩海戦に奮戦した東郷三等士官は、當時二十三歳の血氣盛りで、春日の備砲係りであつた。——後年、東郷大將となつてからの思ひ出話によると、

「すべてが幼稚だつたあの當時、よくもあれだけ戦つたものだと驚嘆する。あるとき参戦した観念は、勝敗を懸命するよりも、寧ろいかにして立派な戦死すべきかと、そののみ考へてゐた——。』

といふことである。そして敵艦『回天』の甲賀源吾艦長は、官軍艦隊の彈雨を浴び艦長自ら右腕、左脚を彈片に挫かれ重傷を負ふたが、意氣少しも衰へず、血みどろになつて部下を叱咤指揮してゐたが、遂に一頭彈部に命中するや肉飛び、血流れ、凄慘目もあてられぬ有様の艦上に『無念！』の一言を残して、北海の華と散つた豪勇振りには『敵ながら天晴れ。』と、東郷大將も後年嘆賞してをられたのであつた。

榎本中將と黒田清隆伯

榎本武揚が、函館の戦ひに敗れて、遂に降伏するや、官軍に反抗したるの故をもつて、死罪に處するが至當であるといふのが重臣達の意向であつた。

しかし、たゞ一人の反對者があつた。それは黒田清隆伯であつた。黒田伯は、薩摩出身の猛將で、豪放磊落な豪傑肌の反面に、謹直忠誠な名將の風格を備へた人士であつた。

諸重臣の反對にも拘らず、黒田伯の説は容れられて、榎本武揚は罪を赦された。後年の海軍中將、子爵榎本武揚は、斯うして新たなる明治政府に誕生したのである。

明治十八年十二月、はじめて内閣が成立して、伊藤博文公が總理大臣となると、黒田伯は農商務大臣。榎本子は逓信大臣となつて、共に親しく國政に干與したのであつた。次で黒田伯みづから首相の印綬を帯ぶや、榎本子は農商務大臣となり、また文部大臣となり、山縣内閣においては榎本子は再び文部大臣となつた。

更に松方内閣においては、榎本子は外務大臣として日清戦争前の多端な外交の衝に當り、また第二次伊藤内閣、黒田兼任内閣、黒田臨時代理内閣、第二次松方内閣の文部大臣に歴任するなど、榎本子の登閣して大臣となること八回に及んだのであつた。

往年の海軍の先覺者、榎本武揚中將は、明治の中年期において、國務大臣として國政に干與して偉大な勳功を輝かしたのである。——それにつけても、このやうな大人物を、衆論を排して取り上げて功臣となした、黒田伯の偉大さを特筆すべきであらう。『英雄、英雄を知る』といふ譬に則するものだ。

帝國海軍發祥の地

幕末の英傑小栗上野介

幕末の英傑、當時の勘定奉行（今日でいへば大藏大臣）小栗上野介忠順は、横須賀海軍工廠

の前身横須賀製鐵所創設の先覺者であつて、わが無敵海軍生みの親である。

彼は、横須賀の地勢が、東海方面では無二の天然の要港であることを逸早く發見し、わが日本將來の國防上から是非とも造船所を設け、そして軍艦の碇泊港とすべきことを提唱し、且つその實現に着手したのであるから實に先見の明ありといふべく、また日本海軍創設の恩人である。

小栗上野介が、横須賀の要港であることを發見したのは、幕府の遣米使節として渡米した歸りに、東京灣外で汽船が支障を生じて、横濱まで航行を續けられないで大いに困つたときであつた。そのとき參々たる一漁村に過ぎなかつた横須賀といふ天然の良港を發見して立ち寄り、辛じて汽船を應急修理して横濱に歸港することが出來た。炯眼な上野介は、江戸と横濱を控えた現在の東京灣に、將來海軍の根據地として、その横須賀を第一の候補地として早くも胸中に決意してゐたのであつた。

國防の重大性と製鐵所

小栗上野介は、みづから首唱して幕府に建言して、栗本鋤雲、軍艦奉行木下謹吾、フランス公使ロセス、フランス艦隊司令長官ジョーラス、軍艦セミラミス艦長及び士官などを率ゐて、幕府の軍艦順動丸に乗つて横須賀灣に來たのが元治元年十一月であつた。

一行の軍艦が横須賀灣に入るや、フランスの士官連は

『ツーロン、ツーロン!』

と叫んで手を叩いて喜んだ。つまり横須賀が彼等の母國の、なつかしいツーロン軍港の景勝とそっくりだといふのであつた。小栗上野介の製鐵所創設の候補地は、フランス海軍の艦隊長官や士官連の大賛成のものに、横須賀と決定したのである。この事は幕府の製鐵所約定書の中にも、

一、横須賀灣地形中海岸フランス國ツーロン灣に似たるにより製鐵所は右地に取建あるに倣ひ大概横四百五十間、縦二百間の地坪を以て取建る事。

と書かれてある。わが日本帝國海軍の本格的の發祥地、軍港都横須賀の繁榮の端緒は、この時開かれたと見てよい。

小栗上野介は、國防の重大性を力説し、國家百年の大計のためだといふので、幕府の苦しい財布の中から、洋銀二百四十萬ドルをやつとのことで捻出し、製鐵所の建設にとりかゝつた。そして慶應元年九月二十七日、製鐵所建設の歛入式を舉行したが、この日はまた横須賀軍港開港の日であつたともいへるのである。

その頃の横須賀は、全村の戸數二百六戸といふ寂しい一漁村であつた。

創建期の日本海軍

諸藩の軍艦を收納

明治の御代となつても、廢藩置縣が決まるまでは、各藩の個々の所有軍艦をもつて外患に備

へてゐたものである。兵制、訓練なども區々であつた。海軍の創設は安政四年頃、佐賀藩でオランダから軍艦を購入したのが始まりである。その軍艦は「觀光丸」といふ木造艦であつた。

その後明治政府は、幕府及び佐賀、鹿兒島、山口などの諸藩から軍艦や運搬船を收納し、また外國から購入して海軍を本格的に建設することになつたが、その當時は軍艦十一隻、運送船八隻、總噸數わづかに一萬餘噸——全部で現在の甲型巡洋艦一隻ぐらゐにしか當つてゐないのであつた。そして陸軍も海軍も、軍防事務局を置いて兩軍務を掌り、各藩の常備兵編成を定め、地方警備に任せしめ、その長官は嘉彰親王で、役名を事務局督と呼んでゐたものである。その後は毎年十隻づゝ新艦を建造し、新陳代謝して勢力を維持する計畫をたてたけれども、財政が許さないため不成立に終つた。

軍防事務局は更に兵部省となり、陸海軍を統べてゐたが、明治五年になつて兵部省を分けて陸軍省、海軍省の二省を獨立させた。最初の陸軍卿（今の大臣）は山縣有朋、海軍卿は勝安房であつた。

内憂外患の明治維新

當時、明治御維新の御代となつても、國の内外とも決して安穩なものではなかつた。外ではロシアの軍艦が千島方面に出沒して外寇の患があり、内には全國一旦平穩に歸したけれども、なほ各藩で互ひに兵力を養ひ、やゝもすると再び兵亂を惹き起す憂ひがあつた。政府としては速かに兵制を確立して、これに備ふる必要が迫つた。そこで、萬機公論に決すべしとの聖慮に基づき、各藩の代表者を集めて『集議院』を開かれ、畏くも明治天皇はその會議に對し兵制について、次の如く御下問になつた。

『海陸二軍は國家の重事方今の急務なり。然るに兵制未だ立たず、規律未だ定まらず、軍艦銃器未だ充實せず、内外の守備俱に關く、蓋し騷亂の餘り用度の足らざるに仍れり。而して二軍の興張の策如何』

そして、明治天皇親しく會議場に御臨幸になり、いろいろその討議を御聽取あそばされたのであつた。その兵備論中、海軍に關するものでは、次ぎの如きものがあつた。

海軍は諸藩より費用を辨せしむべし。

海軍の擴張を急務とすること。軍艦銃器は外國の傳習を受け、日本で製造すること。用度は節約し互ひに市物産等にて辨すべきものとす。

兵農を一にし、海内皆兵となすべし。

海軍は百萬石に軍艦一艘と定め、兵學校を建て、輸出入税を海軍費に充つべし。

先づ兵制を定め、兵學校を設け、藩縣に教官を差遣して兵制を檢査すべし。

各藩連合して兵艦を備へ、海軍は英式を採用すべし（陸軍は佛式）

兵艦は平時商人に渡し、有事の日これを徵發すべし。

士族を土着させ、各縣に兵員を設け浮浪の徒を募るべし。紀律は和漢の法に依るべきものとす。

その他いろいろの議論があつて、中には奇抜なものもあるけれども、創設期の當時としては名論卓説も多かつたともいへよう。

いづれにしても、時局に鑑みて海軍の擴張を急務とされ、明治八年になつて軍艦三隻を英國に注文したのが建造の後、はじめて勢力を増加し、軍艦兵器を日本内地で製造することに大童

になつて来たのであつた。

最初の軍艦「観光丸」

わが日本海軍最初の軍艦「観光丸」はオランダで建造され同國から徳川幕府に献上されたものである。數年前オランダからその模型を贈られたので東京の海軍館に陳列されてある。

この観光丸は嘉永三年、即ち今から九十五年前の十月月二十五日オランダのアムステルダムで起工、同五年六月九日に進水してスンプン號と命名され六年二月二十一日に同國軍艦として服役したが、ウイリアム三世は同艦をわが徳川幕府に献上することとなり、安政二年六月二十八日にジャワのバタビアを出帆し、七月二十一日長崎に到着、十月五日に献上の手續を済ませたのであつた。

その當時は立派な黒船だといつて、みんな目をまろくして驚いた。軍艦といつても木造で、

全長四五メートル、最大幅八・二メートル、排水量は七八一トンで、今から見ると小さい船であるが、大砲六門を備へ當時は最新式の巨艦であつた。

幕府は長崎に海軍傳習所を開設し、オランダのペルスライケン大尉などを教官にして各藩の青年武士を集めて、今の海軍學校のやうな教育を施してゐた。その後傳習所は江戸に移つたがこのとき観光丸を中心に教育を受けた人々で日清、日露の兩戦争などに武勳を輝かした海の武將が多いのであつた。そしてこの観光丸は明治になつてから帝國の軍艦となつたのである。

海軍おばあさん

軍港横須賀の女傑、山本小松刀自の一生は、さながらわが光輝ある無敵海軍の一篇の側面史の觀がある

彼女は、慶應、明治、大正、昭和の四代を通じて、軍港横須賀を舞臺に、黒潮けふる南國紀

州の郷土の情熱と、打てば鳴る江戸ツ子の俠骨をもつて、幾多の海軍將星に接したのであつた。

現在、わが海軍の重鎮たる各將星はもとより、第一線を勇退した老提督や、また大東亞戦争の前線にあつて勇猛果敢な活躍をつゞけてゐる將士たちも『小松のおばあさん』を知らないものは、殆んどないといつてよいほどである。

『海軍おばあさん』

と、その名を謳はれてゐる小松刀自とは、いつたいどんな女性であらうか。まづその生ひ立ちから語らう。

山本小松刀自は、彼のペルリ提督が浦賀に來航した四年前、嘉永二年四月二十一日、江戸の小石川關口水道町に生れた。現在の東京市小石川區關口水道町五十二番地である。

父は山本新兵衛さん、母はくにさんといつて、いづれも明治時代に故人となつたが、山本家は和の南の紀州に近い浅古町の海産物問屋で、苗字帯刀御免の家柄であつた。新兵衛さんの祖父は、士分と同格の豪快な紀州男子であつて、物情騒然たる徳川幕府の末期に、考へるところがあつて一家を擧げて江戸に移住したのであつた。そして郷土の名にあやかつて浅古屋とい

ふ暖簾のれんをかゝげ、海産物商を手廣く營み、江戸表の紀州藩御用商人として重きをなしてゐた。

山本家の三女として生れたのが、小松刀自であつた。——彼女は、悦子と名附けられたのであつた。その悦子は、黒潮けぶる南國紀州の豪快な郷土の血と、幕末の江戸ツ子の俠骨とを併せもつてこの世に誕生したゞけに、女ながらも體軀も大きく頑丈で、負けん氣性の男まさりの兒であつた。

しかも、時は幕末の尊王攘夷論擡頭して、國の内外とも多事多端で、世相の險惡な時代であつた。

悦子は、安政の江戸の大地震を七歳のとき體驗した。また、安政の疑獄、櫻田門の變、坂下門の變、長州征伐、天誅組の擧兵、生麥事件等々の血なま臭い、今は史上に残る幾多の異變を見たり聞いたりして成長したのであつた。

十六の春、黒船の浦賀へ

慶應二年の春、小石川と牛込の境を流れる江戸川の堤の櫻が、ちらほら咲き初めるころ、悦子は、柳行李を一つ持ったまゝ、飄然と家を飛び出してしまった。彼女は十六歳であった。

——家には兄も居る、弟も居る、姉たちも居る。何不自由もない家柄の娘ではあつたが、悦子の前途にはなにか知ら眼に見えない大きなあこがれがあつた。このまゝ家にくすぶつてゐて、何處かへお嫁にやられてしまへば、もう、それでおしまひだ。たとひ女の身として生れても、なにか、御國のためになるやうな、眞剣な、——そして痛快な事をやつてみたい。——さうした觀念が、さうした熱い血潮が、若い悦子の全身に奔放に漲つてゐるのであつた。

悦子は、永代橋下の船宿から、浦賀行きの船に乗り込んだ。小さい帆前船で東京灣外へ乗り出すといふことは、當時としては若い女性の身には冒險的なことであつた。

當時、浦賀港には陣屋といふ防衛の武士の屯所と、幕府の御番所があつて、江戸の關門として浦賀と江戸を繋ぐ海路を中心に、全國の回漕交易の唯一つの港であり、また尊王攘夷の高唱は、浦賀を中心に、全國の各地に擴大して行かうとする黎明期であつて、浦賀港の全盛期であつたのだ。

江戸の商家では、もうたいした出世も出来まいと、見切りをつけておさらばした悦子は、浦賀港の一流の割烹店『吉川家』に、身を落ちつけた。——偉い人士に先づ近づかねばならぬ。それには、一流の割烹店が第一だ——と、惘眼な彼女は見極めたのである。

浦賀港には、今の税關に當る御番所を通じて、諸國の出船入船が絶えないで、各藩の諸大名の物資や、大商人が、海路を辿つて盛んに往來してゐた。だが、悦子の頭には、物資の交易や、商人達のことなどは没交渉であつた。彼女の頭の中には、いつも『海軍』といふ二文字がこびり附いてゐるのであつた。

あこがれの「軍艦旗」

—後年、彼女は、斯う述懐してゐた。

『わたしが十歳のときにね。江戸で初めて海軍の旗といふものを見ましたよ。日章旗ですよ。その日章旗を『大艦旗』といつて、軍艦の旗に定められたのが、恰もわたしの十歳のときだったのですよ。その日章旗を一目見たときから、わたしの血脈が熱く沸きましてね、あの旗が好きで好きで大好きでね。白地に赤の日の丸は、それこそこれから躍進する日本の姿そのまゝのやうに見えて、ほんとに勇ましくてね。それから海軍が大好きになつたんですよ。わたし、女に生れたために海軍さんになれないのが、口惜しくつて仕様がなかつたもんですよ。』

感慨深げに語る小松刀自である。女性の身として九十四年の全生涯を、海軍に捧げて來た刀

自には、幼年時代から斯うした深い宿縁があるのであつた。(軍艦旗の制定は後章に述べる。)

(註、海防陣屋)

浦賀陣屋は、外患來の夢に襲はれた徳川幕府が、天保十四年に江戸の門戸を固めるために東京灣口の防衛を川越藩に命じて初めて設置され、同藩の松平大和守を初代として會津、熊本、佐倉の各藩が交代し、最後に江川太郎左衛門を経て明治元年海軍に引渡すまであつたのである。場所は浦賀大津の現在の縣立横須賀高女、海軍刑務所を含む約三町四方の廣大な規模であつたらしく、外記流、武勝流の鐵砲方が二人ゐたことなども、金澤文庫の東海道三餘雜記にあり、陣屋の見取圖も保存されてある。また現在の縣立高女の庭から瓦の破片が発見され、同校の南方の將監山から二個の鉛玉を発見したことがある。これは幕府の海防陣屋が使用した鐵砲の彈丸であるが、外記流大筒(大砲)の的場が大津西北五町の山中にあつたことも記録にあり、幕末における東京灣口の固めと動きを研究する有益な参考資料となつてゐる。

チヨン齧の海軍士官

その大好きな日の丸の軍艦旗が、さうして海軍さんが、浦賀港では毎日見ることが出来るのであつた。商船や大名、さむらひ、商人などは悦子の眼中にはないのであつた。

もつとも、その頃は軍艦といつても、みんな木造船であつた。せい／＼二三百噸位の帆船みたいなものに、大砲を据附けた異様なもので、今から考へれば文字通り隔世の感に堪えないのであつた。そしてそれらの軍艦は、長州、土佐、佐賀、薩州藩などの軍艦であつて、殺氣立つた海軍將校の武士、亂暴者の水兵などが乗り組んでゐたのである。

軍艦の異様であると同様に、乗組の海軍さんの服装なども頗る異様なものであつた。その海軍將校なるものは、頭にピストルみたいなチヨン齧を載せて、服はだんぶくろのズボンに窮屈さうな奇妙な上衣を着て、腰には大刀小刀二本を差して、大手を振つて威張つてゐたものだ。水兵となると、手首の處にボタンのついたシャツを着て、脚の二本も入りさうな、だんぶくろ

のズボンといふ珍妙な格好をしてゐた。そして陸に上ると、とても氣が荒くて、町の者などは恐れをなして近寄らないといふ有様であつた。

海軍さん相手の女丈夫

日本海軍創成期の、さうした慌しい時代に、うら若い悦子は吉川家のお座敷女中として、荒くれの向ふ見ずの海軍さんたちを相手に宴席に侍してゐた。

明くれば慶應三年、畏くも 明治天皇御踐祚あそばされ、徳川幕府は大政を奉還し、六百八十餘年の永きにわたつた武門政治は終末を告げ、王政復古の大令は降下したのであつた。悦子は、いよいよ御國御維新の時機が到來したと、歡喜の血に燃えてゐた。

引きつゞいて、翌慶應四年は、明治と改元され、御即位の大禮を擧げさせられ、聖駕東都に行幸あそばされ、東京を帝都と御定め給ふたのであつた。悦子は、江戸から東京になつた、小

石川の實家の兩親や姉姉のことを思ひながらも、浦賀に来てから一度も上京しなかつた。

浦賀港には、もうその頃は各藩の軍艦は姿を消して、帝國軍艦が、輝かしい日の丸の軍艦旗をはためかせて出入してゐた。混沌たる曉雲が晴れて、旭日が天に昇るやうな思ひであつた。悦子は、生れてはじめて胸の裡が明るくなつたやうな感慨で、毎日々々楽しく朗らかに立ち働いてゐた。

だが、御維新の世となつても、内外の風雲は決して安穩なものではなかつた。何時どんなことが起るか判らないやうな、險惡な空氣が浦賀港に充ち満ちてゐるのであつた。さうした雰圍氣の裡にあつて、御國のために盡すのには、先づ海軍のため赤誠を捧げねばならない——と、吉川家に來る海軍將士に對しては、悦子はいつも眞心をもつて盡してゐた。

二十歳を越えた悦子は、身長五尺三寸餘、體重二十二貫といふ女には珍らしい巨軀を擁して、高位高官の宴席に侍してゐた。江戸ツ子の傳法肌の彼女は、勝氣でまた正直者として、誰れ彼れなしに愛されてゐた。それに天稟の聰明と健康が、どんな酒席も明朗化してしまふのであつた。

豪壯な料亭の多い浦賀港にも、海軍關係の宴會といへば、殆んど吉川家に限られてゐた。そ

してそれらの吉川家に出入りする海軍關係者を通じて、悦子の名は東京にまで響いてゐた。

土地では顔役であり、好人物として通つてゐた吉川家の主人夫妻は、今では同家の大黒柱同様な悦子に、すっかり惚れ込んで、聳養子を迎へてやり、自分達は隠居してあとを相續させる決心であつた。そして或る日、悦子を呼んで、辭を低くして同家のために盡して呉れるお禮を述べ、日頃の心を打ち明けて相續人になつて呉れやうにと懇願するのであつた。しかし、悦子はそれに對して、

『お心ざしは有難う御座いますが、わたしは一生獨身で通す念願であります。わたしは、身も心も、御國のため、海軍のために捧げることが出来れば、この上もない満足なのであります。』

と、答へるばかりなのであつた。

主人夫妻は當惑した。しかし、悦子の氣性を百も承知してゐるので、その後はもう二度とその話を切り出さなかつた。そして自分達の娘同様にして一層可愛がり、彼女の自由を許してゐるのであつた。

悦子は、それをありがたく嬉しく思ひ、以前にも増して、一層吉川家主人夫妻に忠實に仕へ

てゐたのであつた。

東海水兵本營

横須賀製鐵所は、明治維新後は明治政府の所管に歸したが、製鐵所創設以來は、他の地方からの移住者がぐんぐん殖えて、横須賀は飛躍的な發展の一路を辿つてゐた。

明治八年同製鐵所ではじめて日本製軍艦『清輝』が進水した。この軍艦は伊豆の天城山の木材を伐り出してつくつた小さい木造船だつたが、これが堂々と印度洋を航海して、フランス、スペインくんだりまで出かけて行つたといふのだから驚く。

またその年の十二月には、横須賀の現在省線横須賀驛のある逸見の海岸を埋立て、海軍屯營が出来た。後に東海水兵本營と改稱されたが、これが現在の海兵團の前身である。胸のあたりまで垂れさがつた、ペンネットをつけたジョンベラの水兵さんが、横須賀の町々を濶歩して

すつかり寵兒となつた。

さうしたわが日本帝國海軍の、創設時代の慌しい雰圍氣の裡にあつて、聰明な悦子は『コマツ』と改名し、逸早く時勢の動向、推移を見透してゐた。そして遂に黒船の浦賀港をあとに、横須賀に乗り出す決心をしたのであつた。彼女は二十六歳の春を迎へ、彼の西南の役の前のことであつた。

殷賑を極めてゐた浦賀港とちがつて、當時の横須賀は、まだ浦賀よりは町の形態もなしてゐない見劣りのするものだつた。けれども、やがて日本海軍の根據地として、また造船の發祥地として躍進しやうと、曉天にいまや朝日が昇らうとしてゐる輝かしい活況が、充ち溢れてゐるのであつた。

思ひ出の多い浦賀港の吉川家から、恰も十年間の羈絆を脱した悦子の『コマツ』は、横須賀村字田戸といふ處に、かなり大きな二階建の家を新築した。そしてその名も『割烹小松』の看板を掲げて、はじめて獨立して料亭を開業したのであつた。

其處は東を真正面に海を控え、田戸の濱邊の小高い斷崖の上にあつて、東京灣を双眸のうちに見渡す眺望絶佳な景勝の地であつた。

海軍工廠の前身の製鐵所は、當時俗に『御場』と稱して、イギリス、フランスの兩國から招聘された海軍の造船、造機の士官や技師たちを中心に、黎明期のわが海軍の建艦の烽火が、ハシマーの響きと共に高らかに勇ましく打ちあげられてゐるのであつた。

薩軍の反撃に英艦隊散々

わが海軍先覺者の活躍

明治九年九月一日、横濱に東海鎮守府を開設された。これがわが海軍の鎮守府のはじまりで初代司令長官は、伊東祐磨將軍であつた。この伊東長官は、伊東祐亨元帥の令弟であつて、十三年三月五日まで在任したが、東海鎮守府は明治十七年十二月横須賀に移され、横須賀鎮守府と改稱された。

東海鎮守府の時代には、まだ本格的の内閣といふものも組織されてなく、いまの海軍大臣にあたる海軍卿には、初代の勝安房伯（海舟）のあとを襲ふて川村純義海軍大將が海軍卿となり、明治十八年の内閣官制の出来るまで、十ヶ年間をぶつ通して獨占してゐたのであつた。そして同十八年十二月、伊藤博文總理大臣のもとに内閣が組織され、西郷隆盛の令弟の西郷従道海軍大將が（後の元帥）が海軍大臣となり、一時陸軍大臣の大山巖大將（後の元帥）が兼任してゐたこともあつたが、再び西郷従道大將が海軍大臣となつた。更に黒田内閣から山縣内閣となるに及んで、明治時代の海軍の大御所といはれた樺山資紀大將が海軍大臣となつて、創設期から建設期に入つたわが海軍の軍政を牛耳つて活躍してゐたのであつた。

常備艦隊編成と軍港

鎮守府の移轉と同時に、はじめて常備艦隊の編成を定められ、横濱港に碇泊してゐた軍艦は全部横須賀港に移された。海軍製鐵所は造船所となり、更に海軍工廠と改稱され、軍艦ばかり

でなく海軍の諸兵器も製造されるやうになつた。

わが日本海軍の先覺者勝安房伯をはじめ、川村、西郷、樺山各大將、また佐野常羽、中牟田倉之助、仁禮景範、坪井航三、伊藤祐亨、井上良馨、山本權兵衛、日高壯之丞などの、後には元帥や大中將となつたわが海軍の大先輩たちも、當時は壯年氣鋭の海軍士官として、横須賀を中心に活躍してゐたのであつた。

『あの頃の皆さまは、そりやみなお元氣でいらつしやいましたものですよ。薩摩の海軍といはれるほどに、當時の海軍の首脳部のお方たちは薩摩のお方が多くて、非常に勢力を張つてお出のやうでしたが、また國家のため、海軍のためにお盡しになつたことも、多大なもので御座いました。なにしろ薩摩は、わが日本海軍とは切つて切れない深いお因縁がおなりなのです。あの有名な生麥事件に端を發して、文久二年イギリスの支那艦隊七隻が、鹿児島灣に押し寄せ、薩摩藩を脅愾し威嚇しようと、鹿児島砲臺と砲戦を交へたのが薩英戦争でありました。薩摩のお方は偉いでしたね。武士はもとより、町人も女も子供も一致團結して、死力をつくしてその外敵に當つたため、イギリス艦隊は意外の損害を蒙り、その目的を達しられなかつたばかりでなく、旗艦の艦長をはじめ死者十三人、負傷者六十三人を出したのに、薩摩

軍の方は僅かに戦死者五人、戦傷者十八人だつたさうです。それにイギリス艦隊は軍艦も大損傷して、散々の態だつたといふことでした。この戦争は、幕末武士の無鐵砲の勇から端を發したのですが、どんなに日本中の人達に、大きな刺戟を與へたか判りません。そしてこの戦争の結果、なにもかも幼稚だつた薩摩軍も、イギリスの新兵器の威力に直接打ち當つて見ただので、大いに得るところがあつたのでした。後に帝國海軍の元勳におなりになつた伊東祐享、井上良馨、東郷平八郎の三元帥のお方も、そのときは、青少年の身で従軍されたのでした。日本と外國との海戦に、身をもつて率先して當り、尊い實戰舞臺を、はやくもお踏みになつてゐたのでした。また馬關砲戦は尊王攘夷の長州軍が、イギリスのキューパーといふ中將の率ゐる、外國の聯合艦隊を敵として戦つたのでした。聯合艦隊といふのは、イギリス、アメリカ、フランス、オランダの四國の軍艦十七隻が、今の下の關に押し寄せて來たのを、長州軍がこれと戦つたのですが、なにしろ相手は新式の大砲や優れた兵器を持つてゐたので、そのときは残念ながらこちらは惨敗し、馬關砲臺を占領され、大砲を取られたり破壊されてしまつて、おまけに三百萬ドルの大金を償金にやることを約して、和を結んだといふ屈辱の戦争なのでした。しかし薩摩といへ長州といへ、今から考へるとよく戦つたものですよ、相

手は先進國で、優れた新式の軍艦や兵器を持つてゐる強敵なんですからね。實際危いことでした。この外國の軍艦にわが日本を攻められたことが、大きい刺激となりまして、海軍建設の急務を日本のみんなが自覺するやうになつたのですから、大局から見まして禍を轉じて福となしたものであらうと思ひます。いづれにしても、薩摩と長州は、明治維新の前に、もう海軍といふものを深く知つてゐたので、それらの實戦にたづさはつたお方たちが、帝國海軍建設の基となつて活躍していらつしやつたんです。だから薩摩のお方が多く、次いで長州出身の海軍の偉いお方が多かつたわけです。』

と小松刀自が語る日本の海軍建設期に活躍した往時の海軍の大先輩たち——それらはいづれも軍港横須賀の『小松』に出入し、英氣を養つて、挺身海軍の建設に努力してゐたのである。

月俸拾四圓、東郷見習士官

『龍驤艦見習士官被仰付月俸拾四圓被下候事——』

明治三年十二月十一日附で、兵部省から一通の辭令を交附された——これが帝國海軍の記録に『東郷平八郎』の名を記録されたはじめであつた。その東郷見習士官は、龍驤に在ることわづかに二ヶ月餘で、翌年二月には選抜されて英國へ留學となつた。そして八年間の捲まず屈せず精勵勤勉な海軍研究を續けて、明治十一年日本から英國に注文した新造軍艦に乗つて、晴れの歸朝をして海軍中尉に任命された。

東郷中尉は、自分が英國から乗つて來た軍艦比叡(初代)乗組となり、更に姉妹艦の扶桑(初代)に轉艦となつた。後の伯爵山本權兵衛大將は當時海軍少尉で、同じ扶桑に乗組んでゐたのであつた。この東郷、山本兩少壯士官は、どちらも鹿兒島の同郷人で、一方は英國仕込みの敏腕士官、一方は氣骨凌々たるバンカラ士官であつたが、ともに我が日本の將來は、海軍の力に

俟たねばならぬ重大性を強く認識し、固い決意のもとに、人一倍軍務に精勵してゐた。

二人は上陸すると、よく連れ立つて『小松』にやつて來た。そして

『我が日本の國防の第一線は海軍だ、海から來る外邦の敵は、やはりこれを海で撃破せねばならぬのだ!』

と、生麥事件のもつれから英國軍艦の鹿兒島襲撃を、幼年時代に身をもつて體驗してゐる二人は、よく語り合ひ、日本海軍の擴充強化について、遠く思ひを馳せてゐるのだつた。

「いまに偉い人になる」

まだ若かつたコマツ女將は、多くの海軍士官の中にも、性格はまるで反對の東郷、山本の二人の少壯士官を、なんとなしに末頼もしい人たちだと思つてゐた。

『東郷さんと山本さんは、いまにきつと偉いお方におなりですよ』

と、よく家人に語つたものだつた。

東郷中尉は、よく酒を飲んだ。大尉に進級し、更に少佐につつて迅艦の副長に補せられ、明治十五年には朝鮮の亂が起り、天城艦副長として活躍したが、乗艦が横須賀に歸港することに小松を訪れて、女將の顔を見ると、

『おばあさん丈夫か。また來たぞ』

三十代の彼女に斯う呼びかけて、酒盃に親しんでゐるのだつた。——若かりし日の東郷さん。彼は、どこが美味しいのか、どこが好ましいのか、いつも苦虫を噛みつぶしたやうな顔をして、黙々として、獨りであることを欲して、夜更けまでチビリチビリと飲みつゞけてゐるのであつた。山本士官とはちがつて、藝妓など近づけないで、酒一點張りなのだつた。

靜肅溫和な反面には軍艦では人一倍軍務に精勵で、事に當つて剛腹勇膽振りを發揮する東郷少佐については、いろんな話を女將は聞いてゐた。だが御本人の東郷さんは、軍艦でのことは一言半句も話をしたことがなかつた。その黙々たる態度が、一層彼女に大きい感動を與へ、敬慕の念を沸かせてゐるのであつた。

権兵衛少尉櫓登り競争

明治、大正、昭和の三代を通じて海軍の大御所『海軍の父』といはれた海軍大將山本権兵衛伯は、小松刀自よりも三つ年少だった。

なにしろ明治初年の我が海軍の創生時代、初代扶桑艦に『山本少尉』として乗組んでゐた頃からの馴染みである。薩摩と紀州と同じ南國の血が流れ、同じ山本姓を名乗る二人は、一方は少壯海軍士官、一方は軍港一の割烹店の女將で、どちらも氣骨隆々、人一倍の勝氣であつたが、二人は不思議なほど意氣相投合してゐるのであつた。

『権兵衛さんはね、青年士官時代から偉いお方でしたよ。あのお方は、いまに海軍を背負つて立つ海軍の大御所になるお方だと、わたしや、ちやんと睨んでゐましたよ。』

『お若いころの権兵衛さんはとても負けずきらひで、英國歸りの東郷さんと、同じ扶桑艦に乗組んでゐて、洋行歸りの鼻をあかしてやらうと、東郷さんに櫓登りを挑んで、二人が軍艦

の両方の櫓を登りつくらをやつて、東郷さんがズボンを引つけて遅れてしまつたといふ話がありますよ。それでも東郷さんも負けずきらひでズボンが切れて引つかゝつたので、決して負けたのでないと言ひ張るし、権兵衛さんは櫓登りは俺が立派に勝つたんだと、手を打つて勝誇るし、どちらもお若いしお元氣なものでしたよ。』

『しかしお二人は、その頃から大の仲よしで、よくお二人でお見えになりましたよ。でもね権兵衛さんは、東郷さんとちがつて、お酒はたんと飲まず、藝妓たちにからかつたりお座敷の賑やかなお方でした。豪傑肌といふよりは、英雄肌とでも申しますのかね、いや英雄と豪傑を双方兼ねたやうなお方でしたよ。』

と、七十年も昔を偲んで、小松刀自は笑つてゐるのだつた。

日・英・佛語ちやんぼん

明治十年の西南の役が片附くと、国内は平穩になつたが、外患に備へるため、海軍の充實は

いよいよ痛切なものとなつて来た。そして我が海軍は創設期から建設の時代にと進展し、新日本海軍の發祥の地である横須賀軍港は、海軍關係者を集めた塙らっぽのやうな觀があつた。

そしてそれらの海軍關係者の集會の中心はいつも『小松』ときまつてゐるのだつた。三十歳の年増となつたコマツ女將は、海軍の豪雄、俊傑揃ひの宴席に侍して、饗應の采配を振つてゐた。

また、造艦關係の外人技師や、海軍教官の外人も盛んに『小松』に出入りをしてゐた。ほとんど總てが、英、佛を範にとつてゐる時代のことゝて、海軍要路の諸官や士官達も、海軍に關することは英、佛語を多く用ひられてゐた。ところが、負けん氣の小松女將も折角宴席に侍しても、肝腎の話がサツパリ判らないことが多いのであつた。癢に障つて仕方がない。

そこで、海軍教官のピアスといふ英國人から英語を習ひはじめた。勝氣で聰明な彼女は、一と通りの英語を、三月ばかりで覚え込んでしまつた。更に佛語を習つて、日本語と英語と佛語をチャンボンにして、英佛人と談笑したり、海軍士官を捲くし立てたりして、いやが上にも人氣を高くしてゐるのであつた。

『異人さんの言葉つて、むづかしくつてね。はじめはなか／＼骨が折れましたが、コツを覺

えてしまふと、あとは單語だけですから、割に造作もないんですよ。』

齒切れいゝ言葉で、九十歳を越えた老女將の彼女は語るのであつた。しかも記憶力の強い彼女は、その半世紀以上も昔の英、佛語を忘れないで、若い士官達に時々持ち出して笑はせてゐる。

未來の提督の巢立

海軍兵學校の前身、海軍兵學寮の第一期卒業生は、明治六年にたゞ二人であつた。兵學校となつてからは、數も多くなり、現在第七十餘期の卒業生も出してゐるが、現存者での最古參者は第十二期の有馬良橋大將（明治神宮々司）と上泉德彌中將、第十四期の鈴木貫太郎大將、第十五期の元海軍大臣財部彪、竹下、岡田各大將、第十八期の安保大將、第十九期の侍從長百武三郎大將などである。

未來の提督を目ざして海軍兵學校を晴れの巢立ちをなし、また海軍機關學校、軍醫學校や經理學校を卒業して、あこがれの遠洋航海の壯途に上る少尉候補生達は、みな『小松のおばあさん』といふ親しみ深い印象を胸に刻みつけてゐるのであつた。それは練習艦隊が母港横須賀をあとに、鵬程萬里の晴れの壯途に上るとき、司令官や幕僚、艦隊乗組士官や候補生達は『小松』で送別の宴を開催することになつてゐたからである。

また、大洋の處女航路を征服して、壯途を無事に果たし、なつかしの母港に晴れの歸港をした際は、やはり『小松』で祝盃を舉げることが慣はしになつてゐたからである。

海軍おばさん——小松のおばあさんは、若い勇士の候補生達を、自分の孫のやうに可愛がつてゐるのであつた。明治の昔から、毎年一度づゝ繰り返される練習艦隊の出航には、損得を度外して、華々しい送別の大宴會を開かれるのであつた。そしてその席上には、必ず小松老女將がみづから顔を出して、

『御國のため、しつかりやつて下さい。』

と、一人一人に盃を持つて廻り、諄々と激勵するのであつた。

歸航のときもさうだつた、

『まあ、お目出度う御座います。御無事で御歸りになつて、萬々歳で御座います。だがこれから一層御大切な御身體、これからがまた、大變な御骨折りで御座いますが、御國のため、しつかりやつて下さいよ。』

この言葉は、六十何年間も繰り返へされたのである——。

士官さんの姉御

若い士官などが、酒を飲み過ぎてだらしなくなるものがあつたりすると、もう彼女は容赦はしないのだつた。

『なんです？ 意氣地なし……しつかりするんですよ。御國のため御盡しになる御大切な御身體ではありませんか。』

手酷しくピシピシ傳法肌の口調でやつつけたこともあつた。

將官も、佐官も、尉官も、幾千人といふ海軍將士を彼女は知つてゐるのだつた。彼女は、料亭の女將らしくない女將であつた。札ビラを切つてお客顔などすることは、彼女のいちばん嫌ふものであつた。彼女は柔弱をいやしんでゐた。そして華美をいとふてゐるのであつた。

田戸の濱の斷崖の上に『小松』を創立した時代は、高級士官が來ても、先づ酒と澤庵と握飯といふお膳立であつた。田戸の濱の名物の章魚、榮螺など出るのは、大々の御馳走だつたのである。

『御國のために盡してゐる海軍々人さんに、お金をつかはしてはいけない。費用を出来るだけかけないで、愉快になつて貰ひたい。』

さうした信條から、多くの藝妓や女中が出てゐても、女將みづから、何れの宴席にも一度は必ず顔を出して、そつのないやうにと、一々心をかけてゐるのであつた。

その頃の兵學校

幕府が安政二年長崎に海軍傳習所といふものを設け、海軍將校の養成を行ふたが、明治維新政府になつてから東京築地に太政官令により海軍操練所を設立した。それが兵學寮となり、更に海軍兵學校となつたのであるが、生徒は各藩から選抜した優秀な青少年揃ひであつた。その頃は生徒は十五歳から十九歳までを幼年生、二十歳から二十五歳までを壯年生と稱し、幼年生は豫科二年、本科三年の教育期間で、壯年生は本科だけであつたが、長幼に拘らず技藝といつて軍艦の操縦や兵器の運用に就ては大いに力瘤を入れて教育されてゐた。そして教育も、技藝も、教育はイギリスから招聘した海軍士官や下士官兵が専ら擔當してゐたのであつた。

後の海軍大將で内大臣となつた齋藤實子爵は、十五のとき上京し、その翌年の明治六年兵學校に入學したのであるが、六年目の十二年に第三位の優秀な成績で卒業したのであつた。その前年の十一年卒業生には、後の伊集院五郎元師、三須宗太郎、出羽重遠の兩大將があつた。

齋藤實大將は幼名を富五郎といつてゐたが、實と改名したのはこんな話が傳へられてゐる。その兵學校の生徒となつてから、富五郎といふ名前がどうも何處かの親分の名前みたいなので齋藤富五郎少年は『奥州無宿の富五郎』とか『奥州無宿の親分』といふニックネームをつけられてしまつた。本人はそれを氣にかけてゐたが、親から貰つた富五郎といふ名をどうするわけにも行かないで困つてゐた。ところが本科一年の頃、兵學校の『乾行』といふ練習艦に『齋藤富五郎』といふ同姓同名の水夫があつた。それと氣附いれ或る上官が、

『將來海軍の上官となる兵學校生徒が、水夫と同じ名で呼び捨てにされてゐるのはよろしくないから、改名したならどうか。』
といふので、早速富五郎を實と改名したのであるといふ。

明治天皇軍港行幸

帝國第一艦の進水式臨御

畏くも 明治天皇におかせられては、明治八年三月五日、横須賀軍港に行幸相成り、軍艦『清輝』の進水式場に臨御あそばされ『進水』を天覽あそばされた。これが軍艦進水式臨御のはじまりである。その頃は進水式を公式には『落成』と稱し、一般には『船卸式』といつてゐた。

この清輝は迅鯨と共に、明治六年横須賀造船所において同時に起工したのであるが、清輝は右の如く八年三月五日進水し、迅鯨は九年九月四日進水したのであつた。

内國製軍艦の創始に就ては、維新前に幕府が東京石川島に造船所を設け、文久三年千代田艦といふ百三十八トンの小軍艦を建造に著手したが、明治海軍としては清輝が第一艦であつた。

清輝は木造の八百九十六トン、速力九ノット半、乗組員百七十一人であつて、迅鯨は一千四百五十トンといふ當時では第一の大型艦であつた。

また明治十四年五月十八日、明治天皇には、再び横須賀軍港に行幸あそばされ、建設途上の帝國海軍の状況を親しく天覽あそばされた。『明治天皇行幸年表』には左の通り記載されてある。

明治十四年五月十八日、横須賀行幸。

観音崎砲臺及横須賀造船所天覽。

新橋停車場發御、横濱停車場著御。

横濱港 迅鯨艦乗御、御發航。

浦賀港 著御。御上陸御巡覽ノ上 横須賀還御。

観音崎砲臺御巡覽、軍艦射的天覽、横須賀行在所 御泊。

十九日、横須賀造船所御巡覽、迅鯨乗御、横濱港還御。汽車ニテ 御還幸。

光榮の御召艦は當時の最新鋭の迅鯨であつた。同艦は東郷大將が少佐で副長であつた。また

供奉艦の扶桑には山本權兵衛大將が中尉として乗組み、齋藤實大將は見習士官で同艦に乗組んでゐたのであつた。

傳統の「海軍工廠魂」

無敵海軍に傳統の「海軍魂」があるやうに、世界に誇るわが優秀な海軍の建艦の總元締たる横須賀海軍工廠には、これまた傳統の「工廠魂」があるのである。

はじめての日本製軍艦「清輝」が進水した頃の、横須賀製鐵所時代の職工さんは、印半天に草鞋がけで、當時のいはゆる「御場」に早朝から通勤してゐたものだつた。なにしろ、人口一千にも足りない半農半漁の東海の一寒村だつたから、職工さんになる人たちも不足なので、現在は横須賀市に合併してゐる當時の豊島、衣笠、田浦、久里濱村や、武山、浦賀、長井、金澤、逗子、葉山など隣接の各町村の子弟たちが擧つて「御場」の職工さんを志願して、わが海軍黎

明期の建設にいそしんでゐるのであつた。鐵道も、電車も、自轉車もない時代だ。みんな暗いうちから起き出て、草鞋ばきで辨當包みを抱えて通つたのである。

職工さんの賃金は、十等ぐらゐにわかれてゐて、各役付でないと、二十錢以上の日給は貰へなかつた。最初はいりたての見習工が七、八錢、平職工が十錢、差配方といふ幹部職工が二十八錢ぐらゐだつた。その差配方の上役に、頭目といふのがあつて、一人扶持の三十二錢を貰ひ威張つてゐたもので、頭目になるのはなかなかの出世といはれてゐたものだつた。

その頃は、一隻の軍艦をつくるのに三年餘もかゝつた。なにしろ一隻の軍艦が、物價の安い當時に三百萬圓もかゝるので、一度に出すのはたいへんで、その上、材料は外國から買ひ入れるため、おいそれといふわけにはゆかないのだつた。

佛國技師ウエルニー

製鐵所の首長フランス人のウエルニーといふ技師は、とても嚴格な人で、朝の六時には、も

う入口のところに来て、出勤者を見張つてゐて、少しでも遅れて来る者があると、頭からどなりつけたり、仕事中に怠けてゐるのを見つかり、日給を半分に減らされたりした。——海國日本の海軍の創始期に當り、その建艦の指導にフランス本國から選抜されて、來邦した優秀な技師であらうが、外國人としてよほど熱心に、責任を持つてわが日本の建艦の指導に携はつてゐたものと思はれる。

はじめて鐵の軍艦が建造されたのは、明治二十年頃で、『愛宕』が、その最初の軍艦であつた。日本で出來た『鐵の軍艦』だといふので、その當時はすゑぶんだ騒ぎをしたものだつた。それまでは軍艦といつても『海門』にしる『天龍』(初代)にしるいづれも木造艦で、排水量千四、五百トン、速力十六ノット、主兵裝は十七センチ砲一門といふ程度のものだつた。『葛城』『大和』『武藏』の三艦は、明治十六、七年頃の建造で、いづれも千五百トン、鐵骨木皮で速力十五ノット、十七センチ砲二門を備へ當時の最新鋭の優秀艦であつた。

それから五十餘年、世界に誇るわが造艦技術の今日の進歩を思ふと、文字通り隔世の感に堪えぬのであるが、それは造船、進機の海軍將校や技師たちの、専門家の撓ゆまぬ研鑽と優秀な技術の賜物であらうけれど、また直接力と汗をもつて、不斷の努力を續けて來た、海軍職工さ

んの貢献を特記すべきであらう。

製鐵所創設以來の『工廠魂』は、傳統の海軍魂と同じやうに『沈黙』の二字に盡きてゐる。『建艦報國』の至誠を胸の奥に叩き込んで、たゞ黙々と倦まず撓ゆまず、職場に通つて奉公にいそむのである。海軍の職工さんたちには、時流に便乗しての浮華輕佻といふやうなものは微塵もないのだ。たゞ『お、か、みへの御奉公』あるのみだ。

事實、横須賀海軍工廠の職工さん（いまは工員といつてゐる）たちには、父子兄弟數人が同じ職場に勤めてゐるものや、祖父以來三代の職工さんなど珍らしいことでなく、明治の昔から幾多の戦役、事變に多大な功勞を捧げつゝ、大東亞戦争の今日に至つてゐるのである。

日本建艦の恩人

わが海軍の建艦創始當時からの指導者であり恩人であるウエルニ一技師が、海軍に捧げた功

勞を多として、軍港諏訪公園の山上に、彼の銅像が建立されてゐる。海軍工廠を眼下に見おろし無敵海軍のくるがねの浮城をつくる高壯な造船臺と相對してゐる彼の銅像に、もし靈あらば今日の感慨はどんなものであらうか。

ウエルニ一技師は、現在横須賀鎮守府のある附近の山の上に官舎があつて、フランス人の部下と共に、製鐵所の一切を指導してゐたのである。この官舎住まゐるフランス人について面白い話がある。

「小泉又さん」登場

當時、ウエルニ一技師たちの官舎の子供を『異人さんの子供』といつて、近所の腕白者が盛んにいちめたものだった。そして誰れも遊び相手になつてやる者がなかつた。ところが近所の稲岡町に小泉といふ鳶職の親方があつて、その家に又さんといふ勝氣の少年がゐた。その又さ

ん少年は、

『異人もなにもあるものか。みんな俺たちと同じ世界の人間だ。しかも日本へ軍艦をつくることを教へるために、わざわざ遠い外国から来て呉れた人たちじゃないか。その異人さんの子供をいぢめたりすると、俺が承知しないぞ。みんな仲よくいたはつてやり給へよ。』
といつて、自分から眞つ先きに異人さんの子供に近づき、仲よく遊び相手になつてゐたものである。——この又さん少年こそ、後年のわが憲政運動の先驅者で憲政の功勞者、人情大臣と謳はれた小泉又次郎翁である。

『又さんも出世なさつたもんですね。しかし、やはり子供のときから他の子供と、どこかちがつていらつしやましたよ。』

と、小松刀自は述懐してゐる。小泉元遞相も今は七十七歳だが、九十五歳の小松刀自から見れば、丁度母子ぐらゐの差があるのだ。

『負けず嫌ひの強情な性分だね。十二歳のとき、竹箴で足に大怪我をしたのを、自分で膏藥を貼つて黙つて隠してゐた。それをお母さんが發見して、大騒ぎをしたことがありました。自分で怪我をしたのだから、痛いと言もいはなかつたさうだが、醫者も驚いてゐたといふ

ことでした。』

小松刀自は、人情大臣の子供姿を、臉に描き出してゐる。小泉少年は、汐入小學校を卒業すると、直ぐに母校の代用教員になつたほどの秀才だつた。自分では向學心に燃えて、教育家になるつもりだつたが、父が急死したので、家業の鳶職——昔は仕事師といつたその親方となつて、年若い身で乾分を連れて、小松刀自の家にも出入りしてゐた。

『いつも眞白な鼻緒の麻裏草履をつツかけて、きちんと粹な身装りをしたいなせの若親方でしたよ。』

その小泉親方は、花柳界のひとたちにすゑぶ騒がれた人気者だつたが、酒は飲まず、多勢の弟妹の面倒を見て、若い衆を率ゐて小泉家の大黒柱を背負ひ、若い頃から苦勞したものだつた。それが、ふとした動機から政治に興味を持ち、公正新聞といふ日刊新聞を發行して、自ら社長となり、日露戦争後、横須賀の市制施行と共に市會議員となり、縣會議員、衆議院議員とトシ／＼拍子に政界に乗り出し、普選獲得運動には、山王臺から騎馬を上野の山に進めて、獅子吼したことは憲政史上あまりに有名なことだ。

『小泉さんが、濱口さんが内閣を組織なさつたとき、遞信大臣におなりになつたと聞いたと

きは、實際夢かとはかり喜びましたよ。』

その小泉の又さんが、昭和九年に、名譽市長として、郷黨の横須賀軍港に迎へられたとき、度々小松老刀自と相會して、半世紀前の往時をなつかしく語り合つたのであつた。

建設期の海軍

畏し、明治天皇の御英斷

わが帝國海軍は、前に述べたやうに明治維新以前にはじまつたものであるが、ほんたうの海軍と稱するには足るものでないのだつた。海國日本の國軍として、組織ある帝國海軍の歴史は

明治の御代において、眞の創設を見るに至つたのである。

二百餘年の鎖國の夢醒めて、英國や米國や和蘭をはじめ、歐米各國の東洋侵入、日本を窺ふ情勢に驚愕させられたわが國民は、はじめて海防の急務を自覺し、海軍建設に着手するに至つたのであつた。幕末の先覺者勝海舟などによつて創始せられた海軍は、王政復古の大業成り、國運の統一を見たときに、帝國海軍の基礎は嚴然と定まつたのである。

畏くも 明治天皇におかせられては、明治元年十月、軍務官に對して

海軍は當今第一の急務あるを以て速に基礎を建立すべし

との御沙汰を下し給ふた。翌年二月聖駕濱離宮に親臨あそばされ、はじめて、海軍を御親閱あそばされた。

更に、明治三年一月十一日には、東京築地の海軍操練所の始業式に御親臨あらせられて以來、毎年海軍兵學寮（海軍兵學校の前身）の始業式に臨ませられ、海軍始め議式として、親しく軍狀をみそなはせ給ふのを例とした。そしてその際屢々優渥なる勅語を賜はり、帝國海軍建設に叡慮を添ふしたのであつた。

このやうに帝國海軍の創設時代において、畏くも 天皇御親ら海軍建設に大御心をそゝかせ

給ひ「智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」との御誓文の趣旨を御みづから御實踐になり海軍建設の大業を終始御推進あそばされたことは、まことに有難き極みと申し上げねばならぬのである。

しかし海軍建設の途上には幾多の難關があつた。先づ第一に、庶政一新の過渡期であつて國家の財政難が横たはつてゐた。海軍自體においても教育、人事、技術などあらゆる方面に一方ならない苦心があつた。且つ國民の海軍思想は極めて幼稚であることも海軍々備の整備上に大きな障害であつた。

國內外の多事多端の折柄にもかゝはらず、それらの幾多の支障を排除して、わが帝國海軍の進路を開拓したものが、一に、畏くも明治天皇の御英斷によるものであつたことを、わが國民は永久に忘れてはならないのである。

明治十五年一月四日に、軍人勅諭が渙發され、茲に建軍の本義は闡明せられた。帝國軍人たるの榮譽と責務は永遠に明徴されるに至り、帝國海軍は「天皇の海軍」として、いよいよ磐石の基礎の上に、新生するに至つたのであつた。

製艦費を御下賜

わが日本帝國の海軍は、實に、畏くも明治天皇の御手によつて創建せられたのである。帝國海軍七十餘年の歴史を回顧するとき、われら國民は、先づ明治天皇の宏大無邊なる御恩澤を偲び奉らねばならぬのである。

海戦の勝敗は、常に國家の盛衰興亡の運命を決定することは、古今東西の歴史がこれを證明してゐる。海軍の無かつた徳川三百年の歴史を顧み、更に「文明開化」と稱して歐米の文化を吸取に専念してゐた明治の御代に、印度、支那など、既に白人の侵略するところとなり、太平洋上には歐米諸國の軍艦旗が翻つてゐる現實に對して、わが日本は實に慄然たるものがあつた。

明治十九年、政府は、海軍公債を募集して、大小五十四隻の軍艦建設の計畫を立てた。そし

て更に、翌年三月には、全國に『海防費献金』を奨励したのであつた。

この時に當り、長くも 明治天皇におかせられては、率先して、御内帑金三拾萬圓を御下賜あらせられた。全國民は恐懼感激して、競ふて献金をなし、その額は忽ち二百拾餘萬圓に達したのであつた。

更に明治二十五年、松方内閣で樺山大將が海軍大臣のとき、政府は二十六年以降の繼續事業として、戦艦二隻、巡洋艦一隻、通報艦一隻を建造に着手しようとした。ところがその頃は議會は毎年に互つて建艦案を不成立に終らしめてゐる有様だつたが、またもや右の建艦の政府案を否決してしまつて、こゝに政府と議會は海軍問題をめぐり、深刻な對立を見るに至つた。

明治天皇におかせられては、長くも、いたく宸襟を悩ませ給ひ、遂に文武百官に、詔を賜ひ六年間毎年内廷の費を三十萬圓づゝ省いて、これを建艦費に御下賜あらせられる旨を仰せ出された。文武百官もまた、天皇の詔を奉體して同期間、みなその俸給の十分の一を醸出して、製艦費の補足を行ふことになつた。

そのため政府と議會の對立は忽ち解消してしまつた。そして圓滿なる審議の結果、わが海軍最初の戦艦富士、八島の兩艦をはじめ、巡洋艦明石、通報艦宮古の四隻が建造されることにな

つた。

まここに有難き、この御英斷の結果が、一年後の日清戦争に、また更に十年後の日露戦争にいかに大きな影響を及ぼすに至つたかは、實に測り知るを得ないほどであつたのである。

一念「海軍報國」

わが海軍の創始以來、女性の身ながらも『海軍報國』を念願として終始して來た山本小松刀自は、右のやうな海軍建設の大業の推進について、一切をその半生において知悉して來たのであつた。政府が海軍公債を募集して、建艦計畫を立てたときは、率先してこれに應じたことは言ふまでもないことである。更に『海防費献金』の發布があるや、私財全部を捧げて惜しまないのであつた。

また、自分の財産だけでなく、親戚や縁故者を一々熱心に訪れて、

「戦争のときばかりでなく、平時から斯うして立派な軍艦を造つて、海軍のため、御國のために盡さねばなりませんよ」

と、國防の重大性を説いて、應分の献金を行はしめたのであつた。

明治天皇を景仰し奉ること、何人にも劣らい小松刀自は、明治天皇が、帝國海軍の建設に對して、いかに大御心をそゝがせ給ふたかと、後年に至つても、その往時を追懐して恐懼感激の涙に、老眼を濡らすのであつた――。

軍艦旗の制定

小松刀自が十歳のとき、はじめで見て大好きになつた大艦旗、即ち日の丸の軍艦旗は、鹿兒島の島津齊彬公が、自分で白地に紅の日の丸を描いた旗を考へ出して、同じ考への水戸烈公に相談の上で、時の老中阿部伊勢守に採用方を上申したのであつた。

その前の昔は、戦さ船の軍艦には旗といつても、幟か吹き流しのやうなものを掲げてゐたのである。それは、水軍の大將の旗印とか、また舊幕時代には、佐賀とか鹿兒島、山口などの大藩が軍艦を持つてゐた關係から、それぞれ藩主の定紋を描いたものであつた。

徳川時代の鎖國政策をとつてゐた頃は、外國との交通も殆んどなかつたので、各藩で勝手な旗を掲げて、格別差支なかつた。しかし幕末の頃から、英國、米國、それに露西亞、和蘭など、各國の軍艦や汽船が盛んにやつて来るやうになると、勝手な旗を掲げてゐたのでは何處の國の船か外國人には判らない。そこで、島津公が熱心に主張して、日の丸の旗を考へ出して安政元年に幕府の布令によつて、日本船舶の總船印とすることになつたのである。

更に明治の御代となつて、同三年に太政官の布告で、右の日の丸の船印、あるひは大艦旗といつたものを國旗と制定され、旗の大きさや掲揚方などをきめられた。引きつゞいて同年『海軍御國旗』といふ制が出て、軍艦は『御國旗』を艦の後方に掲げて日本の軍艦であることを示し、また、艦首の旗竿にも艦首旗として、小型の國旗を掲げることになつた。

それから約二十年間、軍艦には艦の前後に國旗を掲揚して來たのであつた。しかし外國はどうかといふと、米國、佛國や和蘭のやうに軍艦旗も國旗も同一の國もあるし、また英國、獨逸

伊太利、露西亞、西班牙などでは國旗とは別に軍艦旗を定めてゐるのであつた。そこで日本では陸軍には聯隊旗があるので、海軍でも國旗とは別に、軍艦には、ほかの旗をつくつて掲揚した方がよからうといふことになり、明治二十二年に初めて『海軍旗章條例』を制定され、茲に現在の、十六條の光線のある軍艦旗を生み出すに至つたのである。——なほ、大正三年、海軍旗章條例を海軍旗章令と改められ、日本精神を織り込み、軍艦旗の尊嚴を形の上に表はし、海軍々人の軍艦旗に對するあこがれと、敬虔の念を一層嚴肅ならしめるに至つた。

榮え行く軍港

鎮守府が開設されてから横須賀は、中央から海軍の顯官の往來も一層頻繁となつて、漁村としての古い殻を全く脱ぎ捨て、潑刺たる軍港町として起ち上つた。三階建ての料理屋が出来たといふので、町の大評判となつたり、はじめて西洋料理店が開業して、ハイカラ黨の集合所と

して繁昌した。この西洋料理は、製鐵所のウエルニー技師などの關係もあつて、フランス料理が主だつたので、東京や横濱にもない、世界の粹のフランスの本格的の料理を、横須賀へ行けば食べられるといふので大評判になり、京濱方面から海の蒸汽船や、人力車に乗つて、わざわざやつて來る者もあるといふ有様だつた。

町にはガス燈がついて明るくなつた。ガス燈といつても瓦斯ではなく、石油ランプの街燈をガス燈と呼んで、ハイカラがつてゐたのだ。海の蒸汽船と對應して『岡蒸汽』といはれてゐた汽車が通じて、東京、横濱、横須賀を陸上で一路に繋ぐやうになつたのは明治二十二年である。現在東京、横須賀の省線は一時間足らずだが、その頃は三時間もかゝつた。それでも早い／＼と大人氣であつた。

その翌々年には、山地の多い横須賀にも、國道筋にはトンネルを開掘されて、交通に便利になつたが、自轉車が天下の珍品として横須賀入りをしたのは、もつと後年の日清戦争が終つてから四年目の明治三十二年であつた。

海軍男子の入團

『いまの水兵さんたちがつて、昔はお内儀さんと子供が三人あるなんて、二十七八歳の世帯持の人が、田舎から志願して水兵さんになつたものもありましたよ。それもやつとのことです。願ひが叶つて入團して、最初は五等卒で、一年経つて漸く四等卒になれたものですよ。』

明治中年時代の水兵さんについて、小松刀自は懐しさうにこんなことを回顧してゐる。今も昔も變らず、横須賀の一年中で最も華やかなのは海兵團の入團である。横鎮管下各府縣から選ばれた若者たちが、各市町村の兵事係や父兄たちに附添はれて、續々と横須賀軍港さして繰込んで来る。

町の宿舎で一夜を明かして翌日の早朝いよいよ海兵團入りで、點呼と軍醫官の嚴重な身體検査の後、先輩の水兵さんたちから身の廻りをつくつて貰ひ、板につかないながらも恰好だけの水兵さんが出來上る。田舎から出て來た若者など、もう無敵海軍の勇士になつた氣で胸をわく

／＼させてゐる。その日はおかしらつきのお魚に赤飯の御祝ひの御馳走だ。そしてはじめてハシモツクの寢床に釣られて、海軍生活の第一夜の夢を結ぶのだ。

鎮守府司令長官臨場のもとに、嚴肅な入團式が、入團の數日後に舉行され、こゝにはじめて正式に海軍々人の一員となるのだ。それから陸上において海軍のつはものとしての訓練につくのであるが、入團の初期は赤い腕章が無く、軍服だけの眞つ黒なので、先輩の水兵さんたちは新兵さんを『烏』などいふ愛稱を呈上する。

海兵團でみつちり訓練を積んでから、艦隊その他に配屬されてやつと腕章一本の三等水兵になる。山國の出身の新兵さんなど、はじめて軍艦に乗組んだ日のことは一生忘れられないといふ。しかし軍艦生活にも馴れてくると、たまの上陸の日がまた楽しみである。それに善行章を附與された者は、その善行線の本數によつて軍港在港中は二日おきとか四日おきの上陸が出来るが、そのほか艦内で鼠一匹また油蟲を二百匹捕へた者には上陸を一回許可するといふ制度もあつた。

規律の嚴格な軍艦生活にも、この『鼠上陸』『油蟲上陸』といふやうな愉快な制度があるのは海軍獨特のものだ。そして軍艦内にも浴場がもちろんあるけれど、水兵さんたちは上陸して町

の風呂にはいるのも楽しみの一つで、駆逐艦、潜水艦などの小さな軍艦の乗組員には、日をきめて交代に「入湯上陸」なども昔から行はれてゐるのである。

日土親善軍艦の沈没

五十年前、救援の思出

明治二十三年六月、日土親善のため遙々來邦して使命を果し、その歸國の途次、紀州大島樫野崎沖合で暴風雨に遭遇して沈没、司令官エミン、オスマンパシヤ提督以下六百五十名乗組將士のうち、わづかに六十九名をあますのみで、あとは全部みづく屍と消えたトルコ國巡洋艦エ

ルト、グロール號の遭難事件について、わが政府ではこの悲しい思ひ出の樫野崎に、日土親善の床しい心やりから、昭和十二年六月殉難慰靈碑を建立したのであつた。

これを周知したトルコ政府では、當時日本の温い手に救はれて本國に送還された六十九名の將士のうちの現存者を調査したところ、當時海軍一等兵曹として乗組んでゐたアフメッド・イルキツン翁(七)ほか七名の現存者を発見したので、同政府ではこの八名の往年の勇士たちを再び親善使節として日本に派遣し、いまだに日本に生存してゐる當時救援の海軍の人々の好意に感謝し、アジアの東と西を結ぶ日土兩國の友情を永遠に約束する計劃を立てたのであつた。

この日土親善使節の派遣は、昭和十三年の三月、トルコ政府からわが政府に内報があつたので、いろ／＼調査を行ふたが、横須賀鎮守府新聞記者團太平洋會の一員は、先づ小松刀自に訊いてみた。すると老刀自は靜かに思出の絲をたぐつてゐたが、

「さう／＼、そんなことがありましたよ。かれこれ五十年も昔でせう。初代の軍艦金剛が救援に行つたやうでしたが……。そして、たしかその當時救援と送還に行つた兵隊さんで、浦賀に生きてゐる人がある筈ですが……。」

といふことだつた。それで調査してみると、當時金剛に三等兵曹として乗組み、遭難トルコ

軍艦を救援に赴いた上に、本國に送還した老勇士を發見したのであつた。その老勇士は浦賀町新井に居住の高橋喜之助翁(七)であつた。高橋翁は、當時を追想し、再びおとづれ来る八名の異國の友に限りないよろこびの思ひを馳せてゐるのであつた。

海軍の厚遇に感激

高橋喜之助翁は、當時若冠二十五歳の下士官であつたが、軍艦金剛に乘組み、エルトグロール號の紀州沖遭難の報に、艦長日高壯之丞大佐(後の大將)の麾下として紀州沖に急行し、六十名のトルコ海軍將士を救援、明治二十三年八月、この傷ける異郷の友を看護しながら海波萬里を越えて、翌二十四年一月二日トルコに到着、生存將士を送還した帝國海軍軍人の一人で、再び訪れ來るといふ異郷の友の快報に、うたゝ今昔の感に打たれてゐるのであつたが、五十年前の思ひ出話は次ぎのやうなものである。

『早いものだ。もう五十年にもなるかなあ。あの當時、私は三等兵曹として金剛に乘組んでゐました。エルト・グロール號が横濱に入港したのは、たしか明治二十三年の五月頃だつたと思ひます。トルコといふ異國の軍艦がはじめて來たといふので、横濱はお祭りのやうな騒ぎでした。なにしろトルコなどいふ國のあることを一般の人たちは知つてゐない時代でしたからね、そのトルコが日本と仲よくしようといふので遙るゝ軍艦をよこしたんですからみんなよろこんで大歓迎したんです。ところが、それから間もなく同艦にコレラ患者が出たといふので、横須賀に廻航となつて、長浦消毒廠に一ヶ月ばかり滯泊してゐました。そして六月の半ばころになつて漸く歸航の途についたのです。ところが紀州でひどい暴風雨に遭遇して坐礁してしまつて、あの沈没事件となりました。當時わが海軍から金剛と比叡の兩艦が出動して、附近の村の人々と協力して荒天を冒して必死の救援に當りましたが、乗組員の大方は殉職してしまひました。まことにお氣の毒でしたよ。残つた六十九名のうち八名も、あの樫野崎にあつた病院で死亡しました。そしてその八月になつて、江田島の兵學校の少尉候補生が遠洋航海に行くことになつたので、六十一名の生存者を金剛と比叡に分乗させて、トルコへ送還に出航したんですが、トルコの海軍さんは日本海軍の手厚い待遇に感激しまして

ね、言葉は判らないが、私達の手を握りしめてはいつ覺えたか、たゞ「アリガト、アリガト」と涙を目にいつばいためてよろこんでゐました。丁度お正月の二日にトルコに著きましたがトルコに著いてからは大變歓迎されて、政府から功勞章と感謝狀を送られました。約一ヶ月の間は同國の首府コンスタンチノールで歓迎攻めで、毎日パンと洋食の御馳走には参りましたよ。——あのとときに生き残つた人たちが、再び日本に訪れて來るといふことは非常によろこばしい。その節はぜひ逢つてみたいものです。

老眼をしばたゝいて高橋翁は嬉しさうだつた。——なほこのトルコ軍艦の報恩親善使節來邦は、その後歐亞の風雲急迫のため延期となつたが、西亞の友邦と親善のためその實現の日を待たれてゐる。

☆

(附記) 大正十五年九月、山本英輔中將(現大將)司令官の練習艦隊出雲、八雲兩艦は、遠洋航海の途、トルコのコンスタンチノールに寄港した。それは、前述の日土親使節オスマンパンヤの軍艦エルト・グロール號遭難者を金剛、比叡兩艦がトルコに送還し、同國宮廷の殊遇を受けた以來はじめての日本艦隊の訪問であつた。そのわが練習艦隊の寄港に際して、

トルコでは、往年のことを追憶し「エルト・グロール號遭難を救援し、生存者を送還したのは、畏くも 明治天皇の御思召によるもので、われ／＼トルコ國民は、日本のその厚情を忘れてはならない——」と新聞で大々的に報道し、練習艦隊乗組將士を、朝野をあげて大歓迎した。その熱心な歓迎は、忘れ難き恩義に報えんとする赤心のほとばしりであると共に、維新後六十年にして一躍世界の強國に列し、東洋に覇を唱ふるに至つたわが日本にあやからんとするトルコ人の熱意にほかならないのであらう——。

三國一の花聳殿

齋藤實大將が、大尉の頃、海軍の大御所といはれた仁禮景範子爵(元海軍大臣で海軍省前に銅像がある)の長女、才色兼備の譽れ高い春子嬢と、突然華觸の典を擧げられたと聞えて、さすがの小松女將も「まあ——」と驚いたとのことである。

齋藤大尉と春子嬢の結婚については、こんな挿話がある。――明治の中年時代で、まだ海水浴などあまり流行してゐない頃のことだ。或る夏、軍艦から上陸中の齋藤大尉は、同僚達と鎌倉に遊びに出かけた。すると海岸で、上流家庭の令嬢らしいのが五、六人で、大膽にも遊泳に打ち興じてゐるのだつた。それを見た若い士官達は、

『なんだ、毛唐の眞似をして。生意氣千萬な女學生達だな。』

と元氣のいゝ連中のことゝて「よしッ、いたづらをして懲らしてやれ。」とばかり、そこはいづれも水泳達者な面々だ。少し離れた海岸から海に飛び込んで、水中を潜つて、突然令嬢達の泳いでゐる海面へ、ポツカリ浮び上つたもんだ。

不意に若い逞ましい裸身の男の出現に、さすがの令嬢達も『きやッ、きやッ』とびつくり仰天。あはてふためいて陸上にあがつてしまつた。

その令嬢の中に、今を時めく仁禮子爵の令嬢春子さんがゐたのだが、自邸に歸つて事の次第を父子爵にお話した。そして、いたづらしたのは、どうやら海軍士官らしいといふのだつた。それを聞くと、仁禮子爵は、

『なに、海軍士官だ？ 不埒千萬な奴どもだ。よしッ懲らしてやらう。』

と憤慨し、部下に命じて詮議となつた。仁禮閣下御令嬢にいたづらした下手人を調査してみたが、その權勢に恐れをなしてか、どうも判らない。大いに困り抜いてゐると、

『その犯人は自分である。』

と、齋藤大尉は堂々と、みづから名乗り出たのであつた。それを聞いて、仁禮子爵は非常に感心した。

『正直な男だ。どんな士官か一度逢つてみたい。』

といふので彼を招いて對面した。ところが恰幅もよく、誠實直情、たのもしさうな海軍士官それは嘗て自分が兵學校長時代の教へ子の齋藤實大尉だつた。そして海軍のことについて、いろいろ意見を訊いてみると、口は鈍重だが頭腦の冴えた明敏さ、その識見は堂々たるものだつたので、子爵はすつかり齋藤大尉を好きになつた。それに男の惚れるやうな齋藤大尉の男つ振りに、子爵夫人もたのもしい海軍士官と認めたので、夫妻とも、

『春子の婿にする男は、あの男のほかにはない。』

と、大乘氣になつて、遂に獨身主義の齋藤大尉を、三國一の花婿殿に据えてしまつた。大酒飲みの齋藤大尉は、斯うして一躍美貌の才媛春子嬢と結婚し、大いに羨望的となつたが、齋

藤大尉は軍令部參謀や海軍次官の要職を歴任し、海軍大臣、朝鮮總督、總理大臣、内大臣と榮達し、その間つねに春子夫人が影の形に添ふ如く伉麗睦じかつたことは周知の事である。

天下の三珍

豪放、酒びたりになつてばかりゐた齋藤實大尉の結婚は、知友の間に不思議なこゝとゞされてゐた。明治二十五年二月、當時齋藤大尉は海軍省人事局出仕であつた。

しかも相手は時めく薩摩海軍の大先輩海軍中將仁禮景範子爵（同年八月海軍大臣になる）の美貌玉のやうな一人の令嬢春子さん、芳紀まさに十八歳、その月下氷人の媒酌の勞を進んで引き受けたのが大臣官房主事で、やがて飛ぶ鳥を落すばかりになつた山本權兵衛大佐であつた。黄道吉日の二月五日、赤坂區田町一丁目五十六番地の齋藤大尉の小居に、華族さまの一人娘の、花嫁御寮の御入來を迎へた。

知人たちから寄せられた祝ひ状のうちにも、盛んに冷やかしてゐるのが多かつた。その代表的なものに、軍艦に乗つて當時香港に行つてゐた坂本俊篤大尉（後の中將、男爵）が、名刺に書いてよこしたのが振つてゐる。曰く、

『賀新婚。留守中の三珍。地震、解散、兄の結婚』

濃飛の大震災や、松方内閣の第二議會の解散……それと合せて天下の三大事とされたのであるから、齋藤大尉もソウトウなものだつたらしい。

すでに父君耕平氏亡きあとのことと、質朴忠實な慈母の菊兒刀自が郷里陸中水澤から出て來て、のび行く愛子のため何くれとなく世話してゐた小居に、輝くばかりの美貌才媛の花嫁御寮を迎へたのだ。慈母のよろこび、一家の幸福……それにも増して昔の水澤役場の給仕齋藤富五郎君のこのお目出度に、郷里の人たちは目を丸くして驚き且つ歡喜したのであつた。

豪膽磊落な反面に、非常に細心緻密な齋藤大尉は、他人まかせを好まず、何事も一切自分で几帳面にやつてゐた。「入籍届」の寫しも齋藤家に保存されてある。これも自筆で郷里の役場へ届けたものである。

『從三位勳二等子爵仁禮景範長女はる子。右者今般宮内大臣の許可を得て、齋藤實妻に貰受

け入籍致し候間此段及御届候也。陸中膽澤郡水澤町平民、正七位齋藤實』

几帳面な結婚記録

人手にまかせることの嫌ひな齋藤大尉は、花嫁御寮を迎へる當時の準備など一切自分で立案したもので、そのときの覚え書、祝ひ状、その後の結婚披露宴の料理屋の費用受取書などを一とまとめにして『結婚記録』と表書きして、鼠色の大きな封筒に入れて保存してあつた。その五十年も文庫の底に秘められてあつたのを、嗣子齊氏の手で先年蟲干しされたのであつた。箇條書を巻紙の切れに記したものを、半紙への走り書き、それらはみな胸をときめかしつゝ當日の豫定を自ら筆で書き記したもので、その頃の楽しいさまが想像されるのであつた。なにしろ何千何百とある私信やら公文書などが一々分類されて居り、書きそこねの端紙さへおろそかにしないで、幾十年もの間のものがキチンと残されてあるのには、今更ながら几帳面だつた若き日

の性格が偲ばれ、見る人をしてたゞ驚嘆せしめるのであつた。

『入來、杯事、その間に湯、菓子、引盃の事、本盃をする事あり。家族だけ。媒酌人引去。通例の宴、本膳。座は新夫婦上席』

餘白に丸二つ並べてあるのは新夫婦の座席であつて、その左右に仲人の位置をやはり丸で記してあるのが一枚の紙で、他の一枚には

『十二人前、座蒲團、燭臺、火鉢、茶道具、料理人仲働き三人、女中二人』

と記してあり、下の餘白には料理代の計算がしてあるのだつた。一人前二圓二十錢なのか、 $12 \times 2.20 = 26.40$ の計算をして、合計二十六圓四十錢也。その豫算がなにかの関係で五十錢追加となり二十六圓九十錢——これで春子夫人を迎へることが出来たのであるが、さて當日の式場は、住居に近い赤坂の八百勘で、その晴れの座に列したのは媒酌人の山本權兵衛伯、後藤新平伯の令弟や令姉、郷里の人や仁禮子爵家の親戚の奥さんなどを入れて十二名だつたのである。景範子爵と山本夫人は缺席と見えて鉛筆で消してあつた。——この日は『親戚だけ』と覚え書に記され、翌日は友人たちを招待して同じく八百勘で十圓五十六錢、合計三十七圓四十六錢也が結婚式場と披露宴の費用で、手金を十圓を前渡しして置いたことも請取にチャンと書いてあ

るのだつた。——斯ういふことは多くは仲人のやることであらうが、一々なにからなまでに自分で書いて立案して、そしてその通りに實行されてあるのだから驚嘆のほかないのである。

——後年、海軍大將に榮進し、海軍大臣、内閣總理大臣、内大臣となつた重臣齋藤子爵の若き日の姿は、その几帳面な結婚記録によつてうかがはれる。

齋藤子爵のあるところ、必ず春子夫人の楚々たる麗姿があつた。私的生活はもちろんのこと或ひは自動車の中に、或は晴れの宴會に、また駐在武官や、軍縮會議で遠く海の彼方のジユネーヴの異境の旅にも……その見るも麗はしい老いたるアベック振りは、若い頃からの睦じさが一貫した姿そのものゝ現はれであつたのである。——それがあの雪降りしきる帝都に突發した二・二六事件の朝のことを思ふと、誰れか悲痛な感慨に胸をしめつけられない者があらうか——。

日清談判破裂して

樺山大將の大度量

『日清談判破裂して……品川乗り出すあづま艦、つゞいて金剛浪速艦……國旗堂々翻へし……』

と、明治二十七八年戰役の當初から、廣くうたはれたこの唄は、現在から考へると、唄の文句も節もすこぶるのん氣なやうな調子であるが、それは、一面には當時の國民の戰爭といふものに對する觀念が、割合に、切實でなかつたものゝやうに思はれる。

しかしながら、日清開戦は容易ならぬ覚悟、即ち大勇断のもとに決行されたものである。支那は、我が日本の何十倍もある大國で、老大な陸軍を持ち、殊に、海軍には鎮遠、定遠の如き甲鐵艦があるのに、我國は松島、嚴島などの巡洋艦のみでは、到底勝算の見込みはないといふのであつた。そればかりではない。朝鮮に東學黨が蜂起し、日清談判が切迫したとき、ロシアにゐた西公使から『もし日清兩國が開戦したならば、ロシアの東洋艦隊が清國を援けることにならう。』と通報があつた。驚いたのは政府である。

そこで伊藤總理大臣は、直に陸海軍に向つて、これに對する意見を徴したのであつた。陸海軍の要路では、双方の參謀を集めて謀議を凝らしたところ、支那一國でさへ強大な陸海軍を擁してゐるのに、更にロシアが加勢したのでは、勝算は立たないと、誰一人として勝利を主張する者がなかつた。

ところが陸軍の川上大將と、海軍の樺山大將とは、その席上で

『諸君は、一體勝つ積りで議論をしてゐるのか……。』

といつて、大聲立て、笑つたものだ。一同は、呆つ氣にとられて、兩大將がなにを言ひ出すかと緊張してゐると、兩大將は何事も言はずに、サツサとその場を出て行つてしまつた。これ

は謀議が『勝算なし。』といふことにならうと知つてゐて、兩大將はしめし合せて打つた芝居だつたのである。そして早速伊藤總理大臣の處に行つて、

『たゞいま陸海軍の參謀を集めて軍議した結果、たとへロシアの東洋艦隊が支那に加勢しても、こちらは充分勝利であると一決しました。』

と、反對のことを報告したものだ。伊藤總理大臣も『それならば。』と最後の決心をしたのであるといふ。そして一度宣戰の詔勅降下するや、海に、陸に、破竹の勢ひをもつて、連戦連勝となつたが、これは川上、樺山兩大將が、戰機を明察して、善断すれば勝敗を超越するといふ、大度量の賜物といふほかないであらう。

支那の海軍が、定遠、鎮遠等の七千噸の優秀な甲鐵艦を有してゐるのに對して、我が海軍では、僅か四千噸級の巡洋艦をもつて戦ふのだから、勝算のないには不思議はない。しかし我が海軍は、士氣と共に優秀な大砲を唯一の頼みとしたのであつた。現今の言葉でいへば、旺盛なる戰鬥精神でうる。即ち他國に比類なき大和魂、海軍の傳統精神がそれであつたのだ。更に我が主力艦の松島、嚴島、橋立の三艦には、小さい艦體に不相應な、三十三センチの優秀な大砲を備へてゐたことも、勝利の原因だとも傳へられてゐる。この敵にまさつた大砲は、實際大

いに働いたのであつた。

往年の海軍の勇士

日清戦争のときの、我が艦隊司令長官は伊東祐亨大將で、遊撃隊の司令官だつた坪井航三中將など、共に、大の『小松黨』で、女將のコマツさんが『姉御』と呼ばれてゐた時代からよく出入りしたものだつた。この坪井中將の麾下には傑物がたくさんゐた。東郷平八郎大將は大佐で浪速艦長、上村彦之丞大將は少佐で秋津洲艦長心得であり、總理大臣となつた加藤友三郎元帥は當時大尉で旗艦吉野の砲術長、村上格一大將は大尉で同艦の水雷長であつた。それらの後の名將名提督達も、當時は少壯氣鋭の士官で、盛んに『小松』に出入して、大いに英氣を養つたものである。

この日清戦争のとき、小松刀自は四十七歳だつた。自分の家業を通じて、海軍に御奉公を宿

願として來た彼女は、飽くまで獨身主義を通して來たので、もちろん實子がなく、養子や養女を迎へたが、みんな彼女よりはやく夭折してしまつた。しかし彼女は一向平氣なもので、

『わたしは身も心も御國のため、海軍のために捧げたものだ。財産もなにもわたしには必要ない。』

と、同戦役には、莫大な献金を率先して行つたのであつた。當時は、婦人團體の勤勞奉仕もなかつたので、半紙をもんでその間に眞綿を入れ、紙チョッキを作つたり、戦勝の報が來ると町主催の戦勝祝賀會を開いたり、それ相應の活躍をしたものだつた。

『なにしろ、五十年近くもの昔のこと、すべてが悠長で、自由な時代でしたから、悪どい商人なども無かつたが、俗にいふゴロ布が、海軍の信號旗に使はれるので不足して、モスリンを代用にしました。また、軍艦の燃料は一切石炭の時代でしたので、石炭を大切に、石炭袋は麻布で作つた高價なもので、今から考へるともつたいないことをしたものですよ。そして戦勝祝ひといふものが大變なもので、町主催の祝賀會が開かれ、汁粉や、おすしの摸擬店が開かれ、凱旋の海軍勇士を迎へて萬歳、萬歳の騒ぎでした。町内には、勇みの消防組が音頭取りで、支那のチャンチャン坊といつて、人形の敵の首を竹鎗に突き刺したもので、

戦闘状況を描いた萬燈を押し立て、笛や太鼓を寄せ集めた急造音楽隊を先頭に、街頭行進をして練り廻り、まるでお祭り騒ぎが幾日もつゞいたものでした。今と比較すると、すべてが幼稚な時代で、飾り物とか、凱旋門といふものを、各町内で競争で拵へてみました。ある町内では『日本大勝利』と書いた、長さ六間もある厚紙張りの勝男節を拵へて、中に大蠟燭を何十本も點して、山車にして曳き廻つたのが大評判でした。』

黄海大海戦大勝利

『日清戦争のはじまる前までは、日本は支那の屬國とまで誤まられてゐたさうですよ。なにしろ、丁汝昌といふ支那の提督が、そのころ日本には一隻もなかつた七八千トンの甲鐵艦定遠鎮遠そのほかたくさんの大艦隊を率ゐて、横濱に來航したときは、日本の高位高官のお方をまるで子供扱ひにしたので、西郷海軍大臣をはじめ皆さんが憤慨なさつたと聞いて、わた

しも女の身ながら、口惜しくてく〜なりませんでしたよ。それが、開戦最初の豊島沖の海戦で先づ敵艦を撃沈して機先を制し、黄海の大海戦では大勝利で、その丁汝昌の率ゐる敵艦隊をめちやく〜にやつつたのですから、嬉しくてく〜萬歳々と躍り上つたものでした。』
小松刀自の語る黄海大海戦は、明治二十七年八月一日に宣戦の布告煥發せられて翌九月十七日、午前十一時三十分黄海の海洋島沖で、日支兩艦隊が相會し、新興帝國の第一の大海戦が展開されたのであつた。

敵は東洋無比を誇る戰艦定遠、鎮遠のほか巡洋艦十隻と、水雷艇數隻の優勢に對して、わが聯合艦隊は、松島を旗艦として司令長官伊東祐亨中將これに坐乗し、千代田、嚴島、橋立、吉野、浪速、秋津洲、赤城、高千穂、扶桑などの十二隻で、軍艦の數は同じだが、われには戰艦がなく、僅かに四千トン前後の二等巡洋艦が主力であつた。敵の主力は、三十センチ砲八門を備へた七千三百トン堅艦を誇る大裝甲戰艦であり、われには水雷艇隊もなく、その實勢力にはよほどのひらきがあつたのだ。

ところが、海戦は午後零時五十分、まづ定遠の巨砲が火蓋を切り、激戦數時間にわたる、われは敵の五隻を撃沈し、他の大部分に大損害を與へて、これを威海衛に押し込め、黄海の制海

權を完全に掌握するといふ大勝利であつた。この黄海大海戦には、數々の武勳談があるが、東郷元師は當時大佐で、司令官として旗艦浪速に坐乗してゐたのであるが、重病を秘して活躍し、甲板上に椅子を運ばせ、剛毅な大佐は少しも怯まず職務をつづけ勳功を立てたのには、幕僚たちも舌を捲いて驚嘆したといふことである。

豪膽海の肉弾戦

また、日清戦争の勃發するや、陸軍は華々しい戦功をあげたが、初めのうちは海軍の方は、氣勢をあげる機会がないのであつた。そこで某陸軍大將は、たはむれに樺山大將に向つて、

『海軍は、いつたい今どうしてをられますか。』

と言つたものである。剛毅大膽をもつて鳴る樺山大將は大いに憤慨し、何人にも告げず黙々と、ひとり廣島から海軍の根據地へと向つた。そして黄海の大海戦には、代用艦の西京丸に坐

乗し、艦隊を指揮して、遂に敵艦を粉碎して大勝利を博したのであつた。當時、伊東司令長官をはじめ首脳部では、第一敵艦を受けて、總大將を失ふやうなことがあると、わが全艦隊の士氣が沮喪するおそれがあるので、非常に心配したのであつたが、天佑にも一弾も受けず、大勝利となつた。西京丸は小型の汽船であつたが、滿身膽の如き樺山大將が坐乗して、大膽にも敵艦の間を往來して奮戦し偉功をたて、軍歌にもうたはれてその善戦勇闘振りを賞讃されたものである。また、山屋他人大將は、當時航海長として西京丸に乗組み活躍したが、敵の水雷艇「伏龍」の魚雷を喰つた。ところが敵との距離があまりに接近してゐたため、魚雷は西京丸の船底を潜り抜けてしまつて、危く沈没を免れたといふ逸話もある。いかに激戦だつたか想像されるのである。

黄海の大海戦には、劣勢なわが小艦が、一度砲火相見るや、優勢な敵支那艦隊を一舉にこれを撃破して『海軍日本』の名を世界列國に叩きつけた。各艦ともいづれも大苦戦の結果殊勳を輝かしたが、中にも木造軍艦比叡の如きも、目ざましい活躍をしたのであつた。——その往年の比叡乗組の壯年士官たちで『突貫會』が結成され、毎年九月十七日の同記念日には水交社に大海戦を偲ぶ突貫會を開催されてゐる。この突貫會には當時分隊長だつた小栗孝三郎大將をは

じめ、航海長だつた伊東乙次郎中將、少尉候補生だつた竹内重利中將、分隊長だつた長鋪次郎安部巽兩大佐などが會員となつてゐる。

この突貫會の集ひには

『生き残りはだんぐ／＼少くなるね。』

と漏らす老提督もあるやうに、しみりとしたうちにも和氣霽々とした空氣で、往時の手柄話と共に、お互ひの健康を祝し合つてゐる。元海軍省副官や駐米武官をつとめ昨夏八月野村大使と共に淺間丸で歸朝した横山一郎大佐は、往年少尉候補生として奮戦、壯烈な戦死を遂げた横山傳氏の忘れ形見である。

上村少佐の豪勇

日露戦争のとき我が聯合艦隊司令長官は東郷大將で、第一艦隊司令長官を兼ねてをり、第二

艦隊司令長官は上村大將であることは周知の通りであるが、東郷、上村兩大將は同じ鹿兒島出身で少壯士官時代から肝膽相照らし、無言の裡につねに車の双輪のやうになつて、我が海軍の戦史に赫々たる偉勳を輝かして來たのであつた。

もちろん東郷大將の方が先輩であつて、日清戦争のときは東郷大將は大佐、上村大將は少佐で、浪速と秋津洲の艦長をしてゐたことは前にも述べたが、その日清戦争中のこんな一挿話が傳へられてゐる。

明治二十七年十二月下旬のこと、軍艦浪速は、僚艦秋津洲を率ゐて威海衛の港口附近を偵察し、敵艦の動靜を監視の任に當つてゐた。すると敵艦隊の旗艦定遠は、鎮遠、清遠、平遠、濟遠などの八隻の艦艇を率ゐて威風堂々と灣外へ出動し、艦體も裝備も優秀なるそれらの艦隊は、恰も我が浪速、秋津洲兩艦を嘲ける如く、物の數ともせず針路を山東高角方面へと向つて進航して行つた。その剛慢無禮、我がもの顔の振舞には、我が勇士の熱血が逆流した。そして戦闘開始命令の下るのを今や遅しと、腕を撫して待ち構へてゐた。

ところが旗艦浪速からは、なんの信號も發せられない。却つて僚艦秋津洲から一條の信號が發せられた。

『敵艦をやつつけては如何？』

剛毅な上村艦長が、たまりかねて東郷旗艦長に向つて發したものである。このとき沈著な東郷浪速艦長は、直ちに信號兵に命じて返信を發せしめた。

『我艦は一刻も速かに敵艦隊の動靜を本艦隊に急知するの任務にあり。』

斯う答へたのみで平然たるものだった。そして敵艦隊の進路を、愈々の確と認めるや直ち全速力を出して航進を続け、本艦隊に詳細を報告したのであつた。

眼前に敵艦隊を目撃するや、これと一大決戦を試みることは、海軍勇士一代の痛快事には相違あるまい。しかし重大なる任務の前には大なる忍耐をもつて、すべてを捨てねばならないのだ。輕率な振舞は、斷じて避けねばならないのだ。

それにしても、目にあまる敵の優勢なる艦隊に少しも動ぜず『やつつけては如何？』と信號を發した上村艦長の剛毅振りは、賞揚に餘りあると共に、沈著冷水のやうな東郷艦長の態度も見上げたものであつて、兩大將の面目を發揮ものとして興味深いものがある。

一發必中の魚雷

匕首をかざして敵のふところに躍り込み、一舉に強敵と刺し交へて討死しようといふのが、魚雷の本領である。魚雷は、砲彈のやうに短時間に出来るだけ多數發射して、時間效力を發揮し、命中効果を擧げやうといふものとは違ふのだ。寧ろ千載一遇ともいふべき絶好のチャンスに、一艦についていへば、僅かに數本しか發射し得るに過ぎないのであるから『一發必中』を期して、魚雷戰闘を敢行されるものである。目標は、もちろん敵の主力艦隊であるのだ――

この魚雷を自分の魂として、華々しい戦場に馳驅する勇士は、驅逐艦、潜水艦、水雷艇などであるが、近代戦は更に飛行機がこの仲間入をして、大東亞戦争の緒戦のハワイ眞珠灣における、米國太平洋艦隊奇襲戦をはじめ、各海戦に赫々たる武勳を輝かしてゐる。

砲彈では、一發でもつて、なか／＼敵の軍艦を沈没させることは出来ないので、水中から敵

艦を攻撃して、その胴ッ腹または艦底あたりに、ドカンと一大爆發を起させて大孔をあけ、一舉に敵艦を海底に葬つてしまはういふのが、魚雷の發明された起源である。昔のわが水軍にも、斯うした水中攻撃といふことを考へてゐたが、實戦に使用されたのは約八十年昔の米國南北戦争のとき、南軍の潜水艦ハイレノ號が水中攻撃を執行して、北軍の敵艦ハウサトニツク號の火薬庫を爆發させて撃沈したのが最初だといはれてゐる。

わが海軍で魚形水雷をはじめて造つたのは、明治二十三年七月東京芝赤羽の海軍造兵廠で、十四吋魚雷二本試製したのが嚆矢であつた。

水雷艇隊の先覺者鈴木大將

軍艦建造の進歩と正比例して、魚雷の研究が各國海軍において行はれて來た。しかし、魚雷の實戦上の效力如何は世界各國とも、疑問としてゐたもので、實際はXであつた。その魚雷の

實際效力の方程式を、見事に解いて、Xを算出したのは、日清戦争の威海衛の夜襲戦であつた。そしてその方程式を解き明かして、わが海軍水雷艇隊の強引な、見事な奇手を世界に誇示した花形こそ、前侍從長現樞密院副議長男爵鈴木貫太郎海軍大將の若い時代であつた。

明治二十七年七月の豊島沖海戦、成歡、牙山の陸戦をはじめとして、わが日本軍は海に陸に連勝をつゞけていつたが、金州城、大連から旅順口を陥落し、蓋平まで占領し、續いて敵の首都北京を衝くに當つて、一大障害は、勃海灣口を扼する威海衛の要害であつた。——翌三十八年一月、陸軍は漸次に威海衛の包圍攻撃を開始し、伊東司令長官の聯合艦隊は、威海衛の港内深く頑強に潜入してゐる敵北洋艦隊を撃碎すべく、戦機は刻々に熟して行くのだつた。ところが時恰も北支那海の暴れる荒天続きで、聯合艦隊は鷄鳴島や榮城灣に假泊して、天候の定まるのを待つてゐた。この主力戦隊すら港外から退いてゐる荒天下において、威海衛襲撃執行を上申した少壯士官があつた。第三水雷艇隊第六號艇長鈴木貫太郎大尉だつたのである。

水雷艇隊は、各六隻づゝをもつて第一、第二、第三の水雷艇隊を編成されてゐた。鈴木第六號艇長は、水雷艇隊を威海衛港内に侵入せしめ、魚雷をもつて敵艦隊を襲撃し、その機に乗じて港外より主力艦隊の總攻撃を執行し、一舉に敵北洋艦隊を撃碎しようといふ企圖であつた。

そして先づその前程として、威海衛港口侵入水路の探查、敵艦隊の碇泊状況調査方などに就て今井司令に所信を披瀝した。この謀計は今井司令を通じて伊東司令長官に上申された。深謀遠慮の名提督、伊東司令長官は、我が意を得たりとばかり、その豪壯な顔をほころばせて、たゞ一言、

『よし、やれ!』

大鵬に挑む隼の激闘

鈴木大尉の上申は、全艦隊の行動方針を決定するものであつた。鈴木大尉は、自己の責任の重大なることに愕いた。そして、自ら死處を得たことを喜んだ。

二月二日の夜半、怒濤逆巻き飛沫も凍る荒天の北支那海の闇を冒して、第六號水雷艇は威海衛港口に迫つた。そして苦心惨膽の結果、蜿蜒八キロに亘る堅固な防材布設の實狀を確認した

が、入口を發見することが出来なかつた。更に敵の探照燈と砲火を浴びながら、挺身上陸して陸上實地の踏査をなし、敵艦の所在を探索した上に、防材の一部を破壊して、水雷艇隊の侵入水路を啓開して引き揚げたのであつた。

翌二月三日、荒天の夜陰に乗じて、水雷艇隊の威海衛襲撃を決行された。一死生還を期さぬ鈴木大尉をはじめ僚艇の勇士は、聯合艦隊旗艦松島（艦長海軍大佐威仁親王）において、伊東司令長官より訣別の訓示を受け、勇躍壯途に上つた。

鈴木艇長の第六號艇を嚮道に、第二、第三水雷艇隊は威海衛港口に肉迫し、前夜破壊啓開した防材の侵入水路から、港内に侵入した。忽ち敵の哨戒艇の發見するところとなつたが、敵艦や砲臺より射出す砲弾と探照燈の光芒を冒して、敵艦に近づき、各艇は『一發必中』の魚雷を發射しようとしたが、發射管口の凍結によつて、發射不能のものが續出し、眼前に大敵を見ながら、切齒拒腕の止むなきの状態であつた。

しかし幸ひにも、裝備の完全な僚艇の魚雷によつて、猛烈な夜襲が續けられた。一艇に代つてまた一艇、探照燈の鋭い光芒によつて却つて敵艦の所在が分明し敵艦に肉迫しての猛襲だ。寒風怒濤の眞つたゞ中に、恰も大鵬に隼が挑みかゝるやうな凄烈な激闘であつた。さうした猛

烈な夜襲戦の展開してゐるうちに、或る艇は敵艦隊の旗艦定遠の姿を発見した。「天祐」とばかり、生命を、魂を吹き込んだ魚雷は、發射管を放たれた。怒濤を潜つて駛走する魚雷は狙ひ誤らず定遠に命中……忽ち奔騰する水煙は白銀の柱の如く輝き、敵の砲火の閃光と相映じ眼もくらまんばかりである。

——各艇の魚雷は放たれた。各水雷艇隊は傷ける僚艇を探し求め、全艇をまとめて、再び荒天を冒して基地へ引揚げた。

敵旗艦定遠に命中

ところで、翌四日の朝になつて、敵旗艦定遠を撃沈したと思つたのが、平然と港内に碇泊してゐることが判つた。水雷艇隊の勇士たちは、この報を耳にすると深く心に決するところがあつた。各艇内に悲壯な空氣が暗愴と渦巻いてゐた。——第三回の夜襲を上申された。

二月四日、母艦近江丸に集合した九隻の水雷艇隊の勇士は、最後の酒を酌み交はし、決死の形相もの凄く、たゞ眼を光らして黙々と夜の更けるのを待ち構へてゐるのであつた。

月は姿を隠し、肌を刺す烈風が吹き荒れる闇の底に、狂つたやうな怒濤が執念深く逆巻いてゐる。その荒天の中を小さい點々が、波濤に揉まれながら進航してゐる。一つ、二つ、三つ……九つ。——艇首から覆ひかぶさつてくる怒濤を突き破りながら、威海衛港口に迫つた水雷

艇隊は、一艇、また一艇、防材をも突破して港内に侵入した。寂として星影もない闇の空は、忽ち敵の發砲の閃光と探照燈の光芒が相交錯して眼もくらむばかり。砲彈の轟響は耳を聳するばかりだ。暗闇の底に嚴然と魔物のやうに浮んでゐる敵の巨艦に、一發、また一發、わが水雷艇から發射された魚雷は、矢のやうに突進しては命中爆發する。大瀑布を逆かさにしたやうに奔騰する水煙……濛々たる砲煙、天地も崩れるばかりの凄絶な阿修羅場が展開された。

先づ來遠が撃沈された。つゞいて定遠に命中……それを切っかけに、何艦を沈め、何艦に命中したか判らぬほどの猛襲振りだ。わが勇猛無比な水雷艇隊決死の肉迫襲撃だ——。

初めて知る日本魚雷の威力

敵の關門は遂に破れた。最後まで頑強を極めた北洋艦隊司令長官丁汝昌は降伏し、みづからその幕僚と共に自殺してしまつた。

北洋艦隊全滅と、わが陸軍の進出によつて、威海衛は完全に占領され、日清戦争を終幕の土壇場に追ひ込んだ。

威海衛占領後、支那側にあつて觀戰してゐた英國武官が、わが伊東聯合艦隊司令長官に會見を申し込んで來た。そして、

「いまゝで疑問だつた魚雷の威力を、日本海軍の勇敢な奮戦によつてはじめて判つた。」と感謝したとのことである。事實、わが海軍においても、前の豊島沖の海戦に魚雷を使用したが、實際の効力は不明だつたのである。東郷浪速艦長が、あの高陞號を撃沈した有名な豊島

海々戦の緒戦は、魚雷を發射したが效を奏しなかつたので、大砲で砲撃々沈せしめたのであつた。また同海戦で、支那側から西京丸に魚雷を射つたが、これも命中しなかつたのだ。(黄海大海戦の項参照)

いづれにしても、單に魚雷の偉力といふけれど、それは、わが傳統の海軍魂の持主が使用してこそ、はじめて本當の偉力を發揮し得るのだ。

全將士一心一體

わが水雷戦隊たる驅逐艦や水雷艇の突撃、猛襲は、世界海軍に卓絶したものである。水雷艇の夜襲、驅逐艦の猛襲、潜水艦の突撃——これは日本人の性格に適した魚雷攻撃であつて、わが海軍の強味であると共に、實にお互に國民の誇りといふべきであらう。

☆

鈴木貫太郎大尉と共に、威海衛夜襲を決行した第一水雷艇隊小鷹號の艇長長井群吉大尉（後の少將）が、後年、筆者に語つた言葉が痛快勇壯だ。

『——水雷艇が三分の一ほど敵弾にやられて千切れてしまつたんだよ。自分の乗つてゐる艇が裂けちやつて、海の中に沈んでしまつたのも知らずに、敵艦めがけて突撃してゐたんだ。なにしろ前の方ばかり見詰めてゐるもんだから、艇の後ろの方がやられたのも気がつかずにゐたのだよ。』

そして小艇の乗組員は、艇長以下全將士とも一心一體となつて、挺身敵に當るから強味を發揮されるのだといふのであつた。

☆

なほ鈴木貫太郎大尉は、日露戦争には、中佐に昇進し第四驅逐隊司令として朝霧（艇長飯田延太郎大尉、後の中將）に乘組み、日本海大海戦には主力戦隊の決戦の後、殘敵を追ふて得意の夜襲戦で敵艦隊殲滅に奮戦して、偉功を建てたのであつた。

新造戦艦富士の回航

『富士』『八島』のわが海軍最初の兩戦艦は、長くも 明治天皇の御思召によつて、明治二十六年から六年間、毎年三十萬圓づゝ内廷の御費用を省いてこれを御下賜あらせられ、また文武百官も同期間中その俸給十分の一を割いて、製艦費の補足をなさしめ給ふた慘憺辛苦の所産であつた。

この二艦のうち富士は、英國で明治三十年七月完成したのであつた。當時、齋藤實少佐は同艦の回航委員を命ぜられたのである。富士艦は、英國のビクトリア女皇陛下即位六十年祝典の大觀艦式には世界十四ヶ國軍艦中の、わが日本帝國代表艦として、常備艦隊司令長官威仁親王御座乗の下に参列したのであつたが、式場の百六十五隻、五十六萬トン各國軍艦中最新最鋭の戦艦として、ポーツマス軍港に輝く軍艦旗を翻し列強海軍にその英姿を誇つたのであつた。

一萬噸艦スエズ運河初航

富士は、同年八月十八日ポートランド港を出航して、約二ヶ月半を費し十月三十一日、横須賀軍港に無事回航したのである。その間、スエズ運河通過については、一萬二千六百トンの戦艦として、世界各国注視のうちに見事に通過を敢行し、日本海軍の運用術の優秀さを誇示したのであつた。

畏くも 明治天皇には、富士の回航を聴こしめされ、艦長三浦大佐、副長齋藤少佐を宮中に御召しに相成り、その労苦を御嘉賞あそばされたといふ。

姉妹艦の八島は、一年遅れて三十一年竣工して回航したが、この富士が無事横須賀に回航したときは、東亞の風雲たゞならぬ際にわが海軍に戦闘艦が加はつたといふので、日本全国のみんなが心強くしたのであつた。

この晴れの回航委員の齋藤少佐の母堂菊治刀自は、春子夫人を伴ふて横須賀に出迎へに來港し、當時、鎮守府前にあつた三富屋旅館に宿泊したといふ話が残つてゐる。この齋藤少佐は、歸朝の翌々月の十二月一日に中佐に昇進し、更に歳末も迫つた同月二十七日一躍海軍大佐に榮進し秋津洲艦長に補せられたといふ異數の拔擢物語りもある。——後年軍政家、政治家として重責を擔ふた齋藤大將は、壯年士官時代から海軍々人として既に衆に優れた人士であつたのだ。

なほ、この富士艦の回航員中には、加藤寛治大將は中尉、齋藤七五郎中將は少尉、宮川邦基中將は少機關士として、いづれも當時優秀な少壯海軍士官として、選抜派遣されたのであつた。

沸き立つ軍艦行進曲

屈辱の三國干涉

『まもるも攻むるもくろがねの、浮べるふねぞ頼みなる……』

この勇壯な軍艦行進曲が、瀬戸口海軍々樂特務少尉の作曲で出来あがり、軍港横須賀を中心に盛んに歌ははれはじめたのは明治三十三年であつた。わが日本帝國は日清戦争に大勝したが、つゞいて北支事變が起り、更に三國干涉といふわが日本の躍進を妨害する屈辱的事件などがあつて、東亞の風雲のたゞならぬときであつた。それはさながら日露戦争といふ日本はじまつて以來の大戦争の前奏曲のやうに、海軍々人はもとより、可憐な小學生たちの口から、忽ち全國

民に擴がつて行くのであつた。そしてその勇壯で力強い軍艦行進曲のリズムに、みんな胸を躍らして言ひ知れぬ感奮に打たれるのであつた。

海兵團の海軍々樂隊は、この軍艦行進曲を奏樂しながら、時々軍港街頭を行進して練習をつゞけてゐた。海軍々樂隊の行進が來ると、町内の誰れも彼れも戶外へ飛び出して、胸を躍らして耳を傾けてゐたのであつた。

軍樂隊と山田耕筰少年

その頃、これはまた、軍樂隊の街頭行進に人並すぐれて力瘤を入れてゐる、七八歳位の少年があつた。この少年は、軍樂隊が來ると、誰れよりも先きに聴きつけて家を飛び出して、行進の列のうしろについて行つて、熱心に軍樂兵の奏樂振りに陶醉してゐるといふ有様であつた。そして遂には軍樂隊のあとについて行つて、海兵團の門前まで出かけ、軍樂隊の一行が入門し

て奏樂の終るのを悄然と見送つてゐるのであつた。

この少年の人並はづれた熱心振りは、いつとなしに軍樂隊の兵隊さんの知るところとなり、みんなに可愛がれて、時には海兵團の團内に入れられて、樂器を見せて貰つたりいろ／＼話して貰つたりしてゐた。——この軍樂隊に異狀な熱心だつた少年こそ、わが音樂界作曲家の權威山田耕筰氏の少年時代の姿である。

先年『横須賀市歌』が作られたとき、山田耕筰氏は軍港に迎へられて、その作曲を委囑された。そのとき山田氏は、時の市長鈴木齋治郎氏をはじめ昔の幼な友達と共に、小松刀自の『小松』において久し振りに邂逅し、なつかしい軍港に往時を偲んだのであつた。

『あの頃は、私も無邪氣な一少年でした。海軍々樂隊の街頭行進がなによりも嬉しく楽しみでしてね、あれを聴きつけると、なにもかも放り出して夢中になつて飛んで行つたものです。私の今日あるのも、海軍々樂隊と深い因縁があるのです。』

と、感慨深く語るのであつた。山田耕筰氏が生れたばかりのとき、氏の父は小學校の教科書編纂のため、横須賀市に迎へられ一家は轉移して來たもので、五、六歳の頃から海軍々樂隊の行進があると一緒に海兵團まで入り込み、水兵さんの肩車につて家まで送つて貰ふやうな熱

心振りだつたといふ。それに同家はキリスト教だつたので、子供の頃から英語の歌をうたひ、西洋音樂に親しむ機會に恵まれたが、作曲家として今日あるのは海軍々樂隊が大恩人であり、横須賀軍港こそ自分を生んで呉れた故郷だと懐しんでゐる。そして父を喪つた九歳のとき、お前は何になる？ と學校の先生に訊かれて、

『僕はベートーヴェンや、モーツアルトのやうな偉い作曲家になるんだ。』
といつて、田舎の先生を驚かしたといふ話が残つてゐる。

お龍さん(坂本龍馬の妻)の

晩年の流轉生活

『坂本龍馬さんの奥さんお龍さんは、わたしより十歳ぐらゐ年上のお方でした。明治の中年

頃に落ぶれて横須賀に流れて来て、貧しい暮しをしてをられました。日露戦争の終つた翌年六十八歳でさびしく死なれました。數年前土佐の同郷の方々が三十三回忌の法要を営まれましたが……」

小松刀自の語る坂本龍子さんといふのは、わが無敵海軍の生みの親ともいふべき、土佐の俊傑坂本龍馬の妻女お龍さんのことである。

徳川幕府の鎖國二百六十餘年の終りを告げる日が來り、安政開國は國內の紛々たる論議とは關係なく、大いなる時勢の力によつて決行されたのであつた。嘉永六年浦賀の黒船來航の砲聲に驚かされて、わが國民が鎖國の眠りから醒めた眼を大きく開いて見ると、西方東漸の大波がグングン自分達の脚下に押し寄せて來てゐるのであつた。

わが日本の將來の大局を見透して、幕末の英傑軍艦奉行勝海舟は、海防の急務を唱へ、東奔西走、海軍の創建に心膽を砕いた。彼が萬延元年軍艦咸臨丸を率ゐて、はじめて太平洋を横斷し、北米大陸の彼岸に日章旗を翻へしたのは、鎖國日本から海國日本への一大飛躍を示したのであつた。そして幕末海軍は漸く建設の緒に就き、やがて王政復古と共に天皇の海軍として新生する素地を作つたのである。

勝海舟が學術を西洋に求めて、海軍の建設に心膽を砕いてゐるとき、彼を幕府の策謀の士と目ざして、刺客となつて江戸山王臺の寓居を襲つたのは坂本龍馬であつた。しかし却つて勝海舟のため、眼を大局に注ぎ、舉國一致海軍充實の急務を説かれて、その門下生たる盟約を結び、龍馬は勝舟の股肱の門弟となり、わが海軍の始祖たる海援隊を組織し、みづからその隊長となつて活躍したのである。

彼の妻坂本お龍こと檜崎お龍は、京都の宮家御典醫檜崎庄作の娘に生れ、長じて伏見寺田屋の養女となつて同家にあるうち、海援隊の編成に活躍してゐた坂本龍馬と知り合ひ、相思の仲となり、後藤象次郎（後の遞信、農商務大臣、伯爵）の媒酌で結婚したものである。お龍さんは龍馬の妻となつてから、女ながらも幕末の京洛の間諜として活躍し、東奔西走國事に挺身努力してゐたが、夫龍馬が同志中岡慎太郎と共に、慶應元年八月京都所司代見廻り組の兇刃に倒れてから、流轉の生活がはじまり各地を轉々としてゐたが、王政復古の大業成つてより實妹の中澤光枝をたよつて横須賀軍港に來り、深田町觀念寺の陋屋にいたましい半生を送つてゐたのであつた。小松刀自の語るところによると、

「落ちぶれても、さすがに品格のいゝ、きりつとした容貌のひとでしたよ。現今でこそ坂本

龍馬といへば、海軍の生みの親であり、幕末の俊傑として有名ですけれど、その頃はあまり顧みる人もありませんで、お氣の毒でしたよ。きりようのよい人であり、教育もある人でしたので、あちらこちらから再婚をしきりにすゝめられて、海軍工廠御用商人の西村文平といふ人と同棲數年に及びましたが、龍馬さんの面影を慕つて節操を持したゝめ、とう／＼不縁となり、またもとの獨り身になつて、女髮結の手傳ひなどして、お酒にひたつて傷ついた心を慰めてをられました。お國のために盡した人でもあり、その半生はお氣の毒でなりませんでした。』

幕末の俊傑の妻として、あまりにも世に知られない同女の半生であつたのだ。その坂本龍馬の妻お龍さんは、明治三十九年一月十五日この世を去り、その靈魂は軍港市外浦賀町淨土宗信樂寺の境内に永遠の眠りについてゐるのである。この龍子の世を去つた當時は、その身を寄せてゐた妹光枝の一家も、あまりに窮迫してゐたゝめ、墓碑を建立の費用もなかつたが、これを傳へ聞いた龍馬の親友香川敬三伯（照憲皇太后、皇后陛下におはしませしときの皇后宮太夫）の好意によつて、光枝の名で信樂寺の山門の傍らに立派な墓碑を建立されたのであつた。

しかし維新の英傑海軍の先覺坂本龍馬の妻の墓が、龍馬には由緒深い軍港横須賀と黒船の浦

賀の境の、大津の一隅に淋しく立つてゐることを知る人は少なかつた。先年遙る／＼半島からお龍さんの里方の、朝鮮兼二浦日鐵本社員檜崎又三郎氏が參詣した。それが機縁となつて在京土佐會の有志が蹶起して、郷土の生んだ英傑坂本龍馬の妻の御魂を慰むるため、去る昭和十三年の命日に、ゆかりの軍港で龍馬の曾孫、甥など肉身の人達も參列して、三十三年忌の盛大なる慰靈祭を執行された。

日露戦争と新聞通信

無電のない時代の苦心

日露戦争のときは、無電は海軍の一部で使用してゐたのみで、一般に用ひられてゐなかつた

から、戦況ニユースを通信したり報道するのには、なか／＼の苦心があつた。それに海軍では各新聞社の従軍記者の軍艦乗組を許可しなかつたので、報道が遅れ勝ちだつた。詳細な戦況などは一週間も十日も経過してから、やつと新聞に掲載されたこともあつた。それでも読者は格別不満にも感じてゐなかつたんだから、實に隔世の感が深い。

それに海軍ばかりでなく陸軍もさうなのだが、原稿の検閲がやかましかつた。これは軍機や銃後の人たちの士氣にも關することだから、當然のことである。それで特派員などが頭を痛め苦勞して通信したものが、軍部で發表するものよりもつまらないものなので、新聞も號外も公表のものが多く掲載された。殊に陸軍と違つて海軍には本當の従軍記者はゐないのであるから各社とも一方ならぬ苦心をしたのであつた。某新聞社では、對馬の竹敷要港司令部に特派員を置いて、旅順の特報を得ると下關の通信部へ送り、更に其處から大阪、東京といふやうに電報や電話で、通信のリレーをやつてゐたさうである。

御前會議、緒戦の快勝

『機先を制す』——これは戦勝の秘訣であるが、特にわが海軍では、この先手を打つことを戦法の第一信条としてゐる。彼の日清戦争のときは、先づ豊島沖の海戦で、わが艦隊よりも優勢な敵の大艦隊の出鼻を、ゴツンと一つやつつけて快勝し、海陸軍ともの大勝利の素因をつくつたものであつた。日露戦争もさうであつた。その緒戦の快勝に就て、當時の新聞記事によつて觀察して見よう。

——明治三十七年の一月中に數次の御前會議を開かれたが、畏くも 明治天皇の御前に御召しにあづかつたのは伊藤、山縣、大山、松方、井上の五元老と桂首相、小村外相、山本海相、曾根藏相、寺内陸相などで、二月四日の御前會議こそは、日露開戦決定最後の御前會議であつた。當時の報知新聞の記事に次ぎの一文が掲載されてある。

『——露の準備に久しく釣られてゐたる我邦も今や正に奮起して世界のために義戦を爲すの止むべからざる場合となれり。』

そしてロシアの栗野公使に對して『協商斷絶すべし』旨の訓電を發せられ、五日に日露の國交斷絶となつた。躍氣となつた露國は、シベリア鐵道で滿洲から朝鮮にかけて、陸軍兵や軍需品を盛んに輸送し、わが日本は、瓜生外吉少將（後の大將）司令官の分遣艦隊護送のもとに、陸軍部隊を仁川港に揚陸してゐたのであつた。

ところが仁川港に露國のワリヤーク、コレーツの二艦が圖々しく入港して來たので、折柄入港中の瓜生艦隊の千代田艦と一觸即發の危期状態となつた。しかし同港には米、英、佛、伊の四ヶ國の軍艦が碇泊してゐたので、中立國の軍艦に累を及ぼしてはならないと、千代田は巧みに港外に出て瓜生艦隊と合した。そして旗艦浪速以下巡艦八隻と水雷艇八隻の同艦隊は仁川港に迫り『瓜生大將』の項に述べてあるやうに、敵露國の二艦と砲火を交へ、緒戦において見事にこれを屠つてしまつたのであつた。

海戦を陸上から見て打電

この日露戦争の緒戦の第一報は、十日附の報知新聞に『戦端開かる、我軍の第一勝』といふ見出しで、左の如く報道されてゐる。

昨九日午後五時半左の電報達す

『本日正午頃仁川港外に於て我が軍艦と露艦との間に砲火を交へたる旨仁川の陸上の者より報告ありたり』

海戦があつたのを、陸上から見て打電したものである。當時としてはこれでもグレートニュースとして、全國民の血を沸騰させた實に日露開戦の第一報であつたのだ。

引きつゞき第二報として『仁川海戦の實況』『我艦の全勝』といふ見出しで報道されたのは、第一報を報道してから十日も経つた二月二十日であつた。これは頗る長文のものであるが、敵

艦コレイツが小艇にも一發打ち出したので『よし来た！』とばかりに猛砲火を浴びせかけ、敵の新鋭巡艦ワリヤグ諸共に叩きのめしてしまつたのである。わが勇猛艦隊にノックアウトされて、血まれになつて氣息奄々と港内に逃走した敵の兩艦を、浪速、淺間以下の各艦はこれを港外で悠々落ちつき拂つて警守してゐた。

〔前略〕彼れ既に戦闘力を失ひ港内に遁竄したれば我れは亦深く追撃するの要なく、港口に嚴然として整列し猶ほ警戒を怠らず眼を八方に配りて之に相對せり。在港中の米艦ウイツクバート、英艦クルボット、佛艦バスカル、伊艦エルバは愈々開戦と見るや、擧げて月見島砲臺前に出で之を望見せり。噫嘻千歳の一遇今此の海戦を陸上より實見せる居留邦人の雀躍欣喜は言語の及ぶ所に非ず。情極まりて涙に咽ぶ者さへあり。市街は忽ち日章旗を以て埋められ萬歳の聲は山谷に震へり。今日の海戦に當れる淺間は速射砲を合せて實に九十四彈を費せり。而して千代田は七十一、浪速は十八、新高は十四なり。高千穂、明石は一丸をも費さざりき、中にも浪速は瓜生少將の旗艦なりしかば、敵艦亦た多く之に向つて砲撃せるも一發の命中なく僅かに十八彈を要し他の諸艦亦一個の敵彈を受くる者なかりしは、誠に天佑と言ふの外なきなり。之に反して敵は死者三十、傷兵四十と注せらる。日露戦争第一著は機先を制

し此の大勝を得たるは豈快ならずや。大日本帝國海軍大勝利。萬歳——
なんと勇ましくも愉快な記事ではないか。——敵艦はその夜自爆を企てたが、わが海軍の手に拿捕されてしまつた。

頼被りのロイテル通信

この仁川港の海戦の火蓋を切られてゐる一方には、上村艦隊が出動して浦蘆斯德港攻撃を敢行されてゐた。また東郷聯合艦隊の主力は、旅順港攻撃に向つてゐたのであつた。

浦蘆斯德は、仁川や旅順と違つて、通信が更に一層困難であつた。海軍當局の公表などもだいぶ遅れてゐたやうであつた。しかしその頃、ほとんど世界中に通信網を張つてゐた『ロイテル通信』といふものがあつて、日露戦争中には盛んに活躍してゐた。それで、わが海軍の公表や、新聞社の通信などよりも、逸早く各方面の戦況や情報を傳へてゐたので、當時の各新聞に

は『ロイテル通信』なるものが毎日掲載されてゐた。ところが、このロイテル通信は多分の敵性側の通信社であつて、わが方に不利なインチキ通信を、平氣で世界各方面に發してゐる困りものだつた。次ぎに掲げる當時の浦鹽攻撃の、三つの通信の報道記事を對照して見ると面白い。いづれも十日の萬朝報紙上に掲載されたものであつて、(一)は即ち『ロイテル通信』なのである。

(一)

『セントピーターズブルクよりの電報に據ればウラジホストックに對する砲撃は六日午後一時二十五分に開始せられ日本戦闘五隻及び巡洋艦二隻は五哩の距離に於て總ての砲が發射せしが少しの損害をも加へず二百發のリツダイト彈丸の大部は爆發せざりき。露國の陸上砲臺は敵の接近し來るを待ち應戰せず敵は遂に退却せり。』と。

(二)

我艦隊の一大活動と共に快報は早くも浦港方面より來れり。即ち下の如し。
『再び浦港を出で、又同港に引返したる露艦四隻を誘ひ出し豫て同地を攻撃するの目的を以て我有力の一艦隊は六日浦港を砲撃したりとの情報ありたり。』

別項ロイテルの報せるリツダイト彈丸の大部分は爆發せざる如くなるも我海軍はリツダイト彈丸は使用し居らず最新式(我國發明)彈丸を用ひ居れば其爆發して大損害を浦港の砲臺に與へしは明確なり。』

(三)

浦鹽に在る露清銀行支店より芝罘及び上海同支店を経て左の意味の電報達したり。

『日本艦隊の激烈なる砲撃の爲に浦鹽市街は數個所に火災を起しつゝあり(中略)兵士の死傷亦頗る夥し。日本火藥爆發の力は頗る大なり。』

右のうち(三)は、通信員でない露清銀行浦鹽支店員が、實見した狀況を打電したもので、(一)のロイテル通信の頼冠り式通信と違ひ、素人ながら正直にありのまゝに真相を傳へてゐる。自分たちの居る市街が戦争となつて、攻撃されてゐる混亂裡にウソなんぞ言つてゐられる譯はない。萬朝報社に達した有力な情報(二)の眞實を立派に裏書きしてゐるではないか——

旅順攻撃の戦況公表

十二日の東京朝日新聞には、次ぎの如く海軍當局發表の公表記事を掲載されてある。

東郷聯合艦隊司令長官報告 二月十一日午前二時發電

聯合艦隊は去六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し八日正午我驅逐隊は旅順に在る敵を攻撃せり。當時敵艦隊の大部隊は旅順港外に在りて我驅逐隊の水雷に罹りしもの少くともポルタワ形一隻巡洋艦アスコルド外二隻ありしものと認む。我艦隊は九日午前十時旅順口沖に達し正午より約四十分港外に残留せる敵の艦隊を攻撃せり。此攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少なからざる損害を與へ大に彼が士氣を沮碍せしめたりと信ず。敵は漸次港内に逃走するものゝ如し。午後一時戦闘を止め引上げたり。此攻撃に於ける我艦隊の損害は輕少にして寸毫も戦闘力を減ぜず死傷は凡五十八名にして内戦死四名負傷五十四名なり。仁

川方面に向ひたる分遣艦隊の戦況は既に瓜生司令官より直接電報せるが如し。我驅逐隊は敵の砲火を冒して攻撃を果たし其大部分は既に本隊に合せり。艦隊に御乗艦の各宮殿下は皆御無事なり。我將卒一般の戦闘に従事せる状況は頗る沈着にして宛も平常の演習に異ならず戦闘後に於ける士氣は益々旺盛にして而かも舉動は愈々沈着なり。今朝來風波ありて艦船間の交通不通なる爲未だ各艦よりの詳報に接せず。取敢ず右概況のみ報告す。二月十日
これがおそらく、日露戦争の戦況に關する公表の最初のものと思はれる。もちろん號外も發行されたことであらう。

日本中は、こゝに戦争氣分が横溢し、相次ぐ海軍の捷報に『ロシア恐るゝに足らず』と意氣軒昂、いよいよ愛國の精神を奮ひ立てゝあるのであつた。

人氣沸騰の號外

『チリン、チリン……』と遠くかすかに街頭のどこかに鈴の音がする……その小さい鈴の音

が鼓膜に響くと同時に全身がハツと緊張して「それッ號外だ！」と戶外へ飛び出す——するとチリン／＼の鈴の音がだん／＼近くなつて「號外ッ、號外ッ」と元氣のいゝ聲が勇ましく聞こえて、もう往來はいつぱいの人だ。

「號外々々。旅順口港外で敵艦撃沈の號外々々。マカロフ司令長官戦死の號外だッ」

手拭で鉢巻きして草鞋ばきの號外屋が威勢よく怒鳴りながら駈けて来る。チリンチリンの鈴の音も、間近になるとジャンジャン、ジャンジャン……と勇ましく聞こえる。

そして配達されたり買つたりした號外に、多勢の人たちが寄つてたかつて「萬歳」「萬歳」の氾濫で、町内はすばらしい活況にどよめく。——さうした光景が戦勝國日本の東京をはじめ各市に展開されるのだつた。殊に東京では、號外の人氣といふものは、たいしたものだつた。各新聞社では、競争で戦況ニュースを集め、わづか二三行の小さい號外から、時には一ペーヂ大の號外を發行し、市民に一刻も早く戦勝を傳へやうと一生懸命だつた。

それに號外を賣つて歩く號外屋の人氣が、これまたすばらしかつた。なにしろ新聞配達人が固定讀者の家に配達するのよりも先きに、新聞社から印刷したのを片つばしから奪ふやうに買つて来て、それをどん／＼駈けながら賣り廻るのだ。各區内を眞つ先き駈けの競争で賣り歩

く。遅れたんでは人氣は無い。さうした元氣者揃ひの號外屋が、京橋や神田の各新聞社の前に、いつも數百人押しかけてゐて、號外の出るのを待つてゐる。そして號外を發行されると、喧嘩腰で何百枚かの號外を手引に引つ掴んだまゝ、腰にさげた鈴を鳴らしながら、四方八方の各區各町内へと散つて行く光景は、いかにも戦時氣分濃厚なものであつた。

滿都熱狂、海軍大勝利

物價の安かつた約四十年前のその頃、號外は一枚二錢が普通だつた。しかし一刻も早く戦況を知りたいと、買ふ者の方でも、五錢、十錢を投じて奪ふやうに求めるのであつた。敵艦撃沈とか、日本海軍大勝利などの號外だと、嬉しさのあまり、一圓紙幣でお釣りはいらぬとか、中には號外屋にお祝儀を出す家もあつた。なんでも一日二、三十圓の収入があつたさうで、今の若い人たちが考へるとウソみたいだらう。

『旅順口陥落。敵將ステツセル、乃木司令官の軍門に降伏す』『日本海大海戦露國艦隊全滅。東郷艦隊大勝利。帝國海軍萬歳』
旅順口陥落や日本海大海戦のときなどは、一日に三、四回も號外が出て、満都を歡喜と感激の増埒に叩き込んでしまつた――。

張り切つた軍港

明治三十七年の日露戦争のときは、小松刀自は、既に五十七歳になつてゐた。若い人達から考へると四十年近い昔のことであるが、刀自にとつては、つい昨日のやうな生々しい思ひ出が湧くのであつた。

『皇國大日本の運命を賭して戦つた大戦争――世界の強國ロシアが相手であり、日清戦役後の遼東半島還附で、國民の皆がロシアを討つ意氣に燃えてゐましたから、それは――誰れも

眞剣、悲壯な覺悟でした。』

彼女は斯う前提して、往時をしのぶのであつた。風雲急を告げるや軍港横須賀の緊張は、弓の満を持するやうにその極度に達し、艦船乗組將士の配置や兵器糧食の積込みなど、連日夜を徹する戦闘準備で、表面静かのやうで凄じい奔流が俄に漲つてゐるのだつた。そして海軍將士の顔さへ見ると、

『戦争はいつはじまりますか。大丈夫ですか。しつかりやつて下さい。』

と激励するのだつた。また『この際』といふ言葉が、海軍部内はもとより、市中にも流行してゐた。艦内作業などでも上官は、

『この際だから、シツカリやれ!』

の一言があると、能率が豫期以上に進み、市民のお互ひも、

『この際だから大いにやりませう。』

『この際だ。そんなことでは駄目だぞ。』

などと直ぐに『この際』といふ言葉を用ひられるのだつた。商人なども利益を眼中に置かず『この際だ。うんと勉強しなけりやいかん。』と一意戦勝を祈つてゐた。

「二月十日、忘れもしません。初春とはいへまだ寒さの酷しい日でしたが珍らしくも雷様が鳴りましてね、妙な日だと思つてゐると、宣戦の詔勅降下が發表されたのです。かねて覺悟は充分きめてありましたが、いよいよ開戦となると、なにしろ相手が世界の大国なので、一時はドキツとしました。しかし開戦と吐がきまると市民も大變な熱狂ぶり、海軍さんが出発するときなど、婦人も子供も逸見の波止場まで見送りにいつて、萬歳、萬歳を叫びかけ征く人も送る人も、熱涙をさふげて、まことに悲壯な光景でした。軍港にゐる士官さんや水兵さん達も、意氣は益々昂り、腕や胸を叩いて「戦争はおれたちがやるのだ。必ず勝つて見せるぞ」と大變な張り切り振りでした。わたし達もまだ若かつたので大元氣で、海軍さんの誰れ彼れなしに肩を叩いて「しつかり頼みますよ」と激励しお互ひに昂奮したものでした。」

その頃は婦人團體「愛國婦人會が唯一のもので、出征兵には餞別を贈り、送り迎へなどはあまりしなかつた。出征兵の見送りは主に小學生徒がやり、日の丸の旗を振り「天に代りて不義を打つ——」のあの軍歌がはじめて出來たのであるが、歌調が勇壯なので、陸軍ばかりでなく海軍勇士の出征の場合にも歌つたものだつた。

また今のやうに勤勞協力の團體などもなかつたので、婦人には一般に暇が多く、それでは前

線の勇士に濟まぬと、婦人有志が海軍當局と協力して、海軍共勵會が戦争の眞最中に女性の奉仕機關として創立された。そこでは海軍々人家族などの婦人奉仕部隊が、信號旗や被服の裁縫などの奉仕に、我れ先きにと争つて熱心に勤めたものだつた。

小松刀自は日清戦争のときと同様に、全財産を投げ出して恤兵献金をした。そして自分ばかりでなく、同業者をはじめ花柳界の女性や各方面を説き廻り、

「御國あつてのわたしたちですよ。戦争に行かない者は、大いに働いてお金はみんな献金しませうよ。」

と、恤兵献金に奔走をつづけてゐるのだつた。

その頃の頼母しい銃後

仁川沖海戦の大勝利につづいて、皇軍は海に陸に文字通り連戦連勝であつた。その間、小松

刀自と肝膽相照らした『軍神廣瀬中佐』の壯烈なる戦死、秋山名参謀の活躍振りなどの通報が刀自に大きい感動を與へた。

旅順などすぐに陥落すると思つてゐたのが、容易に抜けず、みんなが心配したものだつた。それが明けて三十八年の一月二日に、陥落の號外が出ると、涙を流して喜んだものだつた。當時はラヂオはなく、ニュース映畫もないので、新聞の號外をなによりも待つてゐた。戦争の様子は、新聞と號外で知るのであるが、外國通信では上海電報が敵性のインチキばかりで、つひには當てにならぬことを『上海電報』ではないかといふ言葉が流行したものだつた。

もちろん日露戦争中にも、物資なども不足したが、誰一人として不平をいはずに堪へ忍んで戦争に勝つことのみを考へてゐた。また浦鹽のロシア軍艦が日本海方面や、東京灣外に襲來するかも知れないので、今の燈火管制を長い間毎夜行つてゐた。それから更に、ロシアの本國から遙る／＼遠征して來るバルチック艦隊の存在を、みんなが氣にやみ出した。優勢な大艦隊が印度洋から太平洋に出て、いきなり東京灣に來るか、津輕海峽から浦鹽に入るかといふことが心配の種だつた。そこで軍港横須賀などでは、町で海軍々樂隊を頼んで來て、役場前の廣場に有志を集め、毎日勇ましい軍樂隊の演奏に合わせて『敵は幾萬』の軍歌などをどなりつゞけて、

氣勢をあげたりしてゐた。

五月二十七日、日本海大海戦我海軍大勝利——敵バルチック艦隊全滅の報は、號外よりも早く、鎮守府前に貼紙で出された。みんな躍りあがつてよろこんだ。これを傳へ聞いた人達の中には、聞いたゞけでは信用ができません、不便な山道坂道を歩いて、遠方からやつて來て黒山のやうな人ばかりで、手を取り合つて『萬歳々々』と大よろこび。銃後團體に奉公義會といふものがあつて、酒やするめを鎮守府へ持ち込むほか、晝は旗行列、夜は提灯行列で萬歳、萬歳の大騒ぎだつた。

東郷さんの大きな目玉

——海軍おばあさん山本小松刀自の『日露戦役の思ひ出話』は綿々として盡きない。それから無敵艦隊が堂々と大勝利の凱旋をしたときの、母港横須賀の沸き返るやうな熱狂的な歓迎振

り——それにつけても、少壯士官時代からお馴染みの東郷大將が、海戦史に空前の武勳を輝かして、一躍世界的偉人となつて凱旋されたときの感激こそ、終生忘れられないものであると、斯う語るのだつた。

『——戦後、東郷さんが、鎮守府に挨拶に來られ、廣場で小學生や市民有志にも挨拶されました。時の鎮守府司令長官の井上良馨大將（後の元帥）と、東郷さんは、なにか打ちとけて語らひを續けながら、皆の前へ出て來られました。そのとき東郷さんの人一倍大きい目玉がパツとわたしの眼に映りました。その瞬間、あゝやはり東郷さんは偉いお方だつた。よくもお立派なお手柄をお立てになつて、御無事でお歸りになつて——あゝよかつた——と、思はず感激の涙が流れましたが、あのとときの東郷さんの大きな目玉は、いつまでもハッキリと印象されてゐます。——』

廣瀬中佐と清水次郎長

軍神廣瀬中佐も小松最良だつた。

先輩の風流艦長と謳はれた八代大佐（後の大將）日本海大海戦の名參謀秋山中佐（後の中將）など、連れ立つて來て宴を開いたこともあつた。

『廣瀬さんはね、中尉、大尉時代によくいらつしやいましたよ。いもほり、（暴れること、海軍の隠語）でね、いろんな無邪氣ないたづらをして世話を焼かせになつたこともありましたよ。』

軍神廣瀬中佐も、在りし日は豪放磊落な少壯海軍士官で『小松のおばあさん』と慕つてよくやつて來て、いろいろ厄介になつたものだつた。『七生報國』を念願として、

『武人の身には妻はいらない。』

と、一死報國を期して、獨身で押し通したのだつた。そして令兄廣瀨勝比古大佐の令嬢——姪さんをこの上もなく可愛がつてゐたさうである。

『廣瀨さんは、邊幅を飾らない實にサツパリした豪傑肌のお方でした。尉官時代に、あの俠客清水次郎長と交遊がおありで、いろいろと共に憂國の情を語り合つたものださうです。』それは海軍士官と、東海道の俠客といふ妙な配合のやうだが、外敵に對する同じ日本の憂國の士として、他日に備へて肝膽相照らした仲で、當時の強敵ロシアに就いて熱血を沸かしたのであつた。

壯烈、一片の肉塊

日露開戦の早々、時は明治三十七年二月二十三日夜決行された旅順港閉塞隊の壯舉こそ、實

に日本武士道の精華であつて世界を驚嘆せしめたのだつた。日本帝國海軍々人たるもの苟も誰れ一人として生還を期するものはなかつたであらう。しかし難攻不落といはれた敵要塞の砲彈の標的となつて、眞つ先きに死せんとするのは大膽不敵といはふか、まさに忠君愛國の權化である。

或は指を切り、また腕を刺して血書の志願するなど、參加熱望者二千餘名の中から選ばれた僅か六十七名の決死隊——有馬中佐（後の大將）の率ゐる天津丸、廣瀨少佐の率ゐる報國丸以下五隻の諸船は、閉塞準備完成したので、指揮官、機關官等は、旗艦三笠の東郷司令長官の訣別の清宴に臨んだのであつた。東郷長官は、重みのある口調で、

『此の度は諸君、御苦勞である。充分の成功を希望致します。』

『誓つて御期待にそひます。長官閣下、何卒御安心を……』

進んで死地に挺身する勇猛果敢な勇士たちも、訓示する東郷長官も、この數語に無限の意味が溢れてゐるだつた。——

更に四月七日、第二回の決死閉塞隊の壯舉を決行された。——旅順要塞の砲臺と港内の敵艦隊の猛烈な十字砲火を冒して、廣瀨中佐指揮官の福井丸をはじめ各閉塞船隊は、旅順港口に肉

迫潜入してそれぞれの位置で乗組船を自沈せしめ首尾よく港口閉塞の目的を達した。そして大任決行の後、廣瀬中佐は部下の杉野兵曹長の姿が見えぬので、刻々と危険の身に迫るのも顧みず、沈みゆく福井丸の船上に彼兵曹長を捜索してゐたのだつた。

遂に福井丸の沈没の刹那、廣瀬中佐は漸く短艇に乗り移つた。しかしなほ杉野兵曹長の身の上を憂慮して『杉野、杉野……』と叫びながら敵の砲火と探照燈の光芒を浴びつゝハンカチーフを振り、福井丸の附近を捜索してゐるうちに、無念！ 敵の砲弾を身に受け、壯烈、一片の肉塊を短艇内にとどめて旅順港口に華と散つたのであつた。

お、銅像と無言の對面

廣瀬中佐の旅順港口閉塞決死隊の壯舉と、その壯烈なる戦死は、日露海戦中の花として全国民に空前の大感激を興へた。わけでもその中佐の生前からの最良だつた小松刀自は、

『さすがは廣瀬さんだ。御國のためよく名譽の戦死を遂げて下さつた。』

と、心の中では泣きながら、その壯烈な戦死を賞揚して措かないのであつた。

廣瀬中佐は生前から部下を愛してゐた。上官として遠慮する部下たちを、よく『小松』に連れて來て痛飲したものだつた。

『俺の顔は、八角時計に似てゐるな。』

など、戯談を飛ばしたり、はめをはづして騒いだものだつた。そして非常に金錢には淡泊だつた。俸給を受取ると、借金を仕拂つて、あとは金入れにも入れないで、バラのまゝポケットに捻じ込んでゐた。上陸して市中を散歩してゐるとき子供など遊んでゐると、いきなりポケットからお金を鷲掴みにして取り出して與へたりしてゐた。一生獨身で通した廣瀬中佐は子供好きであり、また部下を非常に愛して、薄給の下士官兵などには、人知れず物質上の面倒も見てゐたのであつた。そんな譯で『小松』に若干の赤字を拵へてしまつた。しかし直情な中佐は、自分から證文を書いて、辭退する女將の小松刀自に無理に押しつけてしまつた。だが中佐の戦死の報を聞くと、

『廣瀬さんは、神様におなりになつたのです。御國のため、海軍のため、一身を捧げて御奉

公なさつたのです。』

と『廣瀬武夫』の證文を、刀自はみづからきれいに焼いてしまった。——軍神の遺物で家寶のために保存して置かうといふ家人や知人の議論を押し切つて——。

小松刀自は上京すると、よく神田の須田町に廻り道をして、軍神廣瀬中佐と杉野兵曹長の銅像を拜して来る。そして歸宅すると家人に向つて、

『わたしや、けふ廣瀬さんにお逢ひして來ましたよ。いつも元氣なお顔で、小松のおばあさん……と言ひたさうに、ちつとわたしの方を見つめていらつしやいましたよ。』と嬉しさうに話すのである。

秋山參謀の名文

『皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ』

明治三十八年五月二十七日午後一時五十五分——聯合艦隊司令長官東郷平八郎大將は、その旗艦三笠の塙頭高く『Z旗』を掲揚して右の名信號を全艦隊の將士に傳へたのであつた。帝國海軍が敵ロシアのバルチック艦隊を日本海の對馬海峽に迎へて、まさに乾坤一擲の大海戦の砲火を交へんとする瞬間である。しかし開戦當初全艦隊の將士に決死決勝大決心を固めさせ、後世の全國民にも感奮興起せしめずには措かないこの名信號は、もとより開戦のその時に考へたものではなく東郷長官の命により秋山參謀が、前から準備してあつたのであつた。

わが聯合艦隊の首脳部では、沈着巖の如き東郷司令長官をはじめ、冷靜水の如き加藤參謀長や、智謀神の如き秋山參謀などが、上村、片岡、出羽、三須、瓜生、島村、東郷（正路）、武富、山田、小倉などの名將とともに、寄り／＼軍議を凝らされ、彼の有名な七段備への戦法をもつて嚴密なる配備のもとに、對馬海峽を扼してゐたのであつた。

この世界海戦史上空前の大海戦の起つた日の早曉、東方の水平線上一抹の彩雲が淡く黎明の曙光を投げかけ初めた午前四時十五分、突如無電一閃、哨艦信濃丸は『敵艦見ゆ』との警報を全艦隊に送つた。東郷長官は直ちに、

『敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出勤、之れを撃滅せむとす。本日天氣晴朗な

れども波高し』

全國民の血を沸かせた彼の第一報を大本營に打電しつゝ、第一、第二艦隊を率ゐる沖の島の北方を指して鎮海灣を出動したのだつた。この「敵艦見ゆとの警報に接し……」の千古の名文こそ名參謀秋山眞之中佐の執筆によるものであるといふ。もつとも、聯合艦隊は直ちに出勤、之れを「邀撃」せむとすとあつたのを、東郷長官は「撃滅」せむとすと直されたものであるといふことである。——この「撃滅」といふ言葉は現今では盛んに使はれてゐるけれど、なかく無暗に使へるものではないのだ。殊に聯合艦隊司令長官が、大本營即ち大元帥陛下に對し奉り「これを撃滅せむとすと、戦争の事前に思ひ切つて使へる言葉ではないやうである。ところが東郷司令長官は、自分の統率する聯合艦隊の強力なこと、部下の最善の努力といふことに絶對の自信を持つてゐるので「撃滅」といふ電報を大本營に打つたのであつた。

それが日本海大海戦に見事に大捷して、それを大本營に報告したときは、

『天祐と神助に依り、我が聯合艦隊は五月二十七、八日敵の艦隊と日本海に戦ひ、殆んどこれを撃滅することを得たり。』

とある。前には「撃滅せむとすと」といふ豫報があり、最後に「殆んどこれを撃滅するを得た

り」といふ報告があつて、前後これでもつて照應するのである。

事實、日本海大海戦の戦果は、三十八隻の敵艦艇中十九隻は撃沈せられ、五隻は捕獲、二隻は抑留、その他はあるひは中立國に遁走して武装を解き、あるひは擱坐、破壊、沈没し、浦鹽に入つたのは僅かに巡洋艦一隻と驅逐艦二隻だけだつた。また敵艦隊司令長官ロヂェストウエンスキー提督以下六千百餘名の將兵は捕虜となり、死傷は四千五百餘名に達したのであつた。これをわが戦死傷七百餘名と、水雷艇三隻の沈没と對比すると、わが艦隊は實に千古無比の海戦上の大勝を博し、世界のあらゆる人々が空前の讃辭を惜まなかつたのである。

「天祐と神助」

三笠艦上に掲げられた名信號「皇國の興廢」の、この皇國といふ言葉に就て、東郷長官は、なぜ日本帝國とも言はれなかつたか。また「天祐と神助に依り敵艦隊を撃滅することを得た

り』とあるが、天祐と神助といふ言葉に就ては、單な形式的なものではなく、東郷長官はそれらの言葉に就ては深い考慮から用ひられたものであつた。そしてそれらの言葉は、東郷長官の幕僚たる秋山參謀中佐の名文によつて表現され、千古に傳へることが出来たのであつた。

秋山參謀は、大正四年五月二十七日の海軍記念日當日（當時少將）長くも御前講演を行ふたが、その『日本海海戦』と題する一文には『皇國』『天祐神助』といふことが、單なる説明でなく尊くも自然に表明されてゐる。その原稿によると、冒頭には

『明治天皇陛下の御稜威の發現の一つに稱へらるゝ日本海海戦は、古今未曾有の大海戦にして、其の未曾有なる所以は其の戦場の頗る廣大なりしこと、其の交戦時間の甚だ長かりしこと、對抗兩軍艦隊の兵力の多大なりしことの外に、其の勝敗の差隔が著しく懸絶して敵の艦隊が殆んど全滅したるに反し、皇軍の損害が眞に僅少なりしこと是れなり。』

と叙し、皇軍作戦計畫の要領から、激烈慘憺たる初期の決戦、決戦の終りたる後の追撃戦を詳述してある。そして、

『——各艦の砲火は益々顯著なる效力を發揮し、勝敗は實に此の三十分間に決定せり。即ち日本海海戦の大勝は第一合戦の決勝より起り、其の第一合戦の決勝は實に當初の三十分間に

定りたるものにして、皇國の興敗安危は此三十分間の勝敗にかゝりしものと謂ふべきなり。』
『熟々稽ふるに此の海戦に於ける彼我艦隊の主力は殆んど對當の兵力にて、我が軍の戦艦四隻装甲巡洋艦八隻に對して、敵は戦艦八隻、装甲巡洋艦一隻、装甲海防艦三隻を有し、各十二隻を以て主力を成せり。而かも皇軍が僅々三十分間に此決勝を贏ち得たるは素より其の當時に於ける種々なる天祐神助の然らしめしものなれども、抑々、此の十二隻の主力艦隊が此の戦場に立つを得たるが、先帝陛下（明治天皇）の御威徳に基ける皇軍天祐神助の最大なるものと信ぜざるを得ず。實に此の十二隻の堅艦中、春日、日進の如きは日露戦役の際、伊太利より遽に購入せられ、開戦後に我が國に到着したるものにて、若し此の二艦無かりせば日本海の戦勝は彼の如く偉大ならざりしならん。獨り春日、日進のみならず、三笠、敷島、朝日、富士、或は出雲、磐手、淺間、常磐の如きも、先帝陛下の聖代に於て、皆多年の慘憺たる建營に成り、初めて此の戦場に參加したるものにして、此等の艦艇を整備し、其の乗員を訓練して戦場に立つを得しむる迄には約十ヶ年を要せり。されば海戦の決勝は前記の如く僅に三十分間に獲得さるるも、此に至らしむるには十年の戦備を要せしものにて、即ち取りも直さず連綿十年の戦争と謂ふべきなり。此の十年の經營の大戦争に於て、皇軍が海に陸

に連戦連勝し得たること、皆是れ 先帝陛下の御威徳の致す所なり。』

☆

右の文中、其の當時に於ける種々なる天祐神助——に就ては『天氣晴朗なれども浪高し』と大本營へ報告された通り、空は碧く冴えてゐたが、海上はボーツと霞がかゝつてゐて遠方がよく見えなかつた。それが非常な天祐であつたといふ。即ち日本晴の好天氣だと、敵もいろ／＼策戦を變更したであらうが、波高く海上は霞んでゐたので、敵はわが艦隊を發見するのが遅れてゐた。お互ひが見えないながらも、わが艦隊は待機してゐたのだから、分がよい譯だ。そして海上が相當に荒れてゐたので、わが勇猛な艦隊將士は、却つて思ひ切つた激戦を展開することが出来たのであつた。

日本海海戦には七不思議といはれるいろいろな天祐があつたといふ。そして東郷長官は平素から、

『至誠をもつて事に當れば、至誠神に通じて必ず天祐神助がある』と確信して居られたといふことである。

斯うして御稜威と天祐神助により、わが海軍は敵ロシアの東洋艦隊も遠征艦隊も撃滅し、わ

が近海の海上權を完全に手中におさめ、遂に日露戦争を終結せしむるに至つたのであつた。日本海々戦大捷後の五月三十日、

畏くも 明治天皇より

聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峡ニ邀撃シ、奮戦數日、遂ニ之ヲ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ。朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ、祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ憚フ。惟フニ前途ハ尙遼遠ナリ、汝等愈々奮勵シテ、以テ戦果ヲ全フセヨ。

との、畏れ多き勅語を賜はり、全海軍將兵はもとより、國民みな感泣するのみであつた。

上村艦隊非難の真相

小松刀自は日蓮宗の信者であるが、日露戦争には第二艦隊司令長官として勇名を馳せた上村

彦之丞大將もまた、熱心な日蓮宗信仰者だった。それに剛毅で酒豪の聞こえ高かつた上村大將には、女性ながらも俠氣で酒に強い小松刀自は、よき相手であつて、信仰上のことなどで、よく語り合つたものだつた。

上村大將は東郷大將と同じやうに、日清戦争にも日露戦争にも最前線に立つて、赫々たる武功を輝かしたのであるが、その艦上生活にあつては、毎早朝甲板に出て、先づ宮城を遙拜して聖壽の萬歳を祈り、それから日蓮宗のお題目を唱え、皇軍の武運長久を祈願し、雨の日も風の日も、一日も缺かしたことがなかつたといふ。

日露戦争に人知れぬ苦勞をしたのは、陸軍の乃木大將、海軍の上村大將だった。乃木大將はあの難攻不落といはれた旅順攻撃軍司令官として、幾多の努力と犠牲を拂つたが、旅順がなかく陥落しないとして、國民の憤激をかつたことがあつた。また海軍では、主力の東郷第一艦隊は旅順の方面にあり、上村第二艦隊は對馬海峽附近にあつて、内地と朝鮮滿洲大陸との連絡や輸送船の保護に當つてゐたのである。ところがロシアの浦鹽艦隊は常陸丸、金州丸、佐渡丸などのわが陸軍の輸送船を襲撃して、出征將兵や軍需品を海底に葬り、大損害を加へた。そのため上村艦隊は、國民の憤激をかつたのである。往時を追想して、小松刀自は次ぎのやうに語つ

てゐる。

「あのときは大變な騒ぎでしたよ。上村艦隊のことを、濃霧艦隊とか無能艦隊といつて非難攻撃し、中には上村さんを誹謗し、憤激の果には、東京の上村邸に石を投げたり、司令長官を辭職して切腹しろなどと、手紙をやる者もあつたのでした。上村艦隊は、決して安閑としてゐたわけではないのでした。上村長官みづから旗艦出雲の無電室に入り、敵情を調べたりして幕僚から諫められたことがあつたといふほどなのです。上村長官も全艦隊の將士のお方も、必死の努力を拂つてをられたのです。ところが敵の浦鹽艦隊は、速力のはやいのと、濃霧を利用して、輸送船隊を襲撃して逃げ廻つてゐるので、なか／＼思ふやうに廻り合せて、撃破することが出来なかつたのです。まつたく廻り合せがわるかつたのですね。だから非難攻撃する人たちよりも、上村さんはじめ艦隊のお方たちの方がよほど残念で、どんなに苦勞なさつたか判りませんよ。殊に上村さんは、人一倍剛毅で感情の強いお方ですから、國民が憤慨して、お家族のお方たちまで外へ出られないやうな有様だといふのだから、上村さんの胸の中は煮えくり返るやうだつたでせう。わたしは上村さんのお心をお察して、毎朝、毎晩、いや日に何度となく暇さへあれば、家の神棚と日蓮様にお燈明をあげて、わたしの壽

命を縮めてもよろしいから、どうか上村艦隊が武勳をあらはして下さるやうにと、涙と共に
お祈りしたものでした。』

ところが、上村艦隊の不斷の努力は、遂にむくいられる日が来たのである。明治三十七年八月十四日、朝鮮蔚山沖において、上村艦隊は恨みかさなる敵浦鹽艦隊を邀撃し、一擧にこれを撃沈してしまつた。それからは、敵の艦隊は日本海からすつかり消え失せてしまつたのである。しかも、この蔚山沖の海戦では、撃沈した敵艦リウリック乗組の恨みも深い將士六百餘名を怒濤の中から救助して、帝國海軍々人の情けをあらはして好遇したのであつた。これは旅順陥落と共に、敵將ステツセル以下の捕虜を優遇した乃木大將の寛容と、好一對の日本武士道の花である。

『まつたくあのときは口惜しいでしたよ。少しぐらゐの我慢が出来ないのですからね。戦争のため犠牲があるのは、仕方のないことでせうにね。それにあの頃、浦鹽艦隊が津輕海峽を通つて東京灣の外へ来たといふ報があつたときなど、みんな青くなつてね、東京や横濱の人たちはみんな狼狽して、大騒ぎでしたよ。少し形勢が變るたびにあわてたり騒いだりしたんでは、とても戦争などは出来つこありませんよ。たとへばこんどの大戦争にしましても、東

海軍航空の發祥

京でも横須賀軍港でも、日本中の何處でも、アメリカやイギリスの爆彈ぐらゐ見舞はれてもピクともしないで、冷靜に軍のお當局に信頼して、みんなしつかりしなければなりませんよ。——これはまた、飛んだ生意氣なことを申し上げるやうですが……』
九十五歳の小松刃自は、自分の永年の體驗から現在の心境を語つてゐる。

創始期の尊い犠牲

わが海軍が、はじめて飛行機に手を染めたのは明治四十五年五月だつた。米國のカーチス會

社がアトータ機を持つて来たのが動機となつて、話しが急速に具體化して、飛行機研究員といふものを任命された。梅北兼彦(故人)、金子養三(豫備少將)の兩少佐を佛國へ、河野三吉(故人)、中島知久平(元鐵相、現衆議院議員)、山田忠治(豫備少將)の兩大尉を米國へ派遣して飛行機研究を行ふことになつた。

同年の秋、早くも金子少佐はフルマン機を、河野大尉がカーチス機を持つて歸朝し、恰も東京灣で行はれた觀艦式の當日、天覽飛行を行つた。これが海軍水上機の我が國における最初の飛行であつた。

もちろん、兩飛行機とも性能は現在とは隔世の感があり、時速四〇節(七五キロ)七十馬力、航續力わづかに一時間といふ貧弱なもので、殊にカーチス機などは操縦席にカバーもなく、飛行中も吹きさらしといふ有様。そのうちに他の研究員も續々と歸つて来たが、中島知久平機關大尉などは、追濱で試験飛行をして、大得意で小松女將の許へやつて来て、

「けふは本當に空中飛行をしたぞ。百メートルばかりな！」
などゝ威張つてゐたものだつた。時には飛行機もろとも海の中に落ちて、泳いで陸へ歸つて来たなどゝいふ挿話もあつた。

それらの研究員を中心に、當時財部海軍次官の肝煎りで出来たのが航空技術委員會で、委員長に山路一善中將が任命された。第一期練習生として井上文雄、廣瀬正經(中將)、安藤東三郎、藤瀬勝(豫備大佐)の四士官が入隊したのだつた。

それでも水上機を輸入してから二年目、大正三年の秋の青島攻略には、母艦若宮丸で三機出動し、機銃などないから各員はピストルを持つて、ドイツ機を射ち捲つたり、無電臺や驅逐艦を襲撃したといふ大元氣だつた。

同五年四月一日、追濱にはじめて海軍航空隊が設置され、本格的の海の荒鷲の誕生となつた。大正四年三月、海軍初の犠牲者安藤、武部兩大尉、梁瀬三等兵曹三氏の殉職以來、幾多の空の勇士の尊いく犠牲によつて、我が海軍航空隊の進歩は一層拍車をかけられたのであつた。

和田中將が大尉時代に(大正四年)海軍はじめての場外飛行——長距離飛行として、横須賀新舞子間三六〇キロを飛んで『空の偉勳』と賞讃されたことや、昭和初期の南洋飛行など、我が海軍航空隊史の輝かしい一ページを飾り、幾多の貴重な訓練が、今や全世界に日本海軍荒鷲の勇名を轟かすに至つたものであつて、その今日を成すには一朝一夕のことではないのであ

る。

日本最初の海軍機操縦者である前述の金子少將は、飛行機研究員の少佐時代に青島攻略にはじめて航空機を飛ばして『航空戦』を決行した海の荒鷲の親であるが『不言實行、細心大膽』をモットーとして幾多の後進者を指導訓練して來たのであつた。

それらの我が海の荒鷲の親達の英名は、日本海軍航空發祥の地横須賀海軍航空隊の名と共に、永遠に史上に輝くものである。

空軍充實に拍車

横須賀海軍航空隊の新設後、佐世保、呉にも航空隊を増設され、更に霞ヶ浦航空隊の新設となり、海上では航空母艦赤城、加賀、鳳翔などを中心に航空戦隊を編成され、海軍の空軍勢力は目ざましい進展を來たしてゐた。

そして沈着、剛膽、冷靜、機敏、犠牲的精神と科學的智識を必要とする海の荒鷲は、我が海軍から次ぎ次ぎと巣立つて行くのであつた。桑原虎雄、吉良俊一、宗雪新之助、草鹿龍之介、龜井凱夫、杉本丑男など現在將官または大佐級となつて大東亞戦争に活躍してゐる海の荒鷲の親達も、その大正時代には少佐または大尉で、優秀飛行家として將來を囑望されてゐたのだつた。また水上機の方では宮崎重敏大尉や千田貞敏大尉、横井俊夫少佐、加藤唯雄、近藤勝治兩大尉などがあり、沈着大膽な猛訓練が夜を日に次いで繰り返され、銳意海軍空軍の充實に拍車をかけられて行くのであつた。

加藤寛治大將が横須賀鎮守府司令長官のとき、海軍おばさん小松刀自は、

『これからは日本海軍は軍艦と共に、飛行機をたくさん造らなければならないのだ。』

と大將から聞いて大いに感動した。そして早速國防献納機『小松號』完成の念願を起した。彼女は先づみづから私財を投げ出すと共に、地元横須賀市民に呼びかけて淨財を募つた。だが、何事も徹底的にやり遂げなければ氣の濟まぬ彼女は、中途半端なことでは承知出來ないのだつた。

『どうせ献納するのならば、がつちりした日本一の優秀な飛行機を造りたい。そして海軍の

ため、御國のためにお役に立つて貰ひたい。』

さうした念願から横濱、東京をはじめ關東、東北、關西、九州の各方面まで或ひはみづから巡回して熱心に説き廻り、または檄を飛ばして海軍機献納運動に活躍を續けた。殆んど全國的に知己を持つ彼女は、その不斷の努力によつて、二年間で遂に目的を達したのであつた。

しかし、これは自分一人の力ではないといつて『小松號』と名附けることは遠慮して、單に『報國機』として海軍に献納し、素志を全うしたのであつた。

山本大將組閣の大命

大正二年の二月、桂内閣のあとを襲ふて、山本權兵衛伯が首相の大命を拜して、所謂第一次山本内閣を組織した。

山本權兵衛大將が第一次内閣を組織したのは大正二年二月二十日だつた。當時は世相が險惡だつたので、數次の内閣更迭の後をうけて立つた山本内閣に對する一般の期待は多大なものだ

つた。海軍大臣を辭してから永い間ちつと内外の一切の情勢を見てゐた山本首相は、その透徹した頭腦と豊富な識見、冴えた手腕と鋭い雄辯と三拍子も揃つた理想的な首相として、組閣と共にその抱負をどしどし實行し、行政整理や財政の建直しなど内閣はじまつて以來の大成功と賞揚されてゐた。そして山本内閣によつて日本中を強力な、明朗なものにして貰ひ度いとの一般の要望であつた。

『橋登り』の昔からお馴染みの權兵衛さんは、小松刀自の炯眼に狂ひはなく、西郷從道、樺山資紀、仁禮景範などの海軍の大先輩のあとを繼いで、明治三十一年日清戦争後の三國干涉の多事多端の折柄山縣内閣の海軍大臣となり、日露大戦の終結するまで約十年間、その大任を立派に果たしたのでつた。その權兵衛さんが、こんどは總理大臣となつたのだ。小松刀自の『小松のおばあさん』は、躍り上つて喜んだものだ。

早速お祝ひのため、お供を連れて上京し、首相官邸を訪問した。ところが官邸の守衛は迂散臭いお婆さんと思ひ込んで、取次ぐどころか、態よく追つ拂ふとしたもんだ。小松刀自は笑ひながら、

『わたしや、お前さんに用はないんだよ。此處にいらしやるいちばん偉いお方に、横須賀の

小松のばあが来ましたと、一言取り次いで呉れ、ばい、んですよ。』

と、江戸前の齒切れのいゝ言葉でいふのだつた。秘書官が出て来た。山本總理大臣が出て来た。

『おう、小松のおばあさん、よく来て呉れたね……』

鶴の一聲に、彼女は官邸内に招き入れられた。

『閣下、やつぱりあなたは、總理大臣にまでおなりになりましたね。おめでたう御座います。わたし、うれしくつて……』

『おう。おばあさん、いつも丈夫で結構だな。わしは、けふはいそがしいんでな、まあ夕方まで待つてゐて貰はう。』

山本首相はさういふて彼女を引きとめた。そして多忙の裡にも暇をつくつて『お客』として歡待し、久し振りで昔語りをなつかしむのであつた。

『世間では山本伯を、剛毅一點張りのお方のやうに見てゐるものもあるが、實際はすいもあまいも知り盡した人情に厚いお方ですよ。公私の區別をハッキリときめて、何事も熟慮の上で斷行し、自分の正しいと信じたことは必ずやり通す男らしい男でいらつしやいますよ。』
山本伯について、小松刀自は斯う語るのであつた。

硬骨漢 八代大將

大正の大隈内閣時代海軍大臣として鳴らした八代六郎大將は、硬骨剛毅の反面に風流提督と謳はれたものだつた。

日露戦争には淺間艦長として武勳を輝かしたが、開戦の劈頭、今から敵に向ふといふ直ぐ前仁川沖の月明の夜、悠々尺八で『千鳥の曲』を吹奏した綽々たる餘裕振りは『尺八提督』または『風流提督』として、その風韻は永く後世に残ることであらう。

この八代大將は、少壯士官時代から『小松』最良で、將軍になつてからも時折東京からわざわざ訪れて、

『おばあさん、来たぞ。達者か。』

と、小松刀自を相手に盃を手にしたものだ。そして昔の青年士官時代に唄つた。

「飲め、しつかりしろ、男じやないか、板子下は、地獄だもの……飲め、しつかりしろ……」
を繰り返して、女將と共に往年をなつかしさに偲んだものだつた。

八代大將の先輩の上村大將、加藤（友三郎）大將、藤井大將など、みな小松最良だつたが、既に幽明世界を異にしてゐる。そして八代大將も今は過去の人である。だが大將が、日露戦争凱旋後、小松樓上において筆を執つた、

『天空海潤 八代六郎』

の大額が、墨痕淋漓、溢るゝ往年の士氣を躍如と物語るやうに大廣間に掲げてある。

なほ八代大將は、敵前の尺八吹奏から『風流提督』などといはれるのを嫌つて、後年は断然尺八を手にしなかつたといふことである。

艦齡を頭に國防計畫

田中陸相と加藤海相

「陸軍の田中さんは、まことに、偉いお方だつたと思ひます。わたしは二度ほどお目にかゝつたゞけでしたが、少しも飾りつ氣のない、茫ツとしたやうなお方でしたけれど、それでゐて、ちやんとなにもかも要點を掴んでゐらつしやつて、大きな肚と鋭い緻密な頭で、すべてを處理していらつしやいましたのです。やはり總理大臣におなりになるやうなお方は、何處か違つていらつしやいましたよ。」

小松刀自のいふ田中さんといふのは、後の政友會總裁で首相になつた田中義一大將のことだ。當時中將で陸相のときのことであるが、小松刀自が海軍の某將官から聞いた挿話があつてそれが海軍に關する大きな事柄であつたから、此處にお紹介する。

☆

大正七年九月、寺内正毅内閣が辭職して原敬内閣が成立したとき、事務の引繼ぎをした原首相は、初めて國防計畫の内容を聞いて驚いた。なんでも寺内内閣の時代に、海軍は八八艦隊の完成、陸軍は四個師團増設といふ陸海軍の國防計畫が決定し、元帥會議に御諮詢となり元帥會議は、陛下に奉答して確固不動のものとなつてゐた。ところがその經費は三十億圓といふ龐大なものなので、後繼内閣の首相となつた原敬氏は非常に頭を痛めたのである。そこで原首相は、組閣早々藏相の高橋是清翁のところへ相談に行つた。肚の大きい高橋藏相は『心配せんでもよろしい。我輩に任せて置けばよい。若し我輩の手でうまくいかぬやうな時には、君が出たらよからう。』といふことであつた。——そこで、日を期して加藤友三郎海相と田中義一陸相の兩海陸軍中將と高橋翁と三人が會見した。軍事費のことで陸海軍大臣と大

藏大臣だけが會見して、お互ひ同士で話を決めるなどいふことは前例のないことだが、その點は大人物の高橋翁のことで『お互ひに腹藏なく話し合へば判る』と一と芝居打つた譯だ。その三人の會議で高橋翁は『寺内内閣のお土産の龐大な國防計畫を知つて、原首相が驚き且つ困つてゐる。國防は一日もゆるがせに出來ぬが、國の力、即ち財政のことを考へずに龐大な國防計畫を立てゝも實現出來得ない。』と財政状態を説明して考慮を求めた。すると加藤、田中の兩相は『それでは案を建て直して、また相談することに致しませう。』といふことで、その會見は終つたのである。

——それから二度目の會見となつた。そのとき持つて來た海軍の案は、經過的の意味で、八四艦隊を計畫し、陸軍もだいぶ減少して案を立て直して來た。しかしそれでもなほ十五億圓以上の計畫であつた。ところが高橋藏相の言ふには『陸軍も海軍もこんな龐大な計畫を立てゝゐるが、いつたいこれは、陸海軍とも双方が同時にこれだけの豫算が要るのであるか、どうか。その間にどちらか輕重、緩急といふものがありさうに思はれる。それはないのか、あるのか、どちらを先きにして、どちらは後にしても差し支えないといふことがありさうなものだが……陸軍大臣として、海軍大臣として考へずに、お互ひ軍部大臣として、國務大臣

として考へたならどんなものであるか？……。」と。——そのとき加藤海相は黙々としてゐた。すると田中陸相は口を切つた。「それは海軍が先きだ。海軍には、軍艦に艦齡といふものがある。この艦齡を頭に置いて、國防計畫を立てる必要がある！」

高橋是清翁の偉大さ

——それから種々と話を進めて、計畫そのものも更に修正したが、田中陸相は「大蔵大臣の話はよく判つた。それでは海軍は大正十六年に計畫全部が完成するといふことだが、陸軍はその完成まで計畫を待たう。それまで必要止むを得ないものだけを補充して置くに止めるが、海軍が完成したなら、直ちに陸軍の計畫遂行に移ることにして貰ひ度い。」と譲歩したのであつた。高橋藏相は、この田中陸相の立派な態度に非常に感心して、その言ひ分を諒承して、財政と國防とのあんばいを調整して行くことにした。そしてそのことを原首相に話す

と「それで安心しました。」といつて、たいさう喜んだのであつた。——

實に田中陸相の態度は見上げたものだ。斯うした理解あり、互譲の精神ある人が國務大臣であつてこそ、明朗政治が實行出来るのだ。そしてこの理解と互譲の精神のある政治家揃ひだつたならば、山本内閣弾劾などいふ、忌はしい陰謀もなかつた筈である。また、海軍のことは自分のことであるから、言ふべきことはたくさんあつたであらうが、たゞ黙々としてゐた海相の加藤中將も、偉かつたといはねばなるまい。さうしてこの大問題を、この筋書通りに運んで來て圓滿に取纏めて、國防計畫の基礎を打ち立てた高橋是清翁の人物の偉大さを、今更仰望するのは筆者のみではあるまいと思ふ。

前世界大戦と日本海軍

南遣支隊の南洋群島占領

大正三年バルカン半島の一角で、オーストリー皇太子と同妃がセルビア人に暗殺されたのが導火線となつて、あの世界大戦が勃發した。わが日本は、東洋の平和を維持するため、また日英同盟の義を重んじて、正義を世界に布くために獨逸に對して宣戰したのであつた。

このいはゆる第一次世界大戦は、大正三年から八年まで足かけ六年間繼續した大戦争だつたが、その間陸軍は開戦當初の青島攻略と昭和七年のシベリア出兵だけであつたが、海軍は六年間引きつゞいて活躍したのであつた。即ち加藤定吉中將（後の大將）司令長官の第二艦隊は、

陸軍と協同して青島（膠州灣）を攻略し、加藤友三郎大將司令長官の第一艦隊は黄海から東海北部にわたる海面を警備し、その南遣支隊は英國海軍と協同して南洋に出沒する獨逸東洋艦隊の掃滅に當つたのである。この第一南遣支隊は、山屋他人中將（後の大將）が率ゐて、獨領マシーナル群島、マリアナ群島、カロリン群島などを占領した。——島田大將からバトンを引き續いて支那方面艦隊司令長官として活躍した日比野正治中將は、當時大尉で、その南遣支隊に屬して南洋占領に出かけ、占領が済んでからヤルート島守備隊長を命ぜられ、群島の獨裁政治をやつてゐたものである。それから戦後、南洋群島はわが日本の委任統治となつたのだ。——また、土星光金少將（後の中將）の率ゐる第三艦隊は、東海南部から遠くフィリッピン諸島の東方海面にわたる海域の、警備に任じてゐた。

建國以來初めての遠征

その後、大正六年となつて、大戦の進展につれて、わが日本では特務艦隊を遠く地中海に派

遣した。特務艦隊司令官は佐藤臯藏中將であつた、當時活躍した將士のうち現存してゐる主な將星は次ぎの通りである（當時いづれも佐官）

旗艦出雲艦長小林研藏中將。日進艦長長澤直太郎中將。驅逐隊司令横地錠二少將。參謀長安東昌喬中將。先任參謀岸井孝一少將など。更に當時より引きつゞき現役にあるは支那事變當初揚子江遡江艦隊司令官として勇名を轟かした近藤英次郎中將（當時驅逐艦「松」の先任將校）。潜水艦戰術の權威浮田秀彥中將其他

この特務艦隊は英米などの聯合國海軍を慄ひさせた對獨逸潜水艦戰をはじめとして、輸送船隊の護送、印度、濠洲、ニュージランドからの軍隊大輸送團の護送、通商の保護などの重大任務に従事したのである。殊に對潜水艦戰においては驅逐艦「榊」「松」などが、獨逸の潜水艦が荒れ狂ふ地中海に堂々進出して奮戦し、日本帝國水雷戰隊の武名を轟かしたのであつた。横地少將の談によると

『日露戰爭には水雷艇長として參戰して一人の部下も失はなかつたが、地中海では遂に「榊」艦長上原中佐以下多數の部下を靖國神社へ送りました。』

一躍世界の一等國

特務艦隊の參戰は一年八ヶ月間にわたり、その間戦闘回数三十六回に及んだ。また護送任務にあつては、わが艦隊の直接護送を受けた艦船八百餘隻、保護兵員などの延べ數七十五萬人といふ驚くべき數字に達した。加藤寛治大將は伊吹艦長として護送任務に當つてゐたが、聯合國側では自國の海軍よりも日本海軍の強味に信頼し、殊に濠洲や佛國では絶大の感謝を捧げたものであつた。

このやうに日本海軍は、遠く歐洲に遠征して聯合國側作戰の全局に寄與すること多大であつて、列強に伍して赫々たる偉勳を輝かしたことは實に建國以來はじめての壯舉であつた。

この大戰の結果、わが日本は一躍して世界の一等國となり、帝國海軍は世界の三大海軍國の中に加はることになつたのである。

鐵血提督加藤寛治

屈辱軍縮に悲憤慷慨

軍略家として實戰舞臺の雄として『第二世東郷さん』と畏敬されてゐた加藤寛治大將は、特に小松刀自がお氣に入りだつた。

加藤大將は、嚴父が海軍士官で、小學校時代を横須賀で送つたので横須賀を第二の故郷としてゐた。生前の嚴父のことや、なにかも知つてゐる彼女を、大將は實の祖母のやうになつてしまつてゐた。鎮守府司令長官になつたときは、早速小松刀自を訪れて、

『おばあさんとは随分永い間の馴染みじやのう。日露戦争？ 日清戦争？ いやもつとく』

昔の、兵學校を出たてのころからだのう。それ、あの海軍士官になりたてのホヤ／＼の時分の唄をうたはふか。』

と、そのころの海軍流行唄をうたふのだつた。

『二本巻いたる艦長さんよりも、オ、チヨイチヨイ。三ツボタンの、オ、チヨイチヨイ、〇〇さんがよい、コリヤコリヤ……』

豪放、無敵の加藤司令長官も、彼女の前では無邪氣な子供みたいなものだつた。

ワシントン會議で屈辱の軍縮の餘儀なきに立ち至つたとき、加藤大將の慷慨悲憤は、側の者の見る目も痛ましいばかりだつた。時に人目を避けて一室にあつて、酒盃を手に沈思黙考に耽ることがあつた。そして深更にわたつて、酒量を過すことさへあるのだつた。

すべてを承知してゐる刀自は、なんと慰めてあげてよいか、思案に暮れることもあつたが、あまりの酒量に大將の健康上に及ぼすことを恐れた。そこで、

『御母堂様が、御待ちかねで御座いますから、もう御切り上げになつて御歸邸あそばせ。』と、恐る／＼申し入れた。少年時代に嚴父に死別し、母堂の苦心で成長した大將は、非常な母思ひであつた。彼女のその一言に、大將は、

『うむさうだ。御心配をかけてはいかん。』

と、早速自動車を呼ばせ、司令長官々邸へと歸るのであつた。日曜などには、年老へた母堂を背負つて、邸内の小山に登つて、軍港の海を眺めさせて喜ばせてゐたといふほど孝心深い大將は、その後も酒の席が永くなると、

『御母堂様が御待ちかねで御座います。』
の一言に、重い尻を軽くして、匆々に歸邸するのであつた。

月月火水木金

今に判るぞ！ 血涙の猛訓練

加藤大將は、聯合艦隊司令長官時代には、一年中に何回かの偶々の歸港にも、上陸すると必

ず小松刀自を訪れるのだつた。

——世界の有力なる平和機構であるかのやうに宣傳された、彼のワシントン條約は、帝國海軍に、五、五、三比率を押しつけることを取引條件としての英・米海軍力争覇の妥協にほかならなかつたのである。その裏面には、帝國の大陸發展を阻止せんとする英・米密約が包藏されてゐた。日本の大陸發展を阻止するためには、その海軍力を劣位に壓迫するよりほかはないといふのがアングロ・サクソンの終始一貫したイデオロギーだつた。過去における數次の海軍々縮の歴史が、同時に帝國の大陸發展に對する妨害の歴史であつたのだ。その數の上における比率の劣勢を、質において優勢ならしむるために、あの有名な『加藤艦隊』の猛訓練が開始されたのである。

『月月火水木金』

一度軍港を出たら最後、土曜も日曜も抜きで猛訓練を続けられた。海軍の實力は人と物から成立つてゐて、物といへば先づ第一に軍艦であるが、その數量が英國や米國に較べて少い。しかしこれを活かして使ふ人間の術力、精神力が巧妙旺盛であれば、戦争に必ず勝つのだ。それには平素の訓練が第一である。『死なば諸共』と敵の大艦と刺し違へる水雷戦隊の奇襲戦法——

通商破壊といつても商船を撃沈することを立前とせず「専ら敵の戦艦または航空母艦狙ふ」潜水艦の大洋作戦——。敵艦隊の勢力を減耗させ、最後の決戦に立派に我が艦隊が敵艦隊を撃滅し得るやうに仕向けるのが重要な任務であつた。月月火水木金金——日夜をわかつたぬ猛訓練を續け明日戦争が起つても、必ず勝つといふ自信を持つまで、グングン腕を磨き、いつかの必ず備へるべきその日のために、加藤司令長官以下艦隊將士血みどろの猛訓練だ——それが一應結末を告げて母港に歸ると、大將は眞先きになつて『小松』を訪れ、幕僚や部下の勞苦を慰め、みづからもホツと、しばしの憩ひをするのであつた。

その陸上での憩ひも、ほんの数日である。息を休めたといふ暇もなく、またも出港。連日長期の寒暑を超越した洋上の猛訓練がつゞけられるのであつた。

『ほんとに御苦勞様ともなんとも言ひやうのないほどでした。わたしは海軍の設けられた始まりからのことを知つてゐますが、加藤閣下の聯合艦隊長官の時代の猛訓練といふものこそ日本海軍はじまつてからの物凄い激しい訓練だと思ひます。あの美保の關沖の軍艦神通と驅逐艦蕨の衝突事件の時など、あんな大きな犠牲を出すほどの訓練をやるのは間違つてゐると、世間から轟々と非難されたものですがね。あのときの加藤閣下の御決心と御苦心は、實

に涙がこぼれます。——世間がなんといはふと、おれはやる！ いまに判る時が必ず来る！——とおつしやつて、目をつぶつてお盆のみほしになつた、あの御顔が……いつまでもわたしの臉に残つてゐますよ。』

と、加藤大將の亡き後、九十歳になつた老女將は泌みくくと述懐してゐるのであつた。

海の荒鷲航空戦隊

中村、末次、高橋の三羽鳥

『末次、中村、高橋の三提督を加藤寛治大將の三羽鳥といはれた時代がありました。それは